

資料

(昭和六十三年十月)

第三十三回「合宿教室」(島原)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

—“合宿教室”33年の歩み—

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	" 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	" 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	" 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	" 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	" 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	" 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	" 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	" 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	" 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	" 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	" 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	" 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	" 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	" 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	" 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	" 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	" 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	" 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	" 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	" 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	" 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	" 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	" 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	" 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	" 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	" 57年	霧 島	321	齋藤忠・篠敏郎・幡掛正浩
28	" 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	" 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	" 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	" 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	" 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	" 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
累計・参加人員				9,796名

第三十三回 『合宿教室(島原)』全参加者の感想文と和歌詠草



と き 昭和六十三年八月六日(土) から十日(水) まで
 ところ 長崎県・雲仙国立公園隣接「島原グランドホテル」
 参加総数 二二七名

目次

『はしがき』に代へて……………	理事長・小田村寅二郎……………	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……………		5
『合宿教室』の日程表(四泊五日)……………		6
第33回『合宿教室』のあらまし……………		7
感想文と第二回目の『和歌詠草』……………	参加者全員……………	31
和歌詠草……………	合宿中の第一回目の創作作品……………	105
あとがき……………		130
カメラ・レポート36枚(33ページから103ページまで、左ページに掲載)		

“はしがき”に代へて

小田村寅二郎

(本会理事長・元亜細亜大学教授)

昭和三十一年の本会創立以来、一年も欠かすことなく続けて来た“合宿教室”は、本年は第三十三回目を八月上旬の四泊五日間(リーダー学生による事前合宿をそれに先立って三泊、事後検討合宿を本宿合後一泊、従ってリーダー学生にとっては合計八泊九日間)、九州・長崎県・島原の「島原グランドホテル」で開催いたしました。このホテルの上の階からは、ひろやかな有明海が見渡され、お天気の良い日には対岸の山々も眺められ、その景色に参加者一同は心のなごむ思ひをしたことでもありました。宿舎側の設備も心くばりも行き届いてをり、この“合宿教室”独自の日程の運びにもきはめて好都合でした。

全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君(四五大学から、男女学生一一九名、社会人及び関係者一〇八名、計二二七名)は、旅装を解く間もなく開会式(八月六日午後二時)に列席し、開会宣言、国歌斉唱二回、祖国のために尊い生命を捧げられた先人の御霊(みたま)に一分間の黙禱を捧げたあと、参加学生を代表して、リーダー学生の一人、中央大学文学部四年の久保田真君が「この四泊五日間を、お互ひに心を緊張させて、語り合ひ、平素の大学生生活に比して何倍もの経験をしようではないか」と訴へたのに対して、全参加者は“この合宿教室に参加したからには、自分から進んで飛び込んでいかななくては”との気持ちにさそはれていったやうでした。場所もよし、空気は殊のほか澄み切つてゐる有明海のとおりで、夏山の展望を窓外に眺めながら、今年の合宿教室はこのやうにしてスタートいたしました。

お招き申し上げた講師の、歴史家・兒島襄先生と東大教授・小堀桂一郎先生は、それぞれお心こもる御講義と質疑に対する御応答を、長時間にわたってしてくださいました。特に“東京裁判”の実状と“東京裁判史観の克服”についての両先生のお話は、一同に深い感銘をお与へくださったことでした。また、主催者側講師の諸氏の講義をはじめ、登壇者諸氏の発言

に対し、それらを一言も洩らさずに熱心に聴き入ってゐた参加者たちでしたので、場内には、ピンと張りつめた緊張感のみならず、この「合宿教室」ならでは、真摯な求道場が日を追ふにしたがつて、次第に充実感を深めていくことになり、第二日目の午後、小柳陽太郎先生のお話のあと御在位六十年を奉祝して作成された映画「天皇陛下」を一同で鑑賞して深い感動を得たことも相まって、まことに嬉しい次第でした。

さて、この「合宿教室」では「学問」と「人生」と「祖国日本」と「世界平和」といふ四つの命題を今年も掲げましたが、いまの日本の大学生活では、これら四つの命題に何らの統一性・関連性が見られず、バラバラな教説が無反省に錯綜してゐる気配が多いため、この合宿教室では、そのことへの指摘と反省の上に立つて、この四つの命題を何とかして各自の心に統一的に把握してもらはうと、参加者諸君に強く期待しました。はじめのうちは、いろいろな抵抗や反感を持たれた方もをられました。しかし日程が進むにつれて、濃淡の差こそあれ、ごく一部少数の学生を除きほとんどの参加者諸君は今日の大学が「心を鍛へることの重要性」を忘れてゐること、また、知識偏重と学問の分化が精神の混迷をもたらしてゐること、などについて、これらの欠陥を欠陥として認識し直すと共に、それらへの対処には、結局一人びとりが、学問の名に値する真の総合的な学問を求めて学生生活を確立するのになければならないこと、さうしなければ、これからの日本の発展に寄与することにはならない、といふ重要事をとらへてくださった、と思はれました。このことは、主催者として何よりも頼もしく思ったことでした。特に今回は、日本の文化のすばらしさが、諸講師によって具体的に説かれたことは、参加者一同の心に沁み入る成果であつたと回想されます。

一方、大学生諸君にとって、「友情、友との付き合い」の問題は、大切な関心事でありますので、上っつらだけの遊び友だちではなく、真に心を許し合ふことの出来る友だちを持ちたい、といふ願望に対して、この「合宿教室」では、「こちら側がどういふ心掛けて自分自身の心を整へて相対していけば、真に心を許し合へる友と出会ふことができるか、それにはど

う努力すべきか」についても、各班ごとに、胸襟を開いての班別討論、輪読、各自が詠んだ和歌についての相互批評などを通じて、真の友だち付き合ひについての具体的な経験を積んだことは、各自の大きな収穫となったことと思はれます。また合せて、「読む書物の選び方の如何が、自分の人生にとってどんなに重要なかかはりをもつか」、また、「読書に際して「輪読」といふ勉強の仕方が、独りで読むのに比してどんなに深い意味合ひを持つか」についても、真剣に考へてもらへたことと思ひます。

さて、ここに編したこの『感想文集』は、全参加者が「解散の間ぎは」に走り書きしてくださったものです。全文をそのまま載せ得なかつたのは、紙面の都合でやむをえぬことで、ご容赦いただきたいと存じます。「この文集全体の編集」は、防衛施設庁・技官の山根清さん、日本興業銀行・行員の小柳志乃夫さん、日本油脂・技師の上村栄章さん、日産自動車・社員の福島徹男さん、早稲田大学・大学院生の八木秀次さん、タマポリ社員の吉川理夫さん、竹中土木・社員の國分俊喜さん、中央大学・学生の秋山信之さん、ならびに在京会員多数の協力によって進められました。また「合宿教室」については国民文化研究会・会員の方々が纏めて下さり、巻末の第一回目の「和歌詠草」については、福岡県立筑紫丘高校・教諭の酒村聰一郎さんと福岡県立支洋高校・教諭の矢永（旧姓、結城）誠二さん、福岡市立弥永小学校・教諭の是松秀文さんをはじめとする福岡在住会員が、それぞれ多忙な日常をさいて、選歌をしてくださいました。

今夏の「合宿教室」に参加された方々、またこの文集をお読みいただく方々にお願ひ申し上げたいことは、どうか全ページを通して御判読いただきたい、といふことであります。

なほ、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に對しまして、会員一同に代り心から厚く御礼を申し上げます。



「第33回青年宿教室」記念撮影（参加者 227 名）於・島原グランドホテル

参加者

（学生班 四五大学）（洋数字は参加学生数）

- 中央大12 早稲田大9 拓殖大8 亜細亜大7 熊本大6 九州大5 鹿児島大5 西南学院大5 防衛大4 徳山大4 尚綱短大4 福岡大3 日本大3 千葉大3 中村学園大3 島根大3 北海道工大2 東京大2 長崎大2 岐阜大2 九州女子大2 京都橘女子大2 国士館大1 城西大1 関西大1 山口大1 東北学院大1 成蹊大1 九州産大1 九州共立大1 慶應大1 東洋大1 国学院大1 佐賀大1 同志社大1 攝南大1 佛教大1 北里大1 杉野女子短大1 北九州大1 広島文教女子大1 広島大1 長崎商科短大1 甲南女子大1 九州リハビリ大1
- 計 一一九名（うち女子三十名）

（社会人・教員班）会社員 教員など

計 二五名

（招聘講師）二名（国民文化研究会）六九名（事務局）

十名（見学者）一名（写真）一名

総合計 二二七名

第33回“全国学生青年合宿教室”日程表—昭和63年8月 { 6日(土) } 4泊5日間
(1 9 8 8 年) { 10日(水) }

主催 (社団法人・国民文化研究会
大学教育有志協議会)

	8月6日(土) (第1日)	8月7日(日) (第2日)	8月8日(月) (第3日)	8月9日(火) (第4日)	8月10日(水) (第5日)	
(注) ↓ 会場入口受付で、一班八名前後の班編成です。	6:30	(起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操)	(起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操)	(起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操)	(起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操)	6:30
	8:00	(8:00) (講義) 歴史家 児島襄先生	(8:00) (講義) 東京大学教授 小堀桂一郎先生	(8:00) 【堀徳太子の信仰思想と日本文化創案】 (輪読導入講義) 福岡県立福岡中央高校教諭 占部賢志氏	(8:00) (講話) 国文研・理事長 小田村真二郎先生 (8:40) 参加者による (全体感想自由発表)	8:00
	10:00	(10:00) (10:10) (10:40) (10:50)	(10:00) (10:10) (10:40) (10:50)	(10:00) (10:10) (10:40) (10:50)	(10:00) (10:10) (10:40) (10:50)	10:00 10:10 10:40 10:50
	11:00	(11:00) (11:10) (12:00) (12:00)	(11:00) (11:10) (12:00) (12:00)	(11:00) (11:10) (12:00) (12:00)	(11:00) (11:10) (12:00) (12:10)	11:00 11:10 12:00 12:10
	12:50	(12:50) (班別討論)	(12:30) (班別討論)	(12:30) (班別輪読)	(12:30) (講話) 国文研・監事加納祐五先生 (1:10) (1:20)	12:00 12:10 1:10 1:20
	2:00	(2:00) 開会式・合宿趣旨 説明・諸注意伝達	(2:10) (講義) 九州造形短期大学教授 国文研・副理事長 小柳陽太郎先生	(2:30) (短歌創作導入講義) 福岡市立永水小学校教諭 足松秀文氏	(2:30) (2:40) (講義) 国文研・常務理事・事務局長 長内俊平先生	2:30 2:40
	2:50	(2:50) (3:00) (班別自己紹介)	(3:40) (映画上映) 【天皇陛下】	レクリエーション (雲仙仁田峠 登山)	(3:40) (3:50) (班別討論)	3:40 3:50
	3:00	【日本への回帰第23集】 (班別輪読)	(4:30) (班別討論)	(5:00) (班別輪読)	(4:30) (4:40) (5:00) 大挙別・地区別懇談	4:30 4:40 5:00
	5:00	(5:00) 夕食 入浴 散歩	(5:40) 夕食 入浴 散歩	(5:00) 夕食 入浴 散歩	(5:00) 夕食 入浴 散歩	5:00 6:30
	7:00	(7:00) (合宿導入講義) 日本興業銀行・行員 小柳志乃夫氏	(7:00) (講義) 九州女子大学教授 国文研・常務理事 山田彌彦先生	(7:00) (体験を語る) 澤部寿孫氏(日野岩井・部長) 松本幹男氏(拓大・助教) 松本幹男氏(拓大・助教)	(7:30) (7:40) (7:30) (7:40) 宝辺矢次郎氏	7:30 7:40
	8:00	(8:00) (8:10) (班別討論)	(8:30) (8:40) (班別討論)	(8:20) (8:30) 慰霊祭執行	(8:00) (班別) (短歌相互批評)	8:00 8:10
	9:00	(9:30) 就床	(9:30) (班別懇談)	(9:30) (班別懇談)	(9:30) (9:40)	9:30 9:40
	10:00	(10:00) 就床	(10:00) 就床	(10:00) 就床	(10:00) (夜の集ひ)	10:00
	10:30	(10:30) 消灯	(10:30) 消灯	(10:30) 消灯	(10:30) 消灯	10:30

- (合宿心得)
- 1 同じ班の人々のあひだに限らず、全参加者一体となって、心の交流をはかっていたきたい。
 - 2 上記の日程は、合宿中途において一部変更されることもある。
 - 3 集合は厳速に行ふこと。
 - 4 講義の時間には、会場に講義開始5分前までに、必ず入場すること。
 - 5 講義のはじめと終りは正坐し、司会者の指示に従って講師に礼をすること。
 - 6 講義中は服装・姿勢に留意し、不作為は慎むこと。
 - 7 講義会場、自室をはずす、形質に入るときは、スリッパを、必ず向ふむきに、そろへておくこと。
 - 8 質問は、司会者の指示をうけて行ひ、質問のはじめに
 - ① 班名 ② 学校名と学年(社会人は製菓先) ③ 氏名を、明瞭な言葉で告げること。
 - 9 講義会場における席順は、その都度移動するので、必ず班別に、指定の場所にとまらせて、着席すること。

第33回 “合宿教室” のあらまし

第一日

(八月六日・土曜日)

昭和六十三年八月、全国各地の学生青年が雲仙の島原の地に、はるばると集まって来た。「友よと呼べば友は来たりぬ」と合宿教室へ向ふ道に掲げられた垂幕のこの言葉は、参加者の心にはすがすがしい気持ちと合宿に対する期待を抱かせた。

開会式

参加者一同が会した講義室に中央大学三年三林浩行君の開会宣言が響き渡り、国歌斉唱に続いて、戦時、平時をとはず、祖国日本のために尊い生命を捧げられたすべての祖先のみたまに対して、一分間の黙禱が捧げられた。続いて主催者を代表して国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生は「現在の大学では知力を働かせることが主であるが、日本人が大切にされて来た心を働かせることが欠けている。この合宿教室では心を働かせ沁々と受けとめ物事に当ってゆかれることを期待します」と語られ、「大学の格差、年齢、学年、男女の差を超えた一人の人間、一人の日本人として付き合ひ、一所懸命に取り組んでほしい」と合宿教室の主旨について語ってゆかれた。さらに、この合宿教室の中で特別に設けられた和歌創作、天皇の御製、聖徳太子の輪読の意味について触れられた。

ついで、参加者を代表して中央大学四年の久保田真君が「一人一人の真剣な姿によって、すばらしい合宿にしてゆきませう」と元氣よく挨拶した。

続くオリエンテーションでは、本合宿の運営委員長、長澤一成氏（福岡県福岡市・浜の町病院医師・31歳）が班構成、合宿運営体制などを説明後、所感として合宿参加者の申し込みのアンケートに触れ乍ら「皆さん様々な思ひで合宿に参加されてをられるが、皆さん

に共通してゐることは、大学あるいは職場で満されてゐない、何のためにどの様に生きてゆくのか素直に心を開いて語る友も場所もない、といふことかと思ふ。この合宿教室では、我々が何を大切にして生きてゆくのかといふ問題について青年と青年との魂をぶつけて、共に考へてゆきたい」と参加者全員に強く訴へられた。

続いて、合宿細部にわたる注意事項が指揮班長・寂知浩一氏（俣扶桑社勤務・27歳）によって伝へられた。この後、直ちに参加者は各自に割り当てられた班室に入り、合宿参加の動機や、日頃の生活ぶりなどを含めた「自己紹介」を行ひ、続いて、昨年の合宿教室のレポートである『日本への回帰―第二十三集』の輪読に入った。

合宿導入講義「歴史と人生」

東京大学・法・54年卒・俣日本興業銀行勤務 小柳 志乃夫 氏



小柳氏は初めに、芥川竜之介流の「人は所詮動物だ」といふニヒルな考へ方に対して、吉田松陰の「凡そ人と生まれたらば、人の禽獣に異なる所以を知るべし」（土規七則）といふ言葉を示され、偉人を自分と同じレベルに引き降り降して安心する現代の風潮は、人の価値を考へなくなつた時代の反映ではないかと述べられた。更に「人の価値は真心で計る」といふ河村幹雄博士の言葉を引用され「人にぶつかつてその真心を知る、それが松陰にとっての学問であり、合宿でもそれを考へていって欲しい」と求められた。

そしてアルメニア出身の作家サローヤンの小説『人間喜劇』から、感銘深い一節を引用された。誕生パーティーをしてゐる家に戦死の電報を配達した少年ホームマーは家族の悲嘆を思ふと口もきげず、泣き乍ら走り出し、町を眺めた。「その時イサカに住んでゐる人々を本当に知つたんだよ」と彼は母に言ふ。氏は「歴史上の人物は客観的に見なければならぬといふが、涙ながらに見て初めて人の生きてゐる様子が分かつて来る、本当に知るといふのはさういふ事だと思ふ」と語られた。

次にリンカーンのゲティスバーグ演説について「これはこの地の激戦でなくなった四万人の戦没者に対する鎮魂の言葉であり、リンカーンは人民の上に、自分達の献身の対象としての戦没者を仰いだ。日本では生きてゐる者の幸せが第一になつてゐるが、死んだ人のことはどうでもよいのか」と、奥野発言や東京裁判、「生者を死者と結びつけるきずなを切断した」(江藤淳) 占領軍の検閲の問題に言及された。

最後に、戦死者の供養に半生を捧げられた戦艦武蔵艦長の未亡人に関する新聞記事を読んでいかれ「かういふ人の人生を思ふ時『君のみ声はあゝ還り来ず』といふ絶唱を静かに感じたい。そしてもう還つて来ない、亡くなった人たちのことを、愛惜の念で大切に考へたい」としめくゝられた。

講義の後、全参加者は班室に戻り、班別討論に入った。講師の訴へられんとされた事はどのやうなことが、どこに感銘を覚えたかを中心に討論は進められた。

尚、この班別討論の時間は各講義の後に設けられ、お互ひが心に湧き上がる思ひを率直に語り合はうと努めながら討論が行はれた。最初は自分の思ひをなかなか言葉にできないもどかしさが感じられたが、回を重ねるごとに熱気を帯び、時に反発し合ひ、時に共感し合ひながら、班員相互の心の交流は深められていった。

第二日

(八月七日・日曜日)

合宿の日程は、毎朝六時半に流れる「日本唱歌」の清々しいレコード音楽から始まる。洗顔と清掃を済ませた全参加者は、眉山を背後に望む広場に集合、朝の集ひに臨んだ。「国歌斉唱」「ラヂオ体操」「連絡事項の伝達」が行はれ、一同、今日一日を過す心の準備を整へられる。

講義「東京裁判と東京裁判史観の克服」



先生は、学生時代に東京裁判を直接傍聴された御体験に即して講義をされた。先生は、「この裁判を思ふと、幼少の頃、祖母が私に幾度も話した戊辰戦争の事が浮んで来ます。薩長により会津は一朝にして朝敵の汚名を着せられました。同じ様に、この法廷においては、つい先日まで聖戦と信じられてゐた日本の行動が、一朝にして侵略戦争と断ぜられたのです。しかし、被告席の方々は取り乱さず端然としてをられた。後年目にしたニュルンベルク裁判の被告達の傍若無人の態度とは対照的でした。見ると、判事は日本が直接戦つてゐない国からも出てゐる。全体として、被害者意識を持つ国々の報復の裁判ではないか」とその折の印象を語られた。そして先生は裁判の進行を辿りつつ、批判を展開してゆかれた。

「まづこの裁判は、占領といふ特殊な状況下でしか効力を持たないのです。何故なら、国際法では、戦争行為自体を裁く事は出来無いからです。更にこの裁判では『平和に対する罪』といふ国際法に無い罪が新たに設定され、裁かれた。これは法の不遡及の原則を破つてゐます。それに、国家の責任を個人にとらせるのは法理上をかしい。また、法廷では、太平洋戦争以前に遡つて昭和三年からの日本の行動が審議にかけられた。パリ不戦条約締結時から裁かうとした訳です。しかし、そこまで遡るなら、問題となるのは日本だけではない。それでも連合国側は、キーン検事が言つた様に、『原告は文明だ』として、日本を天に代つて裁かうとしたのです。この様な状況にある時、朝日新聞の社説は、『私達日本人の愚か度みじめな過去十数年間がかれる』と書いた。自虐的な感じを受けました。法廷でも、『日本は侵略戦争をした』と言はれたが、アグレッション（侵略）の内容は結局明確にされぬままに終つて了つたのです。だから、バル判事が言ふ様に、『日本は挑発をうけた。モナコやルクセンブルクの様な小国でも日本の立場にあれば立ち上つたらう』といふのが国民の率直な気持ちであり、朝日が書いた『裁かれるのは国家・国民・歴史である』といふ見方は、むしろ歴史をゆがめる感を受けたのです。そこで日本側弁護団は、天皇に御迷惑を及ぼさぬ事、個人弁護よりも国家弁護を優先し侵略国と銘打たれぬ事を方針としましたが、以後の裁判は個人の責任を追及するのみでしたので、国家を弁護する機会が得られなかつたのです」この様に、裁

判は多くの問題を蔵しながら進行し、つひに判決が下された。先生はその日だけはとても法廷に行く気になれず、ラヂオで放送される宣告をいたたまれぬ思ひで聞かれたのであった。

そして先生はまとめに入つてゆかれた。

「一般の裁判とは違ひ、一国の指導者を処罰したこの東京裁判は、全く政治的な裁判だったので。法廷では史実が確認されたのではなく、政治的な主張がなされたのであつて、『東京裁判史観』と呼ぶべき実体はないのです。そこで思ひ出すのは戦時中一高にゐた中国人留学生の事です。彼等は『我々は帰国して蒋介石軍に加はる。戦場で会つたら堂々と戦はう』と言つた。私達は国に一身を捧げるこの言葉に拍手を送りました。しかし今、彼等の姿は歴史に跡を留めてゐない。ここでも歴史が政治によつて裁かれてゐるのです。ある西ドイツの地理学者は、『過去否定型の歴史観は、やり切れない自己嫌悪を生んだ』と嘆いてをりました。先人の非には我が身を切られる様な痛みを感ずる事が必要なのです。過去を現在の考へて見ても理解出来ません。その時代を生きて倒れた人へ一掬の涙が注がれた時に、初めて歴史は教訓の口を開くのです」この様に、歴史に対する基本的姿勢に言及された後「歴史を徒らに恐れる必要はありません。自分の目で歴史を直視し、自分の史観を育てていって下さい」と呼びかけて講義を結ばれた。

講義「喜びも悲しみも民とともにして」

九州造形短期大学教授・国民文化研究会副理事長 小柳陽太郎 先生

先生は、今上天皇がこれまでに多くの御製を作られて、陛下の歌集『みやまきりしま』『あけぼの集』、その他年毎の歌会始の御歌等により、既に六百余首にのぼる御製が発表されてゐることを指摘され、講義において具体的に陛下の御心を偲びながら、御製を一首づつ読み味はってゆかれた。最初に昭和六十一年に須崎の御用邸にてハレー彗星を御覧になつて詠まれ



た御製、「晴れわたる既空に彗星は尾をひきながらあをじろく光る」に触れられ、陛下が如何に集中して彗星をみてをられたか、又、それに続く「伊豆の海あまたかがやくいさり火に海人らのさちをこひねがふなり」といふ御歌に触れられ、陛下の目が夜空の星から沖の漁火にむかはれ、そこに働いてゐる漁師達に思ひをはせられたことを、又参考にあげられた昭和四十四年の御製で同じくハレー彗星を詠まれたものが、実は明治四十三年に御年十歳の頃見られた折のハレー彗星のことであり、実に六十年近くたってその時の感動を詠まれた事実を指摘された。

続いて先生は、終戦時の御製を読まれ、陛下の悲痛なまでの国民を思はれる御心を偲ばれ、又、当時情報局総裁であった下村海南の『終戦秘史』の御説（天皇の御言葉）の一節を時折声をつまらせながら読み上げられた。そして「現在の教科書では終戦といふ歴史もその影しか記されてをらず、歴史を思ひ出すことが出来なくなつてゐる。本当に信じ合ふ心が歴史を甦らせるのです」と語調を強めて語られた。

最後に先生は、伊藤たかといふ名もない一人の日本女性が陛下の身上を思って、マッカーサー元帥へ出した直訴状を読まれ、「世の中は疑へば皆疑はしいことばかりかもしれないが、人間の真実は確かにあり、それを信ぜずしてどうして生きてゆけるか」と語られた。

映写会「天皇陛下」（御在位六十年奉祝映画）

映画では陛下の御生誕から現在に到るまでのお姿が映し出された。特に大東亜戦争といふ未曾有の出来事を国民と共に乗り越えられ、戦後人々を励ますため御自ら足をお運びになられた全国御巡幸の様子に一同深く感銘を覚えた。そして折々に触れてお詠みになられた御製により、陛下の常に平和を祈念され国民の幸福を願ってこられた御心が偲ばれて来た。

九州女子大学教授・国民文化研究会常務理事 山田輝彦先生



先生はまづ鷗外について「彼は、男性としての役割、公的な軍医としての役割、自分に与へられた日本を近代化してゆかねばならない知識人としての役割、これらの役割をほとんど完璧に果たした人です」と語られ、彼が近代化途上の日本の中で、どのやうに自分の役割を演じていったかについて、彼の遺した言葉を辿りながら話を進められた。

初めに、鷗外が明治十七年から二十一年までの四年間（二十三歳～二十七歳）のドイツ留学中に書かれた『独逸日記』の中から「架上の洋書は已に百七十余巻の多きに至る（中略）誰か来りて余が楽を分つ者ぞ」といふ言葉を紹介され、「学問は楽しみがなければならぬ。ドイツ留学中の彼の心の弾みがよく表はれてゐる」と述べられた。

次に、鷗外が小倉に左遷された時に書かれた『小倉日記』の中から、いくつかの例をあげられて、一身上にふりかゝった不幸な出来事とそれに対する彼の苦悩の有様を偲ばれた後、乃木將軍との交流について言及された。その中で、日露戦争の旅順攻略戦の際の乃木將軍の姿をつぶさに見て、その様子などを歌った『うた日記』について「これは鷗外の絶唱であり、日露戦争の文学の中では最高の文学です」と讃嘆され、このやうな作品が今の教科書では全く無視されてゐることに對して痛憤を込めて批判された。

最後に先生は「歴史を学ぶとは、歴史の中で生きた人間を学ぶことであり、人間を学ぶとは、その人間の遺した言葉を学ぶことです」と語られ、更に「自分の天から与へられた役割を生涯かゝって立派に成し遂げ、我が事において後悔なし」

といふ人生を送って下さい」と力強く訴へられ、御講義を終へられた。

第三日

(八月八日・月曜日)

講義「国家と我々——防衛問題について考へおくべきこと——」

東京大学教授 小堀桂一郎 先生



まづ、先生は、国家の構成要件は「人民、領土、主権」の三要素である、といふ矢部貞治氏の所説を紹介されて「現在の日本に於いては、人民、領土については安定した合意があるもの、主権については合意がなされてゐない。即ち、現憲法は国民主権を謳つてゐると言はれるが、原典である英文を素直に読むと、主権は国民と共にある、と読むべきではないか」と指摘され「主権は一国の対外独立権、行動の自主決定権であり、具体的には国家が自らの存在を維持し、且つ防衛する権利と考へ得る」と説かれた。さらに先生は、「領土、人民、主権に対する外からの侵害がある時、国家は自己防衛に立上り、国民の間に国家意識が高揚する」と述べられ、次に日本における国家意識の歴史を辿つてゆかれた。

まづ「白村江の戦」以後の防人の国家意識を万葉集に辿られ「防人の歌にはうらみがましい表現はなく、武士としての克己心が表はされてゐる。『大君のみことかしこみ』国家防衛の任に、戦士の誇りをもって出向いたのです」と述べられた。ついで、二度に亘る元寇に触れられ、当時の武士達が「お家の一大事」に馳せ参じたのではなく、朝廷の命を奉じて国難に赴いたのである、と指摘され、更に一六世紀のキリスト教東漸に対しての国家意識の高揚に及ばれた。

次にペリー来航より百年間は、日本始まって以来の国難であり「東亜百年戦争」(林房雄氏)の期間であったと位置付けられ、この間日本は先進諸国から、主権と人民について各々不平等条約、人種差別といふ形で侵害の危機を受けてきたと指摘された。そして、大東亜戦争とは、宣戦の詔書に示される如く、米英両国の圧力に対して自存自衛の為日本国民が敢然と立ち上がったものであり、利権に発したのではないと喝破され、「その時万葉の防人の精神が蘇ったのです。天皇が先頭に立って国民を守ってをられる。戦死とはその陛下に身を捧げることであった。国土を思ひ、父母を思ひ、妻子を思ふ一人の国民の総意——目に見えない連関——が天皇といふご存在に象徴され、具体化されてゐたのです」「日本の歴史において皇室と国民の関係は、心情的な美しい関係だった」と示された。

最後に、現代における国家と我々について、先生は、憲法上天皇の機能には限界が設けられ、「今の日本人は大君のみこを奉ずべきすべを失ったのです。一朝、事あった時にどうするか。総理大臣が忠誠の対象たりうるのか」と我が国の国防の重大な欠陥を指摘された。そして、我々に、国を守るかどうかの態度の表明を迫られた時に、自分の考へが述べられるやう、常に自前の意見を持つことが大切だと話され、御講義を終へられた。

短歌創作の手引き

福岡教育大学・教・59年卒・福岡市立弥永小学校教諭 是松 秀文氏

是松氏は、教へ子の短歌についての感想文を紹介され、「短歌といふのは心を落ち着かせ、人の心をきれいにしてくれるものであり『自分を見つめ直すものだ』と述べてゐるが、これは短歌の本質に触れてゐる言葉ではないでせうか」と話された。

次に、学生時代の事を振り返られ、下宿の玄関の花をかへて下さったおばあさまへ感謝の歌を贈り、おばあさまが涙を流して喜ばれたといふ体験から「短歌は自分の心を修養するだけでなく、人



の心と心をつなぐものだと感じました」と話された。

次に、作歌上の留意点として「自分の体験を正確によむ」「字余り字足らず」「用語」「一首一文」「感動の深いことをよむ」「連作短歌について」等について丁寧に説明された。

最後に「国民同胞」（国民文化研究会機関紙）に掲載した自身の教育体験を綴った文章に対して、見ず知らずの元東北女子大学学長神守夫先生からお手紙を頂いた事、その先生が長内俊平先生のご友人であられる事を後で知った事等に触れてゆかれた。そして、長内先生が神先生に寄せられた御歌の一つ一つ読み上げられ「これを読んだ時、三人の心が一瞬の内に繋がったやうな気がしました。敷島の和の国が言霊の幸はふ国であると実感しました」と述べられ、講義を終へられた。

レクリエーション

この後、全参加者は、各々バスに乗り、楽しみにしてゐた雲仙、仁田峠へと出発した。快晴にめぐまれた仁田峠では展望台より眼下に広がる有明海を眺めたり、さらに徒歩やロープウェイで妙見岳まで登り、自然や景色を満喫して合宿教室の疲れを癒した。また中には足をのばして仁田峠の近くにある今上天皇の左記の御製歌碑（吉田茂書）を訪ねた者もあった。

今上天皇御製

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

体験を語る

最初に、日商岩井㈱に勤務する澤部寿孫氏（長崎大学・経・39年卒）が登壇された。氏は現在も心に生き続けてゐる学生時代の経験から話された。氏は昭和三五年日米安保改正をめぐる大学生まで参加した岸内閣反対闘争の真最中に大学に入学した。間もなく開かれた学生大会で、流れに身を任す学生の言葉を聞き「けっしてノンポリにはなるまいと思つた」と語られた。その後この合宿に



参加し、和歌にふれた喜びと自分の言葉を正確に聞いてもらふといふ体験をされ、その事は現在の仕事の中でも生きてゐると語られた。氏がカナダでの仕事が行きづまっていた時、壁に貼っていた次の和歌に同僚の方々が感動した事を話された。それは「極ればまたよみがへる道ありていのち果てなし何かなげかむ」「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」など三首であった。最後に、私達に「喜びをわかち合ふ力を養って欲しい。日本の歴史を正確に学んで欲しい」と訴へられて話を結ばれた。続いて拓殖大学外国語学部教授の松本幹男氏（東京外国語大・蒙古語・42年卒）が登壇された。氏は「この合宿は学ぶ事のもと、生きるもどだと思ってる」と語られ、さう思ふに至った経験を語ってゆかれた。氏は大学卒業後、五カ国に留学し言語学の勉強をしてゆかれた。アメリカで「生成文法」を勉強してゆくうちに、日本では思はなかつた事を思ふやうになつたと次のやうに語られた。「細かいテクニカルな事をやってゐるうちに虚しくなり、同僚がきれいに分析してみせても意味を感じなくなり、真理がわからなくなるのではないかと思つた」と。そして「日本人は言葉と心を切り離して客観的に取り扱ふ事になじまないし、言葉を通して心を磨くものだと考へて来てをり、その事を先頭に立ってやって下さつてゐる方が天皇陛下であるといふ事ははっきりわかつて来た」と語られた。最後に、「私の本当に言ひたかつた事は、外国に行く前にこの合宿に來なさいといふ事です」と語って話を結ばれた。

慰霊祭

「慰霊祭」に先立ち、森田仁士氏（北九州市立八幡病院勤務・32歳）によって慰霊祭の説明が行なはれた。その後、満天の星空の下、屋外の広場に設置された祭壇の前に全員が整列した。まづ、参加者の心をととのへるべく、故三井甲之先生のますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の和歌朗詠により慰霊祭は始められた。

次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする降



神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して、宝辺正久先生が祭文を奏上され、明治天皇の御製を小田村四郎先生が拝誦された。続いて玉串奉奠の後、全員で「海ゆかば」を斉唱、撤饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は滞りなく終了した。左に慰霊祭に於ける祭文と拝誦された御製を記しておく。

祭文

秀峰雲仙岳のみ前に立てる眉山の麓こ島原に集へるわれら第三十三回全国学生青年合宿教室参加の者達遠く連る筑紫群山天草の島々を望みては朝夕に学びこしこの海の辺の広庭を斎庭と定めまつりとこしへにみ国守ります遠つみ祖達をはじめみ国のためにいのちを捧げたふときみ国を守りましましものほらから達のみたまを招ぎまつりてみ祭り仕へまつらむとす戦火おさまりて四十あまり三歳わが国の世界における地歩いよいよ高まりゆけどもわれらが緩び怠りの打ち重りて掛けまくも畏き御代御代のすめらみこと御代御代を仕へ奉りしみ祖達のたふときまごころを学ぶことさへ忘れ果てたるさまを驚きかへりみしめられつつあるときは大御歌を心に味はひまた諸講義に耳を傾け思ふことかたみに語り歌に述べつつ心一つに合宿教室を営むさまを畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひみ国のゆくてを守らせ給へとこの合宿教室参加者一同に代り宝辺正久謹み敬ひ恐み恐みも白す

明治天皇御製

月前言志

あきらけき月にむかへばひさかたの空もしたしくおもほゆるかな

夏草

事しげき世にも似たるか夏草の拂ふあとよりおひ茂りつつ

夏山水

年年におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

蟲

たたずめば聞えずなりぬむしの聲このくさむらとおもひしものを

國

ちはやふる神の御代より受けつきし國をおろそかに守るべしやは

神 祇

神がきに朝まゐりしていのるかな國と民とのやすからむ世を

述 懷

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと

夏の夜もねざめがちにてあかしけるよのためおもふことおほくして

冬 夢

窓をうつ霰のおとにさめにけりいくさの場にたつとみし夢

をりにふれたる

むかしよりのためしまれなる戦におほくの人をうしなひにけり

鏡

國のためのちをすてしものふの魂や鏡にいまうつるらむ

をりにふれたる

世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

第四日

(八月九日・火曜日)

講義「黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』——班別輪読のための導入講義——」

西南学院大学・商・51年卒・福岡県立福岡中央高校教諭 占 部 賢 志 先生



先生は、まづ、御自身の学生生活を振り返られ、初めて輪読に参加された経験を「自分が今まで身を置いたことのない、肉声の飛び交ふ真摯な世界を感じた」と述べられ、「大学生活を通して、輪読、小林秀雄の著作を読む、自分は如何に生きるかを問ふ、といふ三点は、真剣に取り組んで来た」と語られた。

次に「輪読の大半は、苦しかったり、沈黙せざるを得ないことの連続であったが、その中にも醍醐味があった」と今日までの輪読の印象に就いて触れられ、「本を読むことが楽しいといふよりも読みたくなるやうな生活をするのが大切であることを輪読を通して教はった」と述べられた。更に、伊藤仁斎の塾で様々な人間が賑しく学び合ふ当時の様子を紹介され、「人との交渉を通じて人生を識ることは、非常に楽しいことであり、感奮する学問を続けてゆくことが、生きる力を育むものだ」と力強く語られた。

続いて、文章に向かふ姿勢に就いて、「自分の持ち得る直覚力、想像力など様々な力をひっさげて行ふ味読」を提言され「自分自身が、自分以外の何に心を動かされ、生活してゐるかをしっかりと見定めてほしい」と呼びかけられた。

最後に、具体的に太子の御本より数ヶ所を提示され、その御表現の微妙さ、文章の勢ひなどを指摘され、御講義を終へられた。

御講義のあと、三時間にわたる班別輪読にはひった。講義を導きとし、皆で聖徳太子や黒上正一郎先生の御言葉に真剣に取り組み中に意見や感想の交換も活発になり、御言葉に込められた思ひが伝はってくるのが実感できた。

講話 「Belief that ~ Belief in」

元日特金属工業㈱常務 加納 祐 五 先生



先生は、黒上先生が井上右近先生と会はれて初めて、聖徳太子の御言葉に触れられた時の御心情を、黒上先生の「みことばにつながりを得て一信海にわれも入らむとおもふよるこび」の歌を引かれながら、「一つの信を共にされるゆったりとした喜びを持たれた」と偲んでゆかれた。そして親鸞が「たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず」といふ程に法然を信じてをられたことを話されて、「人が生きるには、信じ従ふといふ Belief が必要です。ここ十年、二十年のものではなく、昔から人が伝へてきたものを信じる。そこに伝統があるのです。黒上先生は太子に、親鸞は法然に Belief in された」と述べられた。最後に「私達は日本に伝はった精神と、それを象徴して国民全部の気持ちさをまとめられてゐる天皇陛下に Belief in したい。但しこれを取るか取らないかは、皆さんの御自由です」と語られて御講話を終へられた。

講義「若き友らへ語りかける言葉——二者択一から二者融合の道へ」

国民文化研究会常務理事・事務局長 長内俊平 先生



長内先生は今日の日本は、物は豊かになったが、心は貧しくなったといふ声をよくきくが「果してさうか」と疑問をなげかけられ、明治天皇の御製「目に見えぬ人の心のよるこびも声によりてぞ聞きしられける」等を引用されながら、心にあふるる「まごころ」はその人の言葉や顔つき、しぐさに自然にあらはれることでも知られる如く心と物とは密接不離の關係にあると語られた。

また日本は現在殆んどの一次産品を輸入に依存し、その六五パーセントを外国人の船員によって運ばれてゐるにもかかはらず、金さへ払へばすむと、心の痛みも感ぜず惜しげもなく物を使ひ捨てる風潮を深く心配され「地球が何千年、何万年もかけて産み出し、蓄へたものを現代人がいたづらに消費してしまふのは、我々の祖先、後世の人達に申し訳ない。物を大事にしない人は、人も大事にしない人です」と述べられ、情報の氾濫についても、情報とは、もともと人と人との心を結びつけるためのものなのに、我々は昔の方達以上に隣人を大切にし、また友人と深い友情の絆に結ばれてゐると言へるのだらうか、と述べられた。

そして「あなたは国を思つてゐますか」、「いざといふとき国のため死ぬますか」などといふ人生の大事は理屈では割り切れないのであつて、さういふ大事を二者択一の方法でもって解答を迫ることは全く間違つてゐると○×方式を全人生の事象にあてはめようとする間違ひを批判された。

更に、親友であられた、今は亡き青砥宏一先生について、ご逝去の直前に詠まれた和歌を朗読されたながら、お二人の和歌による交流の御体験を語られ、最後に「個と全」といふ人生の大問題にふれられ、「親に不安を与へないために、諸君の志を

示してあげなさい、親は子供の志をとげさせようと思ってるのです」と子を思ふ親の気持ちを語ってゆかれたのち「お国と私達は一体不二なのです。自分達一人一人が日本そのものであることにめざめ、その二者融合の行たる『しきしまの道』を行ずることがありのままの人生を雄々しく美しく生きた祖先の生き方に学ぶといふことである。一人一人が一所懸命やることによって全体がいきいきしてくるのです。下手でいい、お父さん、お母さん、先生、お友達に歌を一首かき添へ便りを出しあひませう」と語りかけられ、御講義を終へられた。

創作和歌全体批評

九州大学・理・52年卒・山口県立高森高校教諭 宝 辺 矢太郎 氏



前日の夕刻までに、全参加者が創作し、提出された和歌は、諸先生方の選歌作業を経、直ちに若手会員によって筆写され、事務局の高校生等の深夜に及ぶ印刷作業によって三十枚近い部厚い歌稿となって全参加者に配布された。

宝辺氏は「皆さん歌稿を手にとられて、まづ最初に自分の歌をご覧になったでせう。そして自分の分身を見つめるやうな何とも面映い思ひをされたのではないか、それは自分の心を見つめるといふ大事な作業をなさったといふことです」と指摘され、更に相互批評について「自分を高みにおいて人の歌を批評するのではなく、皆で知恵を絞り、お互ひを出し合って心なごむ一時を是非実感してほしい」と語られた。続いて二十首ほどの歌を取り上げて、作者が詠まんとしたところがどこにあるかに留意されつつ、的確な批評と添削をされた。宝辺氏のユーモアを交へながらの率直なご指摘に講義室はしばしば爆笑の渦に包まれたが、また、宝辺氏のご批評を通して「痛切な体験が歌に決定的な生命を与へる」といふことが実感されてきたのである。

続いて、班別和歌相互批評が行はれた。各班毎に全員が班員一人一人の歌に心を一つによせて思ひを述べあふ中から、心

の通った研鑽の場が生み出されていった。

夜の集ひ

敵しい日程を消化してきた参加者も、この時ばかりは大いに宴に興じた。今年もまた、坂東一男先輩（朝日麦酒(株)勤務）から心尽くしのビールが届けられた。班毎に、大学毎に様々のグループが登場し、歌ひかつ踊った。「神洲不滅」「進めこの道」の大合唱によって宴が閉ぢられた後も、各班室に戻って最後の夜を尽きぬ思ひを夜の更けるのも忘れて語り合った。

第五日

（八月十日・水曜日）

合宿教室最終日の朝がきた。前夜は夜の集ひの後も、各班で心尽きぬ語りひが持たれたらしく、夜遅くまで明りの灯つてゐる部屋が多く見られた。四泊五日間に亘る合宿教室の日程も、あと半日を残すのみである。参加者一同は朝の爽やかな空気を胸一杯に吸ひ込み、声高らかに国歌を斉唱した。

講話「所感」



国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授 小田村 寅二郎 先生

先生は先づ、児島先生が御講義の中で「陛下がマッカーサーに『一切の責任は自分が負ふ』と言はれたと断定することは出来ない」と言はれたことについて、断定は出来ないが、御製から陛下がさうおっしゃったことは十分考へられると補足された。また小堀先生のご講義に用ゐられた国家の構成要件を「土地、人民、主権」とする矢部貞治氏の所説は欧州の国家観であり、具体的に、生きてゐる日本の姿を表はす定義は「一定の土地、一定の言葉、一定の伝統」であると指摘された。そ

して、先生の東欧諸国歴訪の御体験から、東欧諸国ではかつて占領されながらもそれぞれ古い歴史、伝統はしたたかに守ってきた事にふれられ、日本は連合軍の占領政策にあまりにも素直に従ひ過ぎたと言はれた。最後に、正しい国のあり方を實現していかねばならないが、大切なのは具体策に汲々とするよりもむしろ「日本の歴史をしっかりと受け止めると共に友情の世界を實現し充実させ生きる力を得ていくことではないか。この合宿はそれに気づく機縁であってほしい」と結ばれた。

全体感想自由発表

閉会式も間近に迫り、合宿教室を通しての各自の所感を全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間となった。参加者の胸には、どのやうな思ひが渦巻いてゐるのだらうか。参加の動機はそれぞれ違つても、この五日間寢食を共にし、友の言葉にそして先人の言葉に心を寄せ合つた体験は、各自の心にしかりと刻み込まれたに違ひなかつた。一人の学生がこみあげる思ひのままに登壇して発表を始めると、一人また一人と次々に壇上に立ち、所感を披瀝していった。「短歌相互批評では一首の歌に皆の心を寄せ合つた。心が通ひ合ふといふことはかういふことなんだと感じた」「感動を表面に出さないのが大人になることだと思つてゐたが、この合宿で感動することの大切さを身にしみて知つた」「日本の国には僕らが守るべき大切なものがあると知つた」「合宿教室に来る前は新興宗教の集まりのやうな違和感があつたが、この合宿は一人一人に自分自身で物事を考へさせてくれるものだった」「家族のこと、友のことがこんなに懐しく思へてきたのは始めてだった」、時には涙を浮かべ、時には笑顔で心からの思ひを率直に語る友らの真摯な姿は、実にはすがしく、聞く者に深い共感と感動とを呼び起した。

全体感想自由発表の後「運営委員長所感発表」に登壇した長澤一成氏は「昨夜遅くまで短歌相互批評に取り組まれて是松先生が『短歌創作導入講義』で語られた『短歌は人と人との間に橋を架ける』といふことを身をもって学ばれたのではないでせうか。合宿の基本がここにある」と話された。つづいて小柳志乃夫氏の御講義で紹介された『人間喜劇』のホーム少

年が自分と関係ない町の人々の悲しみを感ずることによって、町の風景が全く新鮮に見えた、といふことに感動したと話され、山田先生の言はれた「天から与へられた役割」について「自分が何を大切にして生きてゆかうとしてゐるのか、どういふ人間になってゆくのかを考へつづける大事な時期に今あるのだ」と訴へられた。「この合宿教室は『東京裁判史観』の克服や『戦後教育が悪い』ことを知らせるために開いたのではなく、人生の真実にふれることを体験してもらふのが目的です」と語り「真実」とは、例へば古典を読みそれを自分は好きであるか嫌ひであるか、その自分を知ることから始まると述べ、短歌を創り批評しあふとき、短歌に何を詠みたいか、多くの事実のなかから真実を押へて生きてゆくことと、友の歌の真実に迫ることによって友情が生れる、と説かれた。最後に小林秀雄先生の「誰もがそれぞれ同じ経験をしてゐるのです。その経験を豊かにするのは豊かな心なのです」といふ言葉、さらに「土、別れて三日なれば、刮目して相俟つ」といふ古語を紹介し、今後の互ひのつき合ひを期待しつつ話を終へられた。

感想文執筆

全参加者は班室に戻り、合宿感想文の執筆と第二回目の和歌創作にとりかかった。走馬燈のやうに蘇ってくる合宿での様々の思ひがうちつけに書き綴られた。ここにまとめた「感想文集」はその文章と和歌を編集したものである。

閉会式

全参加者が心を合はせ精魂を傾けて営んできたこの合宿教室も、最後の日程である閉会式を迎へた。先づ全員で国歌を斉唱した後、参加学生を代表して西南学院大学三年の西山博章君が「長内先生は『よき師・よき友・よき書は人生の宝』と話されましたが、この合宿でそれにめぐり会へたと思ひます。僕は今、そのことを確信をもってすばらしいと言へます。ここで得た機縁を大切にして来年またお会ひしませう」と挨拶した。

続いて主催者を代表して、国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生が「皆さんの全体感想発表を聞いて性格には開きはありますが、それぞれに心が開けたことを感じました。すばらしいことをやったのだと私も皆さんと共に思ひます」と話され、続いて「友よと呼べ

ば、友は来たりぬ」といふ言葉を紹介され「心が開かれていく者同士の間はこの『友』といふ言葉がひびくのです。我々の経験がこの言葉の中に凝縮されてゐる様に思ひます」と話された。そして「世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら」といふ今上天皇御製に象徴されるやうな本当の日本の平和を固く信じて、友と語り合ひ励まし合ひながら勉強を開始してほしい」と語られて、閉会の挨拶を終へられた。

その後、全員で「神洲不滅」「進めこの道」を斉唱し、亜細亜大学三年の木村謙二君が力強く閉会宣言を行ひ、四泊五日にわたる合宿教室は無事全日程を終了した。

式の後、お互ひに別れを惜みつつ、来年の再会を約して島原の地を後にしたのであった。

合宿に寄せられた歌

サンデン交通輸取締役自動車部長 加藤善之

心知る友を求めて集ひ来し友や生命の友とならまし

ますらをの生きゆく道は吾を超ゆる生命求めむところにあらむ

友と呼び友と応へむ若きらの集ふは國の力なりけり

さはあれど悲しきかなや世はくだち心みだるる様のたえざる

日は昇り青葉目にしむ野辺はるか山ほととぎすしきり鳴くかも

国見町役場囀託 三重野 梯次郎

尾花揺るる木槿花咲く夏の日は共にありたき御友偲ばゆ

長野県駒ヶ根総合文化センター所長 宮協昌三

つくしなる雲仙岳にたつ雲のいやたちのぼれ合宿の意気

助言者の紹介

(元)熊本県砥用町立砥用東中学校校長	北島道治	福岡県立新宮高校教諭	小野吉宣
千喜利青少年会館嘱託	岡村義一	中島法律事務所 弁護士	中島繁樹
㈱中央塩壚製作所 代表取締役	星野貢	九州大学医学部循環器内科講師	小柳左門
亜細亜大学教養部講師	笹部益弘	外務省大官房機能強化対策室 首席事務官	加來至誠
(元)法政大学人事部長	香川亮二	熊本市役所 技師	折田豊生
㈱宝辺商店 代表取締役	宝辺正久	㈱講談社校閲第三部副部長	藤井貢
舞岡八幡宮宮司	關正臣	福岡県立門司高校教諭	坂口秀俊
尚綱学園理事・事務局長兼尚綱大学講師	徳永正巳	熊本県立第二高校教諭	白浜裕
私立東福岡高校講師	小林國男	熊本県立球磨高校教諭	田之上正明
日本銀行監事	小田村四郎	佐賀県立神崎農業高校教諭	名和長泰
㈱不動産コンサルタント 代表取締役	松吉基順	日本青年協議会研修局長	多久善郎
県立佐賀商業高校非常勤講師	末次祐司	㈱金文図書出版販売	廣木寧
㈱千代田コンサルタント 常務取締役営業本部長	上村和男	福岡県立香住ヶ丘高校教諭	藤寛明
航空自衛隊第四術科学学校教諭	村山寿彦	大分県立大分豊府高校教諭	石井雅晴
九州労災病院神経内科部長	田村 潔	長崎中央郵便局第二郵便課 防衛施設庁	橋本公明
日産自動車㈱保険課長	古川 修	㈱鉄川工務店主任	山根 清
新日本製鐵㈱機械・プラント事業部・部長代理	今林賢郁	大阪府立東寝屋川高校教諭	池松伸典
㈱講談社広告第二部長	磯貝保博	福岡県立筑紫丘高校教諭	絹田洋一
小田原市立富水小学校教諭	岩越豊雄	日本青年協議会	酒村聰一郎
神奈川県立湘南高校(定)教諭	山内健生	福岡県立支洋高校教諭	前之園登美子
			矢永誠二

（株）日本油脂

那覇防衛施設局 建設部設備課

（株）日章工業 専務取締役

佐賀市立金立小学校教諭

（株）扶桑社経営管理部

福岡県立門司北高校教諭

フリーランスコピーライター

日本真空技術（株）

陸上自衛隊第八師団第八通信大隊第一中隊

早稲田大学大学院政治学研究所

学校法人徳山教育財団

福岡県立山田高校教諭

（株）蜂屋

西南学院大学聴講生

東福岡高校講師

早稲田大学四年

中央大学四年

合宿運営委員 長澤 一成・廣木 寧・小柳志乃夫・酒村聰一郎

指揮班 寂知 浩一・森田 仁士・上村 栄章・濱田 清人

中村 道陽

事務局 名和 長泰・白浜 裕・池松 伸典・橋本 公明

上村 栄章

神谷 正一

藤新 成信

前田 かおる

寂知 浩一

濱田 清人

布瀬 千代子

北浜 道

吉村 浩之

八木 秀次

中村 道陽

與島 誠央

松吉 基光

日比生 哲也

横山 朋範

大日方 学

秋山 信之

吉村 浩之・藤 寛明・横山 朋範（本会職員）

蘇原 幸絵・田籠 榮一（事務協力者）福岡県立筑

紫丘高校二年・永島 建・石井賢太郎・野口耕司・

水内健太郎・私立鶴見女子高校二年・佐久間有紀

福岡県立城南高校二年・古川文子 福岡県立筑紫丘

高校一年・音川祐一・瀬戸 学

松吉 基光

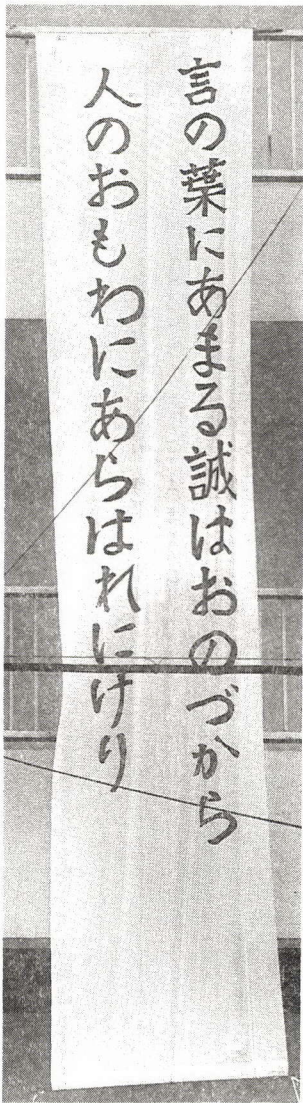
フリーカメラマン 土谷 忠臣

記録班写真班

走り書きの「感想文集」(各班別
に集録)

これは閉会間ぎはの三十分間で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回目の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してゐる跡がお分りいただけることと思ひます。



明治天皇御製「言の葉にあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり」が墨痕鮮やかに大書されホテルに掲げられてゐた。

第一班—男子学生—

良い経験だと信じ人生に役立てていきたい

(拓殖大学 外国語 四年 布施康明)

良かったと思った事は幾つかありました。それは、新しい友達が出来たことです。そのうえ、自分の心に正直に自分の思っている事を言えたのはとても良かったと思いました。各地方の大学の方々又講師の先生のお話、この度の人との出会いというものは大事にしていこうと思います。

でも合宿の生活は楽しいとは言えません、というのは朝にとっても弱いのです。夜中に行なっているバイトのせいとか、夜はあまり眠れません。講義内容も日頃読書の嫌いな自分にはとても難しく完全には把握できません。しかし、最後まで終えられたという事はそれなりに意味があることだと思いますし、良い経験だと信じ、ここでの経験を生かしてこれからの人生に役立てていこうと思っています。

合宿で経験したことこれからは忘れず生かしゆきたしと思ふ

先生方のお話がスーッと心に入ってきた

(中央大学 文 四年 久保田 真)

今年で四回目の合宿だったが、理解できたかできなかったかは別として、初めて話の内容を追へたやうな気がする。先

生方のお話しがスーッと心に入ってきたやうに思ふ。スーッと入って来たら、自分が本当に歴史にふれてゐないんだ、友の事が本当に解かってゐないんだといふ気持ちになった。歴史の機微にふれようと思ふ。友人と付き合ふ中で常に心を働かせてゐようと思ふ。

「袖振り合ふも他生の縁」といふ言葉をはじめて知りました。すばらしい言葉だと思ひます。

最後の班別懇談の前に班員が一人帰りで

テーブルを皆で囲めば合宿で話せし事も思ひ出さるるをるはずの所に君の姿なくポツカリ穴のあきし思ひす
途中より元気をなくせし君なれば君なればこそ思ひ聞きたし

忘れられない先生方の言葉

(亜細亜大学 法 三年 真田博之)

第一日目の「日本への回帰」輪読の時、国文研の小野先生が来て下さり、次のやうなことを自分の経験を交へながら言はれた。「万人の如く感じようとせず俺は俺流で感じる」といふことが大切だよ」と。この言葉を聴いた時に、体中が緊張し、言葉が頭の中を駆けめぐった。

第四日目の長内先生の御講義で、先生が優しいお声で歌を歌はれた後、「親は、君達の志を遂げさせようとしてゐる」といふ言葉を言はれた。これを聴いた時、涙があふれ出てきて仕方がなかった。何度ぬぐってもあふれ出てくる。どんなに我慢してもダメだった。頭の中でその言葉を、思ひ出さな

いやうにしても、何度も何度も浮かんでくる。浮かべば涙が流れる。どうしゃうもなかった。

班別討論の折に
とつとつと思ひを語る班友の面見つむれば胸高鳴りぬ

感じるところが多くあった

(早稲田大学 教 一年 山下 拓男)

初めてこの合宿に参加しましたが、感じるところが多くありました。厳しい日程と寝不足のため講義の時にはしばしば意識を失うこともありました。暇は開かず、朦朧とする意識の中で、しかし先生方の言葉は確実に幾本かのくさびを私の心に打ち込みました。知らぬ事を知っていると錯覚していた事に恥ずかしさが起こり、また先生の言の明快さに快よく感じつつも反対の事を思いました。

もう一つ、この合宿で奇しくも同室となった班員の皆と不断では語れぬ事を語り、自分の拙い意見を真剣に聞いてくれた事を非常にうれしく思います。

床つけど尽きぬ思ひを語らむと暇閉ぢつつ友と語らふ

友との心のつながりを大切にしていきたい

(福岡大学 法 三年 向井 昭友)

四日目の長内先生の講義の中で、昔の日本人は「袖振り合うも他生の縁」と人と人とのつながりを大切にすると豊かな心の持ち主であったという話を聞いて衝撃を受けた。自分はこ

カメラ・レポート1



全国各地より続々と参加者が到着する。受付で参加許可証を呈示し、名札と資料袋を受取ってから、各自の班室へと向かふ。

れまで本当に友人やサークルの仲間との会話の中で相手の心を憶念していたか、何か冷たい目で見ている事はなかったか、というこれまで全く気付かなかった事に気付かせられた。友人の心を大切にできないものは、英霊の方々の手記などを読んで本当にその心を憶念することはできるはずがない。

友との心のつながりを大切にしていくこと、すなわち、これから、事あるごとに、心が動いた時には和歌を作り、友を思う歌を作っていきたい。

今日よりは友の心に思ひはせ豊かな心養ひてゆかむ

「哀愍教化」の一言の偉大さに心打たれた

(國士館大学 文 二年 青木繁和)

私はこの合宿で色々な事を知り、かつ、気付かせられた。輪読の時の乱暴な読みや、仲間うちだけでしか通用しない自分の言葉に気付かせられた。

そして「哀愍教化」といふ一言の偉大さに心打たれた。人を外見で、自分の物差しで計らず、聖徳太子の如く、慈悲の心を持ち、自分の衣を人にかけてあげ、かつ共に道を求め学ぶといふ事を私も成さねばならぬと思った。とかく大学の中などで人を見下し自己を見つめる事のないこの頃、大きな一言だった。

班別輪読会

言霊の宿る言の葉おろそかに読みゆく我の恥づかしきかな

友を語る先生の涙声に大切な事を教えられた

(九州大学 法 一年 大瀬博幸)

第一日、第二日とバカなことばかり言っていました。そうした方が早く和んだ雰囲気になれると思っただけです。ところがこの合宿では何か違うような気が始まりました。慰霊祭の時位から他の班員が話しているのになぜか私に話しかけてくる人がおらずなんとも言えぬ孤独感に襲われ、人とのつきあいかたというものが解らなくなっていました。そんな気持ちのまま第四日の長内俊平先生の講義になりました。先生は物は心以外のもの、つまり言動とか態度というの物だと仰せられました。自分がいくら心がこもっていると思っても態度・言動が人に伝わらなくては、それはこもってはいないので。友を語る時の長内先生のあの涙声にとっても大切な事を教えられたような気がします。

気がつけば迷惑ばかりかけをれどいつも暖か班長さんは

第二班―男子学生―

自分の気持ちをぶつけられた

(早稲田大学 一文 一年 山本俊之)

合宿の前に合宿に対して異和感や反発を感じましたが、サ

1クルの先輩から「その気持ちを正直にぶつけてきなさい。この合宿は何も思想を押しつける場ではなく、みんなで考え合う場なのだから」と言われ、それなら自分の気持ちをぶつけてみようと思つて参加したのですが、最初から驚かされることばかりでした。開会式での力強い「君が代」斉唱、時には涙ぐまれるほどの切々とした先生方の講義、本当に心の底から討論し合う友、全く今までとは違った世界にほうり込まれたような気持ちになりました。そして私も自分の気持ちを素直に打ち明けてみました。それに対する友の考えを聴いているうちに少しずつ自分のこり固つた考えがほぐされたような気持ちになりました。しかし疑問がないわけではありません。そういう考えもあるのだということを改めて考え直してみようという気持ちになりました。

雲多き空を見上げて思ふかな今日友どちと別ることを

班員が心を開いてくれた

(亜細亜大学 法 四年 中澤栄二)

班別討論の時にそれまでなかなか心を開いてくれなかった班員が初めて心情を語ってくれた。それは、彼の母が今体を悪くして入院してゐるといふことであつた。その話を聴いた時に、どうしてもっと早く気付いてあげられなかったのかとくやしくてその後しばらく何も言ふ気になれなかつた。合宿を通じて目頭が熱くなるのが幾度となくあつたが、それらの気持ちを今後の生活の中で大切に暖めてゆきたい。

カメラ・レポート 2



いよいよ合宿教室の幕は開けた。緊張した面持で国歌を斉唱する。

慰霊祭

いにしへにうせにし人の英霊を思へば心の高鳴りて来て

長内先生の御講義に感動した

(拓殖大学 外国語 一年 森本昌利)

私が特に感動したのは長内先生の御講義でした。先生の御言葉、態度、そして語られた経験、これら一つ一つから感じられるものがありました。それは私が忘れていた燃えるような熱い心です。私は元来、目標がないと生きていけない少々弱い人間です。生きがいを求め、その生きがいに情熱をかたむけて生きてきたはずでしたが、いつの頃からか、それを忘れていました。私の心のどこかにいつも虚しさがありました。しかし、長内先生が御講義された友情のこと、心と物のこと、両親のこと、それら全てが私に再び熱く生きよと直接語りかけてくださっているようでした。特に防人の歌には昔の自分と自分のことを考えてくれる両親のことを思い出し、涙が出そうになりました。

長内先生の御講義を聞き

燃え上がる炎のごとき人生を我も生きたし師の君の如

両親に孝を尽くせと言はれたる師の御言葉を胆に命じむ
わきおこる熱き思ひを忘れじと胸に秘めつつ島原を去る

人の話を聞く難しさを痛感した

(熊本大学 教 三年 寺岡伸純)

先生方の御講義を聞き、その後の班別討論のときに自分の考えや意見をまとめようとすると、ついさっき聞いたばかりなのに先生方が何を話されたかわからなくなり、他の班員の意見を聞いているうちにいつも自分はさっきまで何を聞いていたのだろうかと思ひ、人の話を聞く難しさを痛感しました。また、自分の思ったことを他の人にわかりやすく説明することの難しさを痛感しました。これからは輪読を通してこれらの点にも気を付けていきたいと思ひました。

各地より集ひし友と語らへば時間の過ぐるも忘るる心地す

問題を深く追求していきたい

(中央大学 経 二年 福田剣充)

去年の合宿以来、無為に時を過ごしたのではなく、色々な問題、例えば、人間関係から起こる様々な問題など、自分なりに考えましたし、多少勉強した事も細部にわたって追求して来たつもりでした。しかし、この合宿を終えて、自分のした勉強、追求という事柄、まだまだ浅薄の域を脱していないのではないだろうかと感じました。それは勉強不足のためか、自分自身が浅薄なためかわかりません。これからもっと勉強し、更に深く追求していきたいと思ひます。

見上れば雲かかりたる空なれどけふ晴れやかに友と過ごさむ

素直に言葉が出て来た

(日本大学 文理 三年 井坂信義)

合宿に参加して班で一緒になった友人が非常に親しく感じられ、最初から最後まで一人一人の友人の存在が自然と自分の一部分の様で心のなごむのを覚えました。その中で自分の気持ちを相手に伝えようとする時、素直に言葉が出て来ました。ただ一つ反省することがあるとすれば、自分自身、本当に求めようとする心に至っていなかったことです。自分は求道という言葉は今自分の信条にしていますが、そこまで到達することが果して出来たのかという、もっと何か疑問が出て来てもおかしくないし、苦しいこともあるだろうに、そこまでの感情は湧かなかったのです。しかし、これから帰っても学んだ事を起点としてつきつめて行きたいと思います。

寝食を共に過せし友とちと今日別るるは寂しかりけり

感想文をつづる友らの面わには笑みもありたり張りもありたり

合宿を終へてのちももるともに真の道を求め続けむ

解決すべき課題を与へられた

(鹿児島大学 医 三年 仲田公彦)

島原の学び舎にてよき師よき友と巡り合ふことを得、大変に感謝致してをります。また沢山のことを学べ、うれしく思ひました。しかし、それ以上に多く、今後の日常生活に於て解決すべき課題を与へられたと感じます。自らの頭で考へ、その解決を求めてゆきたいと思ひます。

澄みませる明治のみかどのおほみうた大きみ心おのがともがな
思ふことかたみに語りて言の葉の深きを知りぬ楽しきろかも

カメラ・レポート3



主催者を代表して、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「心を活発に働かせて、友の言葉をしみじみと聞き入れる努力をして下さい」と呼びかけられた。

有明のうち天草も千俣の嶽より見れば小庭のごとし
くも晴れて満天のほし輝けり斎庭にまたまつらむとすれば
得たること学びゆくべきこと多し心つくしの合宿をはりて

第三班—男子学生—

僕達皆が受け取った何か——

力を信ぜずにはいられない

(早稲田大学 政経 三年 鶴野光博)

昨年続き、二度目の参加でした。一日目は、他の班員の話すことに神経がいらだち、御講義に対する自分の感想など素直に話す気になれず、夜、寝ながら苦しい思いをした。何故自分ももっと心を広く持てないのかと思うと辛かった。しかし日程が進むにつれて、次第に班員の皆ともうちとけてきて、班別討論の時に一人一人が何を話してくれるかが楽しみとなってきた。そしてクライマックスは「夜の集ひ」の出し物を皆で熱演したことである。終わった後、班員が皆笑顔を見せているのが嬉しくて、僕も笑った。初日の夜のことを思い出せば、班長の與島さんが皆の心を開こう、盛り上げようと努力してくださったことがとても有難く、また御講義や和歌創作などから僕達皆が受け取った、何か—心と言うか、力と言ったらいいか—を信ぜずにはいられない。

僕はこの合宿で教えられたことを起点にして自分の勉強を始めねばならず、また自分自身の考えが将来どのような形をとって現れてくるかは知らないが、それを浮ついたものとならない為の土台となるべきものは、この合宿で与えられたと信じた。

木村君の閉会宣言を聞いて

君の声高くすがしく響ききてこの合宿も終はらむとする

こんなに友だちと真剣に

討論したのは初めての経験

(熊本大学 教 一年 北島直浩)

ぼくは、人から押しつけられるのがいやな性格です。自分で何か見つけ納得しなければ気がすみません。この合宿も父から行けと言われた時、はっきり言って何か思想のようなものを押しつけられるようでした。だから合宿で話を聞いても、常に批判の精神を持って毒されまいと思っていました。

でもぼくは、この合宿で、間違っていると思ったことが何度もあったことは事実ですが、この合宿は単に理屈をどうのこうの論議するものではないと思うようになりました。皆で天皇陛下の御歌、防人の歌などを鑑賞し、皆で心を開いて真剣に論じ合う心を中心に行っているものだと思うようになりました。涙が出そうになったこともありました。

批判の気持、感動の気持、心が激しく動いた四泊五日だった。

たと思います。こんなに色々な問題を友だちと真剣に討論するなどという経験は初めてでした。また和歌を作ったのも初めてでした。色々な貴重な体験ができてよかったと思います。正しきと思へてくれどちがふ自分正しからずとささやきにけり

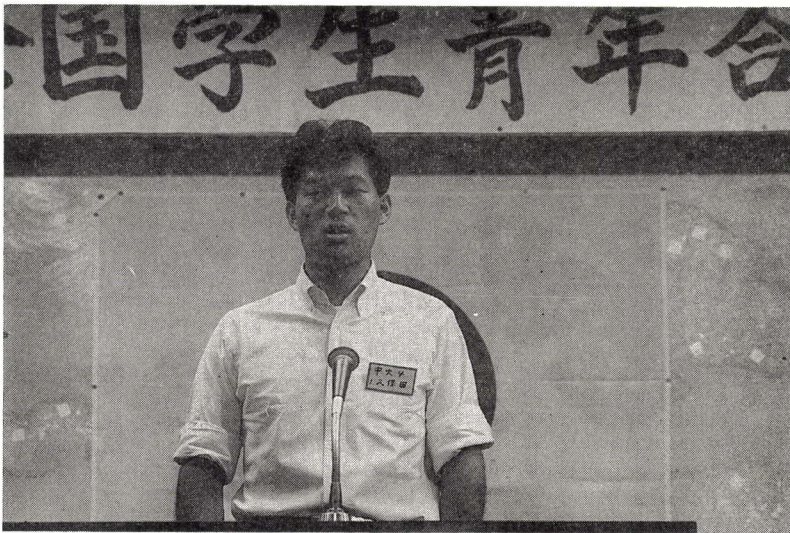
心と行動の一致こそなさねばならない

(北海道工業大学 工 四年 佐瀬竜哉)

私は今合宿に参加するに当って二つの事を学びたいと思つてゐた。一点は学問といふ事である。私は日頃、読書をしなから、自分は今、本当にここに書かれてある内容を理解してゐるのだらうかと疑問でならなかつた。何故なら本当に知るといふ事は行ふ事と思ふからである。日常生活に於いて自らの実生活に学問が生かされないならば、何の為の学問であるかといふ事が私の中にあつた。またもう一つは和歌を真剣に学びたいといふ事であつた。

長内先生の御講義はそれに対して充分に答へうるものだったやうに思ふ。先生の話される心といふものは分割することできない、まごころこそが大切であるといふ言葉に、自分の感じたままを素直に表現すればよいのだといふ事が心の底から分かつたやうな気がした。心と行動の一致こそ、本当に今の自分が為さねばならない事と思ひます。その為にも先生が仰言られたやうに和歌を修練して自分の心を鍛へ、もっと素直に感じた事を表現できるやうになりたいと思ひます。合

カメラ・レポート 4



参加学生を代表して、中央大学文学部四年、久保田真君が「班員との付き合ひや講義を聞く中で心に残る言葉を求めませう」と合宿に臨む気持ちを述べた。

宿に出て本当に良かったです。有難うございました。

長内先生の御講義をききて

心とは分けえぬものと話されし師の御言葉に深く感じぬ
なき友の歌を詠まれし師の君の御姿涙にかすみゆくかな
師の君の語りし言の葉胸にとめ吾の人生の道標となさむ

人の真実を生きる——まことを尽くす

(福岡大学 法 三年 清家和弥)

四泊五日間、これまでのどの時よりも心洗われる思いのする日々だったと思います。しかし、まことを尽くし相手と心連なることはよほど大変な事だと思っています。今連なれば、もう次の瞬間には傲慢な気持になつたりして、そのたびに自分のまことの足りなさを痛感したのです。

僕は、日本人が何よりもまことを大切にする民族であることを知って本当に嬉しく思います。それは、合宿の中で班の人達や先生方が言われる言葉を心を開いて聞き入り、また短歌を詠みつつ、また先人の言葉を憶念する中で発見できた貴重な体験でした。この合宿の体験は、黒上先生の和歌の中に見られる「一信海」だったように思います。そしてそのような人の真実を根本において生きていけることを教えてくれるのが日本民族が古来より何ものにもかえ難いものとして尊んできた「しきしまの道」だと思っています。

閉会式での神洲不滅、進めこの道を歌い、国民同胞感という実感を初めて受けました。本当に皆さんに感謝しています。

ありしことをことこまやかに憶えたる先輩の話聞き入りにけり

与えられた環境の中で最善をつくす

(拓殖大学 政経 二年 角田 学)

私は、拓殖大学の特待生のため、一般の学生が参加しているさまざまのサークルに参加する余裕もなく、日頃から満たされぬものを感じ、いろいろな大学の、いろいろな人と語り合いたいと思ひこの合宿に参加しました。この合宿に参加しての感想ですが、ひとえに班の友だちとの語らいが楽しかったことにつきます。

講義の中では、二日目の山田輝彦先生と、四日目の長内俊平先生の話がとても印象に残りました。特に、山田先生の話の中で、人生における三つの目的、すなわち先天的なもの、後天的なもの、そして天から与えられたもの、この三つの目的を達成するための、自分にとって最もふさわしいと思える生き方を見つけてほしいという話が、私にはとても印象に残りました。

これまで、学校の成績とか、近所での評判とか、どこの大学が一流かとか、そうしたもののばかりにとらわれていた自分がとても恥ずかしく感じられました。自分に与えられた環境の中で、自分自身の持てる最大の力をもって最善をつくすことが大切であると改めて感じました。

加来先輩に外交官試験についてのアドバイスを受けた折に

いろいろと指導を与ふる先輩に心の底から厚く感謝す

山田輝彦先生のお話をおききして
しつかりとおのれの道をふみしめて迷ふことなく進み行きたし

苦しい思いもとけていった

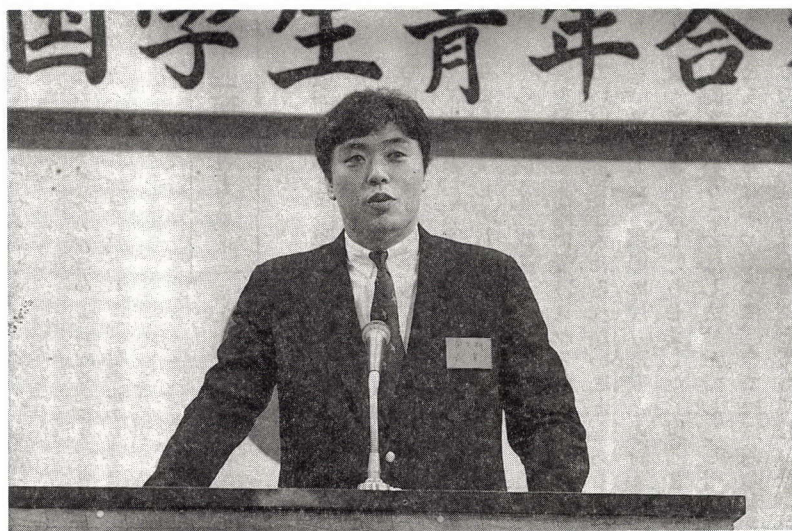
(中央大学 法 二年 長谷川浩延)

この合宿に参加する前は、期待するものが大きかったのですが、国歌斉唱など納得できないところが多々ありました。自分が何も分からないためですが、分からないのに歌うということは何か不自然に感じられました。また、何かを学ばなくてはという気持とそのわだかまりとが心の中で葛藤し、そのような状態で一日一日と経っていくにつれ、自分は一体何のために参加しているのだろうかと自分自身が分からなくなり、班別討論の時も、本心と言葉がくいちがってきて非常にやるせない思いがしました。

自分は何とくだらない、いやしい人間なんだと四日目の短歌相互批評の時に話しますと、そんな風に考えてはいけなないと班長の與島さんと加来さんがおっしゃられ、親身になっていろいろお話くださいました。お二人とも、本当に真剣であることが分かりました。心から訴えかけてきていると感じました。ひねくれていた自分の心が恥ずかしくなり、何かふっされるものがありました。みんながそれぞれに真正面から自分の欲するものとき合っている、初めて分かったような気がしました。

苦しく、また考えさせられる合宿でしたが、今の気持を忘

カメラ・レポート5



合宿運営委員長である浜の町病院内科医師・長澤一成氏は、合宿運営を支えるスタッフの紹介と四泊五日間を過ごす上の心得を述べられた。

れないようにしたいと思えます。これから書物を読みます。人と付き合います。とにかく、自分をいやにならず、逃げるような気持はもちたくありません。ホームリーの気持が心から分かるような人間をめざし、心豊かな、そして豊かな経験をしたい。本当に有難うございました。

有難き師のおことは胸うたれ苦しきおもひいつしかとけゆく

意見は違っても真剣に

語り合う友がいたことが嬉しい

(東京大学 教養 一年 前田幸男)

私はこの合宿に来るのはいやでした。政治的レヴェルの話には、かなり嫌悪感を抱いています。しかし御講義には心を動かされたり、自分の現状をたしなめられたりするようなところもあり、来て損は無かったと思います。また意見は違えども真剣に議論できる友のいたことは嬉しく思いました。

小柳志乃夫さんの講義で紹介された学生は私のことですが、「人間は動物である」という考えは私は高校三年間でいやという程思い知らされたことです。今でも私はそう考えます。ただこの合宿に参加したことで、これからの体験いかんによっては変わるかもしれません。ただ私は自分が生きていく上で体感したことが、その時にはその人にとって真実だと思いません。私にとって信じるということは疑うことです。疑って、疑いぬいてもどうしても残るもの、どうして

も正しいとしか思えないもの、それに執着することが信じるということです。

胸中にわだかまる思ひのなほありてをさらにまた考へゆかむ
わが友とたがひの意見は異なれど心に橋のかりけるかも

第四班—男子学生—

以前の私とは違うような気分

(城西大学 経 一年 千葉文明)

この合宿はおじに紹介してもらい参加した訳ですが、合宿が近づくにつれ、行きたい気持と行きたくない気持が混在しておりました。しかし九州に着き、その複雑な気持ちも晴れ、やるぞという意気込みが強くなりました。参加し、様々な講義を受けて素直に受け入れられることもあれば、全くと言っていいほど受け入れられないこともあり、頭の中はいつもパニックでした。部屋に戻り班友との討論でそのパニックが静まってゆき納得したりしました。以前までの私は人の話をよく聞くということはありませんでしたし、取り入れるということも全くしなかったのに、今では以前の私とは違うような気分です。班友には五日間とても楽しい思いをさせていただきたいへん有難く思っています。郷土はそれぞれ違います、皆とのこれからの付き合いを大切にしたいと思っ

ています。

楽しい日々を過ごせし友とちと別れることの心ざびしも

すばらしい進歩

(防衛大学 人文 一年 和田直人)

私はノンポリでした。自己主張の出来ない男であり、ただ単に相手の言うことにはい、はいと頷くだけの者でありました。その私が自分の考えを持ち討論をし、午前二時まで短歌の相互批評をした。このことだけでも自分にとってすばらしい進歩です。それに加え、先生方の御講義は興味深く、自分の考えの確立に役立ちました。特に小堀桂一郎先生のお話しは、将来国防の中樞を荷っていかうとする私にとりまして国防の大切さをしみじみと実感しただけでなく、大東亜戦争はやむを得ず戦ったという事も知り、これまでの旧軍は悪であったという偏見は誤りであったと気づきました。今回この合宿教室で学んだことをこれからの生活で実践してゆきたいと思えます。

祖先にちかふ

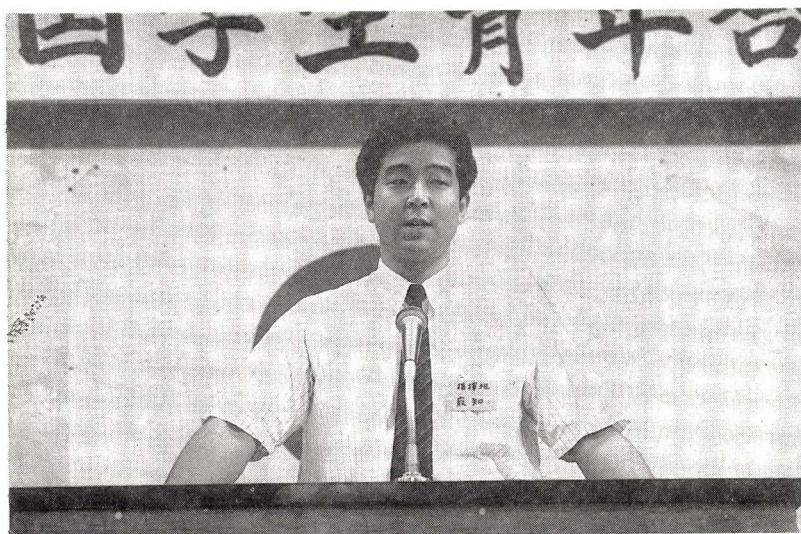
数ならぬ身にはあれども我が命つくし守らむ大和島根を

本当に有難かった

(福岡大学 経 三年 吉村恭二)

和歌相互批評の体験が非常に良かったです。創作者に和歌を作った時の気持ちを聞き、少しでもその気持ちを言葉に表現

カメラ・レポート 6



指揮班長である扶桑社働勤務・寂知浩一氏から合宿生活全般に関する諸注意がなされる。

することが出来た時の喜びは格別なものでありました。又、自分の和歌の批評の時には班員の皆は言うまでもなく、先生方まで一所懸命に考えて下さる姿を見るとき本場に有難かったです。今回の和歌相互批評の体験を通して、他人の心の内を思い偲び憶念してゆき、その人の心と自分の心を一つに合わせゆく作業が本場に豊かな心を呼びさましてゆくんだという事を感じさせられました。そして、そういう心の姿勢にこそ物事の真実を見極める力というものがあるんだという事を感じさせられました。私自身、この敷島の道を一生を通じて極めてゆこうと思います。

全体感想発表にて

前に立ち勇気を奮ひ訥々と涙ながらに友は語りぬ

和歌相互批評にて

和歌を作りし友の気持を皆で偲び言葉を搜す沈黙のひととき

貴重な事を学んだ

(中央大学 文 三年 佐藤 学)

今年の合宿の中で、実際に自分で和歌を作り班員の和歌を批評する体験を通して、貴重な事を学んだといふ思ひがした。自分の眼でしっかりと物を見つめ、人の心の働きに思ひを馳せるといふ事がいかに大変であるか、自分自身が普段の生活の中で物事を見据え、人の心の働きの感じとらうとする姿勢がいかにいい加減なものであったのかといふことを身をもって知らしめられた気がした。短歌のよき、それを大事に

してゐる人、大事にし続けた祖先の心持が少しだけだが身をもって分かることが出来た。日頃の自分の姿勢といふものを問ひ直す契機であったやうな気がする。

是松先生が御講義で紹介された教へ子の歌を聞きて

一度でも孝行したと言ふ歌に思ひ浮かぶは吾が母のこと

心から信じることのできるものを

(熊本大学 教 三年 坂本太郎)

今回の合宿で最も心を打たれたのは、長内先生が御講義の中で言はれた「親に心配をさせてはいけない。心配させないことが親孝行である。」といふ言葉でした。自分がふらふらして居れば、親も心配をする。さうならないためにも、自身の本心に心から信じることのできるものを、普段の生活、輪読、友とのつき合ひの中から見つけてゆきたいと思つてゐます。心から親の有難さをかみしめ、生活してゆかうと思ひます。

又、短歌相互批評の折、班員の心に添ふやうな言葉が見つからず、改めて言葉の難しさに気付かされました。

長内先生の御講義を聞きて

師の君は御声つまらせ詠はるる共に学びし友のみ歌を

師の君のみ歌詠まるる御姿に目頭熱くなりゆきにけり

感じる力、それを表現する力を磨きたい

(早稲田大学 理工 四年 安藤慶太)

今年は二度目の参加であった。私は合宿前から期待して燃えていた。講義は涙の出ることが去年以上であったし、班のムードも良かったが、今、合宿を終えて「考えねば！」といった実感があまりないのだ。昨年ほどの「考える材料」を得なかったと思う。この点では期待はずれであった。でも感じたことは多かった。是松さんの小学生の教子との付き合いに触れながらの短歌創作導入講義に微笑ましいものを感じた。小学生の短歌、作文には驚いた。小柳先生の講義は涙が止まらなかった。占部先生にはいくつもの重要な指摘と啓発をうけた。聖徳太子の御本は是非読破します。合宿の目的について私は少し勘違いをしていたように思う。考える材料を得るだけでなくもっと感じる力、それを表現する力を磨きたい。

感じたることを素直に詠みあぐるしきしまの道奥が深けり

第五班―男子学生―

十分に心を開けなかった

(早稲田大学 政経 三年 向田智明)

今回で二度目の参加となりました。色々と御講義をお聞き

カメラ・レポート7



開会式後、各班（一班6～8名）に戻り、自己紹介が行はれる。各人から参加の動機や抱負などが述べられ、その後、昨年度の合宿教室レポート『日本への回帰第23集』の輪読が行はれた。

したり、様々な発言を行なったのですが、僕には今一つ十分に力を出せた感じがしていません。例えば、班別の討論は、大変和やかな感じで進んだのですが、そうした場の雰囲気は、僕には何か今一つ物足りなく思いました。自分の胸の中の気持ちを語り合う場合は、もっと何か、きれいにはいかない、簡単には割り切れないものがあると思います。しかし、そうは思いながら、自分からそうした場の雰囲気は破っていく気概も僕には無かった。そして、その原因が、自分が十分に心を開けなかったことにあると思うと情けない思いがしてきます。本当に人と人とが心を開いて付き合っていくことは、非常に辛いものがあると僕は思っています。

長内先生の御講義を聞き

師の君の言葉素直に胸に入り痛く切なき思ひするなり

ももっともっと勉強したい

(徳山大学 経 二年 松井 豊)

私は、天皇や自衛隊について、天皇は、あってもなくてもたいして変らないだろう。自衛隊については、はたして防衛ができるのだろうかという疑問を持っていました。天皇に関しては、この合宿で歴史をふり返り、おそまつながらも勉強できたと思います。天皇と戦争の問題、東京裁判などについて、もっともっと勉強したいと思います。

私は、徳島出身なので、黒上先生の勉強もしたいと思っております。

島原で語りし友と去りがたくさみしい気持ちかけめぐりくる

ホーマー君の言葉を大切にしたい

(日本大学 文理 一年 本石敏明)

班内での討論において、班付の方より「あなたは本心も語らず、ただ、賢しかな言葉で、この場をやりすぎそうとされている。あなたは、そんな勉強しかやっていないし、又、真の勉強をやるうともしていかない」と指摘された。私は返す言葉もなく、思わず涙がこぼれた。そして、あらゆるものに感動もなくというより、湧いて来る感動を押さえようとして来た自分に気づかされた。物事を冷静に考える人間が大人であって、感動を素直に表すべきではないと思ってきた自分を思った。心に厚みがなかった。講義の中のサローヤンの『人間喜劇』が思い返される。『人は大きくなったら泣かないものだと考えていたけれども本当は大きくなってから泣くんじやないかな。だって大きくなってはじめていろんなことがわかり出すんだから。』ホーマー君の言葉を、くり返しくり返しつつこの合宿を終えます。

長内先生のご講義を聴きて

亡き友を慕ひて言葉をつまらせる師の御心の何と気高き

師の御姿に我がころねの貧しきを悟りてまなこのひらく思ひすともどちのまことに心をふるはせて生くるは人の真なりけり

生涯にわたる課題が与えられた

(亜細亜大学 経 一年 吉田英嗣)

私は、この合宿に同じ意見を求めて来たわけではない。それぞれの異った意見を求めてやって来たのだ。自分の意見を持って、他人の意見に耳を傾ける。又、自分の意見に同調する人、反論する人、様々な意見が飛び交う。先生方の御講義も、ある場面では共感し、ある面では反感を持ちながら聴くことができた。和歌創作では、初めて作る自分の歌を恥ずかしく思ったが、相互批評で、痛い所をつかれ思わず苦笑いし、うれしく思う場面もあった。この四泊五日で得た経験は、生涯にわたる問題提起がなされたと思う。これから帰り、一生にわたって勉強してゆく課題が与えられたことをうれしく思っています。

天皇の御製を聞きて我が心洗はる思ひすこの島原で

先生方の言葉が心に残っている

(鹿児島大学 教 四年 松谷浩陽)

児島先生の御講義をお聞きした後、班別討論の中で「敗戦後の日本を考えると、それまでの二千年間続いてきた伝統というものは、本物だったのだからかと思われなくなる。」という意味の意見が出されたが、その時、改めて日本における敗戦ということを考えさせられた。又、『日本』とは何であるか、それを提示、実証するとは、取りも直さず『自分の

カメラ・レポート 8



第一日目の夜の合宿導入講義は、日本興業銀行勤務・小柳志乃夫氏によって行われた。「歴史と人生」と題して、「占領政策によって切断された生者と死者の絆を結ぶ為には、亡くなった人の残した言葉に触れて彼等の心を偲ぶ必要がある」と述べられた。

姿』を提示することである。文化とは何であるか。それは自分の『生き方』そのものである」という先生方から教えて頂いた言葉が印象に残っている。更に、『歴史に触れる』ということは『歴史に感嘆する自分』を発見することである」との長澤先生の言葉、「短歌を作るとは体験を再び体験することである」との是松先生の言葉が心に残っている。

壇上に上りし山内さんへ

壇上に上りし君は涙して故郷を語りて声つもらせる

涙する君の姿に吾れもまた胸つまざれて言葉も出でず

壇上に上りし吉村さんへ

とつとつと語りてゆける言の葉は皆の心にしみてゆくこと

とつとつと語りてゆける言の葉に昔の君をしのびゆくなり

生き生きと働くまごころをもちたい

(中央大学 経 三年 渡部豊人)

私はこの合宿に、借りものの知識や、虚飾ではない、まこととの心に触れ、はるかな過去からたうたと伝へられて来た祖先の心に連なりたく思ひ、参加しました。合宿期間中、すばらしい御講義や、友の言葉に触れ、しばしば感動することがあったのですが、我身の未熟さの故に、肝腎の班において、友らの心に迫っていくことができず、十分な心の交流をすることができませんでした。自分の心を開いて、素直に友に接するのだから、友の心は見えず、交流はできないと思ひます。素直になること、まごころで人に接することの何

如に困難であることか、改めて痛感しました。しかし、難しいからといって素直になることの努力を止めるわけにはいきません。一層努力し、生き生きと働くまごころをもちたいと思ひます。

素直なるこころをもちて父母のまことの道に連なりゆかむ

自分の心が洗はれる思ひがした

(熊本大学 法 二年 平田裕英)

僕は、今回で三回目の参加でしたが、こころがついてゆかない時がありました。御講義を拝聴したり、班員の話を書くときには、精神を集中させる事の難しさを感じました。今回も班長を努めさせて戴きましたが、班の諸兄、班付の古川修先輩に助けられて何とか努めを果たす事が出来たことを嬉しく思っています。特に全体感想発表で本石君、松井君、吉田君の三人が壇上に登り、思ふ事を述べて呉れた時には本当に嬉しく思ひました。

皆の話聞いてみると、自分の心が洗はれるやうな思ひが致しました。班の諸兄とは、未だ話し足りない感じもありますので、今後手紙等を通じて語り合っけてゆきたいと思ひます。

班員の諸兄へ

涙ながらにおのが思ひをとつとつと語りし君の姿たふとし(本石君へ)

さはやかな笑みをたやさず友どちとまじはりけるか兄のごとくに

(松谷さんへ)

むづかしといひつつもなほわからぬと太子の御本を君は読みけり

(松井君へ)

語りける友のまなこをますぐにぞ見すぬし君のまなこ輝く(渡部君へ)
照れつゝも壇上に上りおのが思ひを語る姿を見るは嬉しき(吉田君へ)
ひさかたに君と会ひせばひととせのあはざりし時のなきがごとしも

(向田君へ)

第六班―男子学生―

「徹する」という言葉が胸に残る

(中央大学 文 三年 三林浩行)

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読導入講義で
占部先輩は、聖徳太子の生き方に触れて「苦悩濁亂の人生に
徹し」という言葉を取り上げられ、その中の「徹し」という
言葉を強調された。合宿中に何度も早く時間が過ぎて欲しい
と思ったことを今思い出すと、「苦悩濁亂の人生に徹し」と
いう言葉が胸に浮び上がってきた。

山下兄のことをよみて

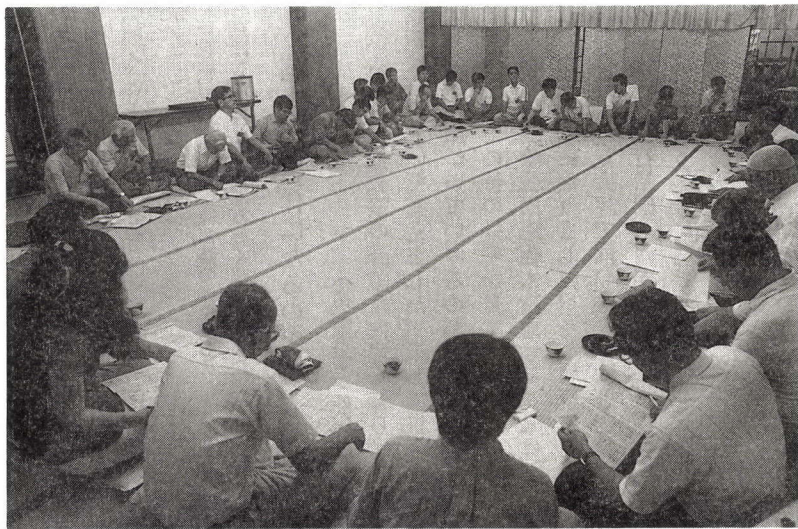
我が友は体ふるはせ下を向き涙ながらに語りゆきたり

防大生の言葉に感動した

(山口大学 経 一年 越野満至)

全体感想発表の時、防衛大学の学生の感想を聴いた時の感

カメラ・レポート9



第一日目の日程が終了した後、助言者として参加した人々が全員集まり、検討会がもたれた。明日からの取組み方などについて、細かな検討が深夜まで続いた。

動が、この合宿の中で最も大きかった。「マスコミなどでは自衛隊を批難している記事ばかりです。自分はこういう人の為に有事に命を張らなければならないのか、と思うことがあります。しかし自分ももっと崇高な理想の為に有事には命をかけて戦います。」自分の目から涙がこぼれていた。何かは分からぬが、自分の求めていたものが「あった」と感じた。自分は文民で、普段の生活では国について考えることが少ない。しかし彼と自分とは、国を守ることに於いて同じ気持ちだと思ふ。彼は武器を持って日本の為につくすであらう。それならば筆をもって国につくすのが自分の役割ではないか。自分自身もっと自衛隊を理解し、学友の意識改革に少しでも力にならう。そう心から思えた。

世の人の声にも負けず国のためつくさるゝ君の姿尊し
火砲もつ君と立場はたがへども国につくさむ心一つに

心の底から気づくよろこびを得られた

(関西大学 工 二年 逢坂良平)

山田先生が「役割」について話されたのを聞き、今の自分の役割とは何か、何を学び、何のために学問するのかを考えました。特に小堀先生や児島先生の話を通じて戦争について考えさせられました。私は自然科学系の学生のため、学問と国家を切り離して考えていました。しかしそれでは学問をする意義がないと思いました。この合宿で学んだ最大のものは、史観、思想ではなく、学問は「知るものでなく、気づか

されるものである」ということでした。知らず知らずイデオロギッシュになり、心と言葉が一致しないことがあり、知識をつめこむだけになることがありました。本当に心の底から気づくこと、そのよろこびをこの合宿で得ることができました。

映画「天皇陛下」の学徒出陣の様を見し折

皇国をただ守らむと進み行く学徒の姿に涙あふれく

個と全が一体になるのを感じた

(拓殖大学 外国語 四年 永井 弘)

私はこの合宿教室の詳細な内容も知らずに参加したため、最初はとまどいを覚えました。果して自分はこのハードなスケジュールについていけるのかと不安になりました。しかし最初の討論での皆の様子を見て、皆同じではないかと思ひ始めてからは、学生同志何も遠慮することはないんじゃないかという気持ちになりました。そして既に打ちとけあった班員同志の短歌相互批評では、一人の歌を全員で味わって意見を出し合い、試行錯誤しながらその一首の歌を皆で高めていくことに言いようのない喜びを感じ、正に個と全が一体になるうとするのを肌で感じることが出来たように思われました。夜遅くまでかかって全員の歌を完成させた時には、皆も自分も充足感でいっぱいになり、本当にこの合宿に参加出来て良かったと思つた。

終はりゆく合宿の思ひを書きつくれば遠き初日に心もどりたり

他を思いやれる心の美しさを実感

(熊本大学 法 三年 山下哲也)

この合宿に参加して講義を聞き、班員の方々と討論をしていくうちに、他を思いやれる心の美しさを実感し、自分もそういう心を持ちたいと思うようになり、そのように心がけていた。それで班長がある班友に注意した時、その班友の心をもって今度は私が班長に注意した。その後で自分の言動について考え、班長の気持ちを思った時、自分は何と軽率で思いやりのない人間だろうと感じた。恥ずかしくなって泣けてきました。私はこの合宿の中でたくさんのことに気づかされることではなく、これから更に身につけるように努力していきたいと思う。

友どちの真心を思ひをらずかと気づきしときに涙あふるる

みなさんの真心を感じて胸がいっぱいになった

(亜細亜大学 経営 一年 佐藤順一郎)

私がこの合宿で感じたことは、自分の無知、不勉強でした。だから諸先生方のお話はあまり心に残っておりません。でも私は来てよかったと感じております。それは人とのつき合いの大切さを感じたからです。気の進まぬ私を一生懸命誘って下さった先輩の真心、あまり発言しない私になんとか発言の機会を与えようとして下さった班長さんの真心、無口な

カメラ・レポート10



二日目の午前、歴史家・児島襄先生により「東京裁判と東京裁判史観の克服」と題された御講義が行はれた。先生は、東京裁判と東京裁判史観の実体を明らかにされ、問題点を指摘された後「自分で歴史を直視し、自分自身の史観を作り上げる勉強をして戴きたい」と強く訴へられた。

私に話かけてくれた班の人達と班付きの先生方の真心を感じとれたからです。夜寝る時それらのことを思い出し、胸がいっぱいになったことは、生涯の思い出になると思います。今まで私は、人の喜ぶことをしてやることのみが人のことを思いやることだと思っておりました。しかしそれはその人に好かれようとしていただけであって、本当にその人を思いやったことではなかったのです。時には憎まれてでもその人のためになると思うことをしてやるのが、人を思いやることだと気づきました。しかしそれを実行するのは実に難しいことだと思えます。その勇気を得るためにも、手本となる先輩、班友とつきあっていきたいと思うのです。最後にこの合宿で私に関わってくれた人達に深くお礼をいいたいと思います。

合宿の終はり近づき作文に我が胸内の思ひをつづる

短歌全体批評の折に

我が歌のよみあげられたる恥づかしさに逃げたき気持ちも今も忘れず

第七班 — 男子学生 —

分らないまでも心で理解しようと思つた

(長崎大学 教 一年 北島和明)

この合宿に参加して、事実に対する知識の無さと、己の考え方の狭さを嫌という程、思い知らされました。自分では何

物にもとらわれずに歴史というものを見ていると思つていました。しかし、私が持つていた考えの全てが現在まで受けてきた教育によって、一方的な見方しかしていなかったことに気付いたので。天皇陛下に対しても、東京裁判に対してもそして自衛隊に対してもそうです。そのことに気付かされただけでも非常に大きな収穫でした。

講義の内容は全部しっかりと把握したとは言えませんが、それでも、先生方のおっしゃった事柄は心で感じる事ができました。実のところ、今まで、こんなにも国の事などを深く考えたことはありませんでしたので、思考回路がかなり無理をしましたが、分らないまでも心で理解しようと思つたつもりです。全てが初めてのことです。非常にきつかったですけれども大変有意義な時間を過せたと思っています。

集ひ来て共に学びし合宿の終りて今は再会を想ふ

親というもの、

友というもののありがたさを感じた

(九州大学 法 一年 江藤 禎)

初日から失敗ばかりでしたが、私にとつてはたいへんためになる合宿でした。私はこの合宿において、小堀先生の御講義を目的にやってきました。それは私の父が自衛官であり、自衛隊のあり方、国防というものについてどういってお考えを持っていられるかを拝聴したかったからです。先生が自衛隊が違憲である、とおっしゃったときはショックでしたが

それから先生は現在の憲法をかえなければならぬ、自衛隊は国を守るために必要である、とおっしゃってくれてとてもありがたく思いました。

また長内先生の御講義を拝聴して親というもの、友というもののよさ、ありがたさをあらためて感じることができ、たいへんうれしく思いました。

合宿は今日で終わりですが、合宿で学んだこと、感じたことは私の心から離れることはありません。合宿で思い感じ学んだことをこれからよくかみしめていくつもりです。

自衛官の父を持つ私が小堀先生の御講義を拝聴して

自衛隊は必要と強くおぼせられし師のお言葉を有難く思ふ

有明を望める部屋で班友ともう少し長く語り合ひたし

言葉の修練としての短歌をつくっていききたい

(千葉大学 工 三年 石川名津朗)

今回、班長をさせて戴いたのですが、全く自分の力不足にふがい無さを感じました。班友が何かを皆に語りかけているのに、それに対して何か言いたいと思うのにストレートにそれを言えなかったことがぐちゃしいです。それでも班員に恵まれて、皆、お互いを思う気持で打ち解けあえたのは本当に嬉しかったことです。

これからは、言葉の修練としての短歌をつくっていきたく思います。又、自分の過去の具体的経験を見つめ直して自分の考え、思想というものをつきつめて考えてみたいと思います。

カメラ・レポート11



児島先生の御講義を真剣に聞く学生。

す。

班長をつとめて

階段を昇りて部屋に戻りゆけば班友達の輪になって待つ拙きも我が言葉聞き友どち思ひ思ひの心述べつつ

心が深くあたたかい人間になりたい

(中央大学 文 二年 岸川泰弘)

二百人もの人々が集まる合宿だと言うので、対人恐怖症の自分は参加を決心するのにとても勇気が要った。班の仲間達が気立ての良い人達ばかりであったので大変心強かった。講義の中で最も印象に残ったのは、小柳志乃夫先輩のそれであった。ホーム少年の話聞いた時は、大変感動したが、今思えばそれはお話をしてくれた小柳先輩のお心持ちに自分は感動したのだ。自分も先輩みたいに心が深くあたたかい人間になりたいと切に思った。

小柳先輩の御講義をききて

我もまた先輩の如くあたたかき心を持ちて生きたしと思ふ

真剣に考える友と出会うことができた

(徳山大学 経 三年 濱田尚志)

この合宿に参加して本当によかったと思う。なぜかという
と、国の将来の事や、国防の事など、真剣になって考えている
友達と出会うことができたからです。

先生方の御講義をお聞きして思ったことは、日本という国

のことを考えながら死んでいった人々というものを大切に
してゆかなければならないということでした。この合宿で学ん
だことを大切に、これからの大学生活に生かしていきたいと
思います。

全体意見発表を聞いて

壇上で声つもらせる後輩みて心にじんと感じるものあり

確固たる歴史観、意見を築いて行きたい

(成蹊大学 法 三年 渋谷宏海)

合宿で強く印象に残ったのは小田村先生の「具体策を求め
るより……内なる用意に取組むべき」といふ言葉でした。こ
の御言葉を思ひつつ児島先生、小堀先生のおつしやる様、自
分の確固たる歴史観、意見を築いて行きたいと思ひます。

長内先生が御講義の中で「袖触れあふも他生の縁」といふ
言葉を言はれ、昔、人が如何にその小さな縁をも大事にした
かを話された時、やうやく自分はこの第七班の班員がただ偶
然に寄り集まったものではない事に気付かされました。

『まさにこの奇しき因縁なればこそその得難き日々を我は過
せり』

松坂君の発言を聞きて

かはらぬと自分を嘆く君なれど思ひの丈はますます高し

心に温めつつづけていきたい

(東北学院大学 文 三年 玉川幸毅)

一昨年にひき続き二回目の参加でした。はるばる東北の地

から来た甲斐がありました。印象に残ったこと、感動したことなど数多くあり、なかなかまとまらないのですが、その中でも一つ挙げるにすれば、思ったことを短歌に表現することの素晴らしさを感じました。

おもふことおもふがままにいひてみむうたのしらべになりもならずも

ことにはあまるまことはおのずから人の面輪にあらはれにけり

まごころをうたひあげたることはは年をふれども忘れざりけり

くさぐさに思ひやむよりうたよみて心はなつはうれしからずや

これらの明治天皇御製等が心にしみて参りました。

この合宿で学んだこと、考えたこと、感じたことを、故郷に持ち帰り心に温めつづけていきたいと思えます。

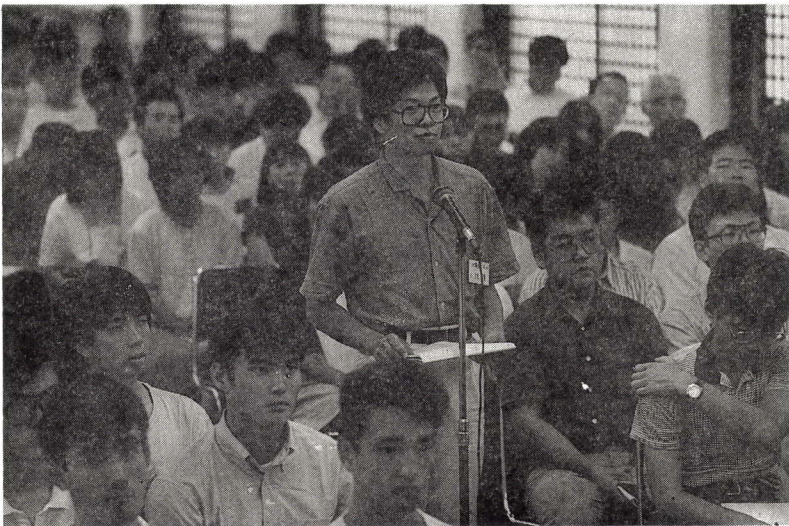
合宿終了の折

合宿で学びしことのあまたありおの言葉にまとまらずして

まとまらぬあまたのことはそのままに心にとどめ帰りゆくなり

くさぐさに思ひやむよりうたよめとふ教へ守りて学びゆきたし

カメラ・レポート12



御講義の後には質疑応答の時間が設けられてゐる。質問者は、言葉を選び真剣に問いを發する。

第八班—男子学生—

素直に感じることができた

(九州大学 法 一年 花田芳夫)

この合宿教室には、何を学べば良いかを具体的に教えてくれるものだと思ひ込んで参加したのだが、実はそうではなかった。児島先生は「自分なりの史観」をもてと言われたし、小堀先生は「態度の決定、意志の表明をせまられた時に自分なりの考え」が述べられるようにと言われた。また、山田先生は「人生における自分の役割」を見つけるようにと言われた。これは、無理に思想を押し付けられるよりもずっと勉強になった。

また班別討論においては、自分の話を真剣に聞いてくれる班友に感動した。先生方のご講義や先輩のお話にも、何度目かしらの熱くなる思いをしたことか。日常生活においては滅多に味わえない感動というものを、この合宿では素直に感じることができた。

参加者による全体感想自由発表を聴きて

涙ぐみ言葉つまらせ友人は一言言ひたり来てよかつたと

自分の勉強不足を思う

(千葉大学 工 一年 中富仁)

今回の合宿は、来る前からとても楽しみにしていました。しかし、実際に合宿が終わってみて、今の素直な気持はとも満足したとは言ひ難いものです。その理由として第一に、班別討論の場で班友の本音が聞けなかったことです。このことはとても残念に思います。第二に、先生方の講演の中でもわからない点が多かったことです。自分の勉強不足を思うとても大変です。来年はもっと勉強してからこちらへ来たいと思います。

先生の力のこもる言葉にも何か反発する箇所があり

本当に自分の信じ切れるものが欲しい

(早稲田大学 教 二年 小出和夫)

初めは長いと思っていた四泊五日間が、信じられぬ程の速さで過ぎ去ってしまつた。自分としては、それほど充実し、また楽しい合宿だったのだ。まず、先生方の御講義はどれも難しいものばかりで、全て理解出来た自信はない。しかし、時には声をつまらせ涙をうかべながら語る先生方の姿に、まさに自分の信ずるものを徹底的に信じ切つた学問の迫力を見せられ、圧倒される思いが強かつた。自分もあの様に、一生かかっても悔いのない人生のテーマ、いやそれ以前の、本当に自分の信じ切れるものが欲しくて欲しくてたまらなくなつ

た。班別討論では、去年参加したときよりはずっと、自分の思うものを素直に言わんとした積りだ。そんな自分のたどった正しい言葉を、身をのりだす様に聞いてくれた班友の皆さんに本当に僕は感謝する。

初めこそ長く思へし四泊五日も過ぎてし見れば何と短かき語りたき事まだ残るみ友らと別るる事の何と惜しきか
今こそは別れて家に帰るともせめて手紙を送りたしと思ふ

物事を考える指針を与えられた

(東京大学 教養 二年 松岡恒男)

この合宿に参加して感じたことは、心と心の触れあいです。先生方の熱意に満ちたご講義には胸を打たれるものがあり、その後の班別討論でも、各自が自分の意見を本当に率直に表わしていました。このような討論を初めて経験したことは素晴しかったです。短歌創作では、何としても自分の感動を伝えたいと、一首の歌に真剣に取組んでしまい、和歌を作るのにもこれだけの言葉の取捨選択の悩みや苦勞があることを、初めて知りました。君が代を自信をもって力強く歌えたのも初めての経験です。最終日の全体感想発表で参加者の体験を聞いて、この合宿には不思議な力がある、やはり合宿に参加してよかったと思えました。物事を考える指針を与えられ、学問に取り組み考えを改めさせられました。

曇り空御魂の祭終へし時驚かさされり満天の星

カメラ・レポート 13



ホテルのロビーで歓談される小堀桂一郎先生、児島襄先生。

自分はどう思ふのかといふこと

(亜細亜大学 経営 三年 木村謙二)

歴史といふものに対して本当に知りたいと思ふことや疑問に思つたことは、自分で調べ真実といふものを見て、自分はそのことについてどう思ふのかということをやつて行きたいと思つてゐます。

山田先生のお話の中で、歴史を学ぶとは人間を学ぶといふことであり、その人間の残した言葉を学ぶといふことであるとおつしやられたことが、非常に印象に残つてゐます。

また小柳先輩が導入講義でおつしやられた、人にぶつかりまごころを鍛えていくといふことや、長内先生のおつしやられた、心とは独立して存在するものではなく磨かなければならないといふことを、しつかりと心に留め、さういふことをやつていきたいと思ひます。

班別短歌相互批評の折に

真剣に取り組む班友見てをれば我も自づと言の葉選ぶ

言の葉を一生懸命選べどもなかなか出でこずくやしかりけり

我が歌にまじめに取り組み下さるる班友のあること有難く思ふ

積極的に参加できた

(徳山大学 経 四年 清水克敏)

第一日目の講義や討論では、消極的だったのですが、第二日目の朝から、班友たちをはじめとする合宿仲間との接触で、

消極的なものが徐々に減つてゆき、逆に活力がわいてきました。もともとの負けずぎらいも効を奏して、みんなとの討論にも積極的に参加できるようになり、そうなると時間の過ぎるのものはやく、気がつくともう最終日となつてしまいました。何だか少しさびしい気がしますが、これでみんなと本当のお別れと考えたくありませんので、また会える日を楽しみにしております。また、ひまなときは便りでもいただけたらうれしく思います。最後になりましたが、みなさん、大変お世話になりました。ありがとうございます。

まちわびる妹の心にかたへんと心はやるもなぜか悲しき

鳥原の別れを前に曇り空わが心うち知りてか否か

大変たためになる話が聞けた

(九州産業大学 芸術 三年 三宅心樹)

今年の合宿で自分は二回目となりますが、昨年と全然変わりにない事にはずかしくなりました。班別討論では何も言えず、輪読ではなかなか読めず、班長はじめ他の班員のみなきんにかなり迷惑をかけたみたいでした。今年は何も言えないように思つたのですが、やはり毎日少しずつでも本を読んだり、その意味をつかむ事の練習をやっていたら良かったかな、などと思ひました。でも色々な先生方の大変ためになるお話を聞けただけでも、この合宿に参加したかがあります。

最終日の朝に

朝起きて最初に思ふ我気持ちやつと昼には家に帰れる

第九班 — 男子学生 —

心を働かせるという貴重な体験

(日本大学 文理 三年 井水 武)

何といっても一番うれしかったことは、班員の皆さんが本当に良く心を働かせて語り合い、人の言葉に耳を傾け合ったことでした。日頃のサークル活動を通じて、合宿教室のテーマのようなことは多少は詳しいであろうという自負を持って参加したのですが、そんなことは関係なかったのです。どうでも良いことだったのです。むしろ自分などは他の人達と比べてまだまだ心の働かせ方が不十分ではないかと反省させられる思いがしました。

合宿の終わろうとする今、もっと熱心に先生方の御言葉や班員の話の聞くことができたのでなかったか、もっともっと心を働かせて語り合うことができたはずではなかったか、などと思われてなりません。自分にとって貴重な体験になりました。

思ふことをこめて語りくる友の言葉に胸あつくなる

カメラ・レポート14



二日目午後は九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生により「喜びも悲しみも民とともにして」と題された御講義が行われた。先生は戦前から今日に至る迄の今上陛下の御製や下村海南の『終戦秘史』を読み上げられ、「天皇が国民を信じ、国民が天皇を信じて来た事実を辿る事が歴史の真の姿を甦らせる事ではないか」と切々と訴へられた。

先入観で物事を考えていた自分に気づいた

(九州共立大学 経 一年 吉村匡史)

親戚の紹介で参加したが、パンフレットや日程表を見て話
がうますぎるので、これは危険な集りかなと思っていた。実
際に参加して見ると、そんなことはなかった。いろんなこと
を班員と話し合ったが、これまで自分なりに考えてきたこと
を話し、友の話にも耳を傾けているうちに自分が先入観だけ
で物事を判断していることに気づいた。これからはもっと幅
広く物事を見て考えていきたい。

合宿で語り会ひたる友どちと別れるときのせまるはさびし
友どちとともに過ごせし合宿で学びしことのあまたあるなり

何か救われたような気持です

(鹿児島大学 農 二年 原 一文)

日本の美しさ、日本民族のすばらしさを本で知って、この
思いを友人たちに理解してもらおうと事あるごとに話してき
ましたが、なかなか伝わらず理解してもらえませんでした。
そのことがくやしくて、自分の心は間違っではないかという
ことを確認したくてこの合宿教室に参加しました。

ここで学んでいくうちに、文章の美しさに感動する心「日
本人の心」というものを教わり、いままで私の話に理解を示
さなかった人にも「日本人の心」があるのだということに気
が付きました。我々日本人の中に脈々として伝わっているも
のがあるのだということに気づいたことで、何か救われたよ

うな気がしました。どんな日本人にも祖先の方々から承け継
いだ日本人としての血が流れているんだということを信じて
頑張っていこうと思います。

ここに居る友らとすこす日程も残りわづかになりけるかな
鹿犬の先輩にお会いして
吾を見るそのまなざしのやさしさに己が心はしだいに安まる

「深いきずな」「新しい見方」「考える種」

(中央大学 法 一年 笹沼毅彦)

四泊五日の合宿も本当にあつという間に終わろうとしてい
る。ここで出会った友達とは、何年も前からつき合ってきた
友と同じように心を開いて話が出来るようになった。その友
との「深いきずな」を実感できる喜びとともに、多くの講義
や繰り返された班別討論を通して、「新しい見方」を感じと
ることの出来た喜びもある。

この五日間の体験を「考える種」として、これから大きく
育てて行こうとする「素直な思い」があることをはっきりと
自覚している。

知りあへし班友との別れの近づけば時の流れのはやさの口惜し
新たなる我が胸内の熱き火をいよいよ盛んに燃やして行きたし

「右寄り」の合宿だと思っていたが……

(拓殖大学 外 四年 村上純一)

正直いってパンフレット等を見て「右寄り」の研修会らし

いと思って、あまり首をつっこまない方が賢明だと考えておりました。講義を聞き、誰ひとり顔見知りの友とていない班での討論を通し、しだいに合宿教室の趣旨がつかめてきました。講義の後の激しい班別討論に加わっているうちに、彼らは先生のお話や本の内容を鵜のみにしているのではない、疑って調べて熟考し、さらに知識や常識だけでは判らぬその裏の面からも「こころ」を働かせて語り合っているのだと理解できました。私のわだかまりは消えたのです。意見の違いは構わない。大切なことは妙な先入観にとらわれずに事実をありのままに見て、その上で考えているかどうか。そしてそこに「こころ」がかよっているかどうかなのだということだと思えました。もし合宿教室の趣旨を問われたなら、今回の経験を基にして以上のように説明するでしょう。そしてぜひ参加するようにすすめたいと思います。

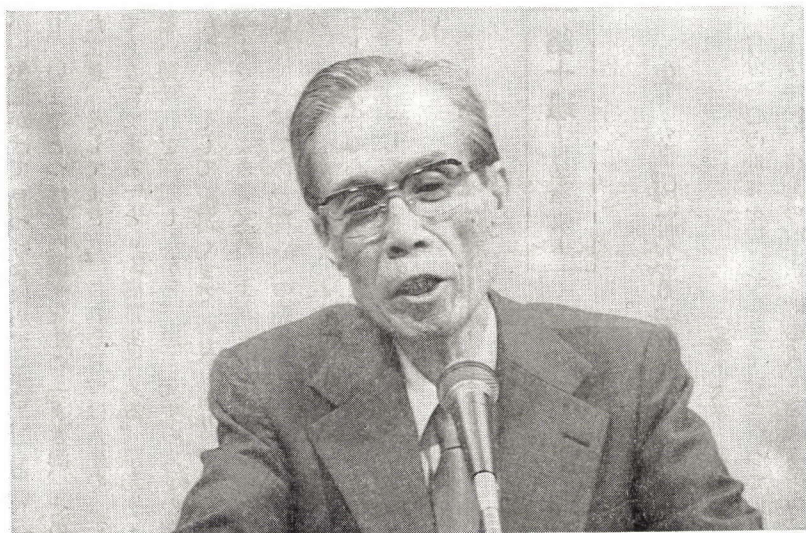
とくどもに過ぎせし部屋を去りゆくは親しき友と別るるこちす

大きな励みと自信を得た

(防衛大学校 理工 三年 佐藤信知)

昨今のいわゆる世論における国民の自衛隊に対する態度を目の当りにして、何のために我々の任務はあるのだろうかと少なからず疑問を抱いて来た。ここで多くのことを学び日本の素晴らしさの一端がわかった。現在の日本人の一部がどうあろうとも、先人の残した多くの蓄積がある限り、それを継

カメラ・レポート 15



二日目の夜、「鷗外に学ぶ——『役割』を生きた人——」と題する御講義に於て九州女子大学教授・山田輝彦先生は、鷗外が日本の近代化に貢献した様に「皆さんも天が与へて呉れると信ずる役割を生涯かかって探し出し、それを立派に果たして下さい」と述べられた。

承する人がいる限り、そして子孫にそれを伝えるためには、どんなことをしても日本を守り伝えなければならぬと思つた。自分の将来の任務にとつて、このことは大きな励みと自信になるだろうと思う。合宿に参加しなかつたら、自分の家族を食べさせるための俸給のために働くつまらない人間になつてしまつたかも知れない。本当に参加できてよかつた。

今日、自分の意見があつても言わないというポーズが格好いいと思われている風潮がある。それぞれに意見を持つているが、それに満足して意見を語らず、他人の声にも耳を傾けない。この合宿では自分の判断材料の少なさを痛感させられるとともに、自分の本心を語り合える友達ができる。多くの人達がこの合宿に参加して、意見の相違は相違としながらも、それを本当に自信を持つて言えるようになることを願つてやまない。

「全体感想自由発表」で登壇す

思ふことそのまま皆に語らんと手を挙げ我は壇上に立つ
壇上に立てば出で来ぬ言の葉のなんともどかし半ばも言へず
口にせしひとつひとつの言の葉は胸の思ひのままかと思案す
語りかくる友の言葉に胸内の伝はりしこと知りてうれしむ

身にしみた御言葉

(西南学院大学 経 三年 西山博章)

今回の合宿で身にしみた御言葉が二つある。ひとつは山田輝彦先生が語られた「天から与へられた自分の役割を、どう

か一生涯かけて見つけきはめて下さい」といふ御言葉であり、いまひとつは長内俊平先生の「よき師、その師の残された文章、そしてよき友。これら三つは人生の『三種の神器』であり宝である」といふ御言葉である。諸先生・先輩方の有難い御講義を拝聴しながら、黒上先生の太子の御本を輪読しながら、そして夜遅くまで班友と語り合ひながら、本当に「よき師、よき御文章、よき友」にめぐり逢へたのだといふ思ひで一杯であつた。この感動を持ち続けながら、これからの一年を「自分に与へられた役割とは何んだらうか」といふことに自分の心を働かせながら、真剣に学び考へていきたいと思ふ。そして、来年の夏、再びこの合宿で師友と再会したい。

来年もこの合宿で師と友と再会したしと切に願へり

第十班—男子学生—

生きる喜びに繋がる学問をしてゆきたい

(慶応大学 文 三年 垣迫太市)

自分の心の世界を広げてゆきたいと思つてゐます。ホーマー少年は、自分の町を、町の人々を涙ながらに本当に知つた、さういふ知り方をする事が、生きる喜びに繋がるやうに思はれます。占部賢志さんは、御講義の中で、伊藤仁斎の許

に集まる人々は、「人生が判るといふのは、こんなに楽しいことかと思ひながら学問をしてゐた。」と述べられました。さういふ生きる力となる学問をしてゆきたいと思ひます。

この合宿で受けた多くの感動を持ち帰って、もう一度味はひ、自分の力としてゆかうと思ひます。

全体感想発表の折

意の儘にならぬ口元懸命に動かし語る姿尊し

当時の心情を偲ぶ営為を基本にしていきたい。

(九州大学 工 三年 黒鈴雅裕)

一昨年に続き二回目の参加です。今回の合宿で期待してゐたのは、児島襄先生の「東京裁判と東京裁判史観の克服」と題する御講義だった。先生が果して何を語られるか、非常に関心がありました。先生が重要な示唆を受けた。それは、先生御自身が法廷に臨まれ、その詳細を御自分の目で確かめられながら、その中で様々な感慨や疑問をいだいておられた姿である。やはり、東京裁判を自分の心に蘇らせる為には、当時の方々の心情を偲ぶ営為を基本にしていかなばならないと思つた。それが、虚心に東京裁判を考へることだと思ふ。又、今回の大きな収穫は、和歌を大切にされる先生方の御姿を見て、自分自身の姿勢が変化したことである。その方々の姿を忘れず、一層、しきしまの道に励んでいきたい。

小柳陽太郎先生の御講義を拝聴して

大御心を偲びゆき給ふ師の君の声高らかに響き渡りぬ

カメラ・レポート 16



講義のあとの班別討論。お互ひに、講義を聞いての感想・疑問を率直に述べ合はうと努めてゆく中で、講義の理解も深まり疑問も明確化していく。

悲しさのあまり御声をつまらせし師の御心はいかばかりならむ
悲しさのほど偲ばれて吾も又目に熱きものこみあぐるなり

人の心を感じる事ができた

(国学院大学 文 三年 亀井正弘)

三回目の参加であったが、今回は、人の心を感じる、という事が少しできた気がします。小柳志乃夫先輩の導入講義の時、私は、ホーマー少年のやうに涙を見せることは恥かしいと感じていたが、話が戦艦「武蔵」に及んだ時、先輩の話される様子と、猪口嘉子さんの気持を思つて、胸がつまり、涙が出てきました。その時、ホーマー少年の言う「本当に知る」ということが、少し解った気がしました。

又、小島、小堀両先生の御講義で、現在の生活は先人の努力があつてこそ成立っているのであり、過去を憎むようなことは絶対にはならないと感じました。

これらを実生活でいかすための第一歩として、「親に心配をかけない」(長内先生の御言葉) ことから始めたいと思ひます。

小柳志乃夫先輩の講義をお聞きして

先輩の心こもれる言の葉に我が胸内の高まる覚悟

強引にでも後輩を連れてくるべきだった

(岐阜大学 教 二年 渡邊 光)

今、切実に思ふことは、岐阜に残してきた後輩の事です。

合宿の始まる数日前に、「やはり行きたくない」と言はれ、結局不参加となり、当初は、自分も気が沈んでをりました。しかし、やはり強引にでも連れてくればよかつた、といふ後悔がこみあげてきます。真剣に学問を見つめ、心を働かせて日本の国を見つめてゐる参加者の息吹きを感じさせてやりたかつた。その姿にふれば、あいつは何かを得て変つただらうと思ふばかりです。

自分自身にとって、今、耳に響いてゐるのは、「この合宿は一生の友を見つげるために参加するのだ」といふことです。豊かな心を磨き合へる友、苦しい時に本當に頼みとなる友、国家天下をいつまでも語り合へる友、そんな友に僕は十班全員でなり切れたやうな気がします。

もう一言。「輪説」には新鮮さを感じました。ほんの二、三頁を、一語一句、真剣に作者の気持をくみながら読み味はつていくのは、本當に素晴らしいと思ひました。

今回参加できなかった後輩を思ひて

合宿のこの感動をぜひ君に伝えたい味はせたく思ふ
いかならむ理由あらむとも来年は君をともし集はんと思ふ

進むべき道を見つげるために参加した

(拓殖大学 政経 三年 竹田貞啓)

僕がこの合宿に参加した理由は、生きる上での確信を掴みたいということでした。自分が進むべき道を見つけて、確信をもって歩みたいということでした。しかし、人に求めるばかり

りでなく、最後は、自分でふんどしをグッと締め、勇気を出して前に進んでいくしかないとは思っています。

今心要とされるのは、外面的問題を処理する政策のみでなく、むしろ内面の充実と、それから生まれる強いエネルギーが一番大切なことであると感じました。

正座して「おねがいします」と言ふ友の真摯な姿に気持正さる

全身がふるえる感動

(東洋大学 社会 四年 吉川敦夫)

開会式で「君が代」を歌った時、全身が武者ぶるいし、体が熱くなるのを感じました。映画「天皇陛下」を見た時は、涙が止まらず、「おれは日本人なんだ」と、ただ／＼体が震えるだけでした。

また厳肅な人は、人を黙らせる力があると思いました。天皇様は人々を黙らせる徳をおもちになっていらっしゃる方だと思いました。「現代人は、高貴なものを高貴と感じられなくなっている」とのお話がありました。が、僕の心の中にも、そのようなあさましいものがあることに気付きました。それは傲慢な心で生活しているからだと思います。そういう心から少しでも遠ざかるために、古人の残していった言葉を学んで行こうと思います。

開会式の折

指そろへ姿勢正して君が代を歌へば心おのづと締めぬ

全国の集ひし友らと声合はせ「君が代」歌へば胸の熱しも

カメラ・レポート17



夏の朝の清々しい空気を胸一杯吸って、ラジオ体操。眠気は醒め、心も生き生きとして来る。

第十一班―男子学生―

よく感ずる事の難しさを感じた

(中央大学 法 四年 秋山信之)

短歌の相互批評に随分時間がかかった。その間、僕は自分の歌を作り直すことになったりして苦労した。また、友達がどういふ気持で歌を詠んだのかをよく感ずることはとても難しいことだと思った。村木君の歌についても、僕なりに実感したところを今度手紙に書きたいと思ふ。

班の生活は、八人で活気があって良かった。ただ、もっと一人一人と本音でじっくり話したかった。岡山君が長内先生の御講義の後の班別討論の時、「一番の親不孝は、親を不安にさせることだと言はれましたよね。今までの自分を振り返ると、何か親から言はれても『心配ねえよ』なんて言っていました。合宿から帰ったら絶対親に心配かけないようにしようと思ひました。」と涙ながらに語ってくれた時、僕も自分を顧みて身につまされる思ひがして胸を打たれた。謙虚に素直に生きてみようといふ思ひが湧き、心が清められ安らぎました。

打合せの折、岡山君の一言に心動かされて

心こもる一言聞きて我が心に暖きものしみじみと湧く

我もまた君のごとくに人の身になれる心を鍛へよきたし

よき友を見つきたい

(防衛大学校 国際関係 三年 松坂普一)

二度目の合宿教室参加であった。昨年は、自分の傲慢さに気付き、もっと謙虚に思いやりをもって人に接し、人の気持ちを慮って言葉を選んで発言しようと思ひ、その他人格形成上大切なことを多く学んで山を降りた積りだった。しかし、一年経った今、「俺はこの一年あの教えを大切にしたか」と自問してみると全く恥ずかしい限りだ。人間的にちっとも成長していないと思わされた時、大きな衝撃が私を貫いた。頭から冷水を浴びせかけられた思いだった。それではこれから何をしようかと考えれば、よき友を見つきたいと思う。よき師よき本、そしてよき友を見付け、人生を豊かなものにしてゆきたいものだと思う。

長内先生の御講義の後での班別討論にて

父母の慈愛を知りてむせびなく友の姿に心うたるる

人の真実の声が聞けた

(同志社大学 工 一年 村木隆広)

今回合宿に初めて参加させて頂いて、初めはスケジュールも楽しそうだし、軽い気持で来たせいも、中々班別討論にも自分の意見が出せなかった。しかし、次第に他の人の意見に心を働かせてゆく内に、言葉の端々に現れるその人の真実の声というものが聞けたと思う。講義内容は異和感はなかった

が、全体の雰囲気というものがかなり穏やかで、かえって自分の意見をじっくり温め、内容を深めていくのに良かったのではと思う。やはり今回参加して一番得るところが多かったのは、短歌相互批評で、眠りたい中一人一人の歌を皆が真剣になって憶念し、直していったことで、今迄以上に一人一人の心が通いあい何とも言えぬ喜びを感じた。他人の歌でも完成した時は自分のことの様に嬉しく感じ、苦しんでいる様子を見ると自分も苦しく思えた。

班別短歌相互批評にて

我が歌を眼をこらし読みたまふ友らの姿に涙あふるる

日が経つのが非常に早かった

(九州大学 法 二年 三沢茂美)

この合宿に参加したのは今回で二度目ですが、昨年は天皇、防衛とか、国を思ふといったことを聞かされると感情的になってしまひ、それで今年の合宿は参加したくないと思っていました。今年合宿に参加して、色々な御講義を聞きまして、二度目といふこともあり、割合と素直に聞きました。サローヤンの話や森林太郎の話や『天皇陛下』の映画で非常に心が動かされました。しかし、それらの話は、どうしても天皇に結びつき、それがどうしても納得がゆかないのです。

この合宿に来て日が経つのが非常に早かった。つまり楽しかった。班員の仲間達がとても面白い人間だったし、やさしかったのです。これは本当に有難かったと思ひます。最後に

カメラ・レポート 18



三日目午前、「国家と我々——防衛問題について考へおくべきこと——」と題されて東京大学教授・小堀桂一郎先生による御講義がなされた。先生は日本の歴史の中で外からの侵害・危険に際して国民が国家をいかに意識して来たかを防人の歌や大東亜戦争開戦の詔書等について語られながら迎ってゆかれた。

合宿中最も印象が強かったのは長内先生の御話でした。物を大切にしない人は人も大切にしないと、いふ言葉がぐさっと自分の胸にささってきました。

長内先生の御講義をききて

先生は涙ながらに語り給ふ今はなき友を思ひ出して

亡き友と崖に並びて放尿されし五十八歳の青春語らる

友の遺歌太き声にて詠みあぐる師の君見れば泣けてくるなり

人の心について考えさせられた

(拓殖大学 外国 三年 前田 修)

私は考えの浅い人間だ。私はともすれば表面的に「戦争の非人道性に反対する」という立場を追い求め、何の為に戦い何の為に大切な命を捧げるかという事を考えなかった。独りよがりの平和観、言い換えれば自分さえ良ければいいというエゴイズムが私の全てを支配していた様に思う。しかし、この合宿で先づ考えさせられたのが「人の心」である。死の恐怖を越えて本当に愛する国の為、そして心から敬愛する天皇の為、さらに祖国に残る家族や友人や恋人の為に、戦地へ向かった若人達の気持を考えると涙の溢れる思いがする。人生の一瞬／＼をどう生きるか、如何にして心を持ってこれから的人生を大切に生きてゆくか。それを考えることが、これからの私の人生に課せられた命題であろうと思われる。

夜の集ひにて

ひさびさにビールを飲んでそのうまさ胃にしみ渡り我を忘るる

『勝ちマス』をおどり唄ひて痛るれど心晴れたり拓大生なれば

一生涯忘れる事の出来ない経験をした

(亜細亜大学 経営 二年 岡山英一)

初めて参加した合宿教室で、恐らく一生涯忘れる事の出来ない経験をした。御講義の際、壇上で涙ながらに語られる先生の御姿に目頭の熱くなる思ひがした。中でも長内俊平先生の「一番の親不孝は、親を不安にさせることだ」といふ真心の籠った力のある御言葉は、私の精神を響かせた。最も身近である筈の親に対して、これ迄の私の態度を反省すると同時に、そんな私でも一所懸命育ててくれる両親の真心に感動し、しゃくりあげて泣き出してしまった。

今回もう一つ印象に強く残った経験は班友との生活であった。短歌の相互批評の時などは、全員で一人一人の歌を真剣に批評し合ひ、一睡もせず朝を迎へた。ここまで真剣な友との付合ひはこの合宿に来るまで一度だつて経験したことはない。来年も是非参加することに決めた。

長内先生の御講義を聞きて

父母に再び心配かけまじと島原の地で己に誓ふ

聖徳太子の御本を読んでゆきたい

(佐賀大学 経 四年 重久俊則)

今回の合宿に参加して、初めてじっくりと『聖徳太子と日本文化創業』の御本を読んでゆきたいと思いました。この本

をじっくり読んでゆけば、これからの日本の進むべき方向を考える時、大きな視座を自分達に与えて下さるような気になりました。次に、長内先生の御講義を聞いて、自分の今迄の親に対する態度を反省させられ、少しでも親に不安感を与えないようにしなければならぬと思いました。親への感謝を忘れては何も始まらないのだということを教えられたような気がします。最後に、児島襄先生と小堀桂一郎先生の御講義を聞き、児島先生の歴史家としての史実検証の緻密性を学ばされ、小堀先生には国防に対する考え方において新たな視点を教えられたように思います。しかし受動的では駄目なので、両先生が言われたように、自分で歴史を直視して史観が作りあげられるよう、又自前の国防問題に対する考え方を持てるよう研鑽してゆきたい。

長内先生の御講義をおききして

師の語り給ひし言の葉に心動きて涙さそはる

非常に多くの体験ができた

(中央大学 経 一年 長山 晃)

この合宿に参加するのは今回初めてで、大学の先輩の強力な推薦によって余り内容も知らずに参加した訳ですけれども、この五日間を振り返って、非常に多くの体験ができたことをとても満足しています。僕は二日目と三日目に体の調子が悪くなって、その日の半日程は医務室で過ごし、児島先生と小堀先生の講義は聞けませんでした。しかし、この合宿を十

カメラ・レポート 19



三日目の午後、和歌創作前に、福岡市立弥永小学校教諭・是松秀文氏によって「和歌創作導入講義」が行われた。和歌創作の意義、作り方の基本などを、教へ子が書いた短歌の感想文や御自身の学生時代の体験に触れられつつ、具体的に語られた。

分を知ることができなかったとは思っていません。他の講義は大変興味深く聞きましたけれど、それ以上に、班別討論やレクレーション、夜の集い、徹夜で行った班別短歌相互批評などの印象が非常に強過ぎて、正直言うと講義の内容は今では覚えてるのが少い位です。

班別短歌相互批評にて

夜明けには歌直し終へ眠たさをこらへし友に笑みを認めり

第十二班 — 男子学生 —

素直な気持ちを忘れずにいたい

(防衛大学校 人文社会科学 一年 石巻義康)

私は自衛官には、いついかなる時も冷静な態度や行動が求められると思って居た。その考えは今でも変わらない。しかし人間である以上どうしようもなく心が動かされるということはある。自分は今までに確かにそういう経験をしたことがあったし、この合宿でもそうであった。私はこの合宿で、国防問題を学ぶつもりであった。しかし終ってみれば、人として精一杯はじめに自分の人生に取組もうという姿勢があれば、肩肘はって国防などといわなくてもよいのではないかという気になったのである。私はこれからも自分の信ずる道に従って生きていこうと思うのであるが、その時には素直な気持ち

を忘れずにいたい。素直に、自然に生きていくことが、様々なことを気付かせてくれると思うからである。

短歌創作にて

様々な言葉の中から我が心にかなふ一語を選ぶ苦しさ

班別短歌相互批評が印象に残った

(北海道工業大学 工 一年 橋本和幸)

私がこの合宿でとても印象に残ったのは短歌相互批評です。今まで相互批評は何回かやってきました。しかし、なぜか今回の合宿での相互批評が一番良かったように思います。それは今まで先生達がついておられ、その先生達の意見である程度短歌を決められていましたが、今回は班の人達とだけで、短歌をつくりあげた人の気持ちを分かちあえたという気持ちを持つことができたからです。

これからは、和歌を毎日つくって自分の本心に思う気持ちというものが一体どこにあるのかということ深く知り、又和歌というものがどれほど素晴らしいものであるかをできるだけ多くの人に教えていきたいと思いました。

班友と共に過ごせし一時は宝にまされる高き想ひ出

合宿に来て良かった

(徳山大学 経 二年 山本啓介)

合宿の一日目、二日目は講義内容が良く分らず、時間が長かった。しかし四日目の短歌相互批評の時間は、僕はとても

印象に残っています。夜の集いの後、時間に関係なくみんなが取組んでいた。初めて短歌を作った僕にはみんなの短歌の批評はできなかったけれど、自分の歌に対して先輩たちが批評して直して下さったこととても感動を受けました。又僕は人見知りが激しいので本当に自分の意見が言えないのですが、班の人と何のわだかまりもなく話せたことがとても嬉しかった。最後の全体感想自由発表で、先輩方に勧められて登壇した時は、いろいろなことが思い出されて涙を止めようとも止められなかった。とてもきつかったことと本当にこの合宿に来て良かったことが今想い出されます。

全体感想自由発表の時壇上にて
壇上で話す前から感動で何も言えずに涙ながるる

先生方の願いを感じた

(早稲田大学 社会科学 三年 村主真人)

国文研の合宿は今回で二度目であるが、単に知識を吸収するに止らず、大自然の中で全国の友と班討で本音を吐露し、ほんの僅かではあるが友人の心情に迫る事ができた。

先生方の御講義はどれも胸に染み亘ったのだが、それぞれの先生方が自分の学問の原体験を持っておられる事を知った。そして御年を召された先生方の、若い自分達に対する願いが言葉の端々から確かに感じられたのである。

山を降りれば世俗化した社会に戻ってしまうが、その中にあって、自分の心を活性化しながら、人情の機微に感じる心

カメラ・レポート 20



待ちに待ったレクリエーション。友等と談笑しながら足取りも軽やかに山道を行く。

を養っていききたい。そのためにも、日々の生活の中で言葉を大切にしながら、記紀万葉を学び、自分でも和歌を詠んでいきたい。

去年の夏再会を約し別れたる友の名掲示板に真先に見ゆ

彼もまた我の姿を認むれば声あげながら駆け寄りて来る

つつがなくすごしたるかど握りたる手のぬくもりのあたたかさかな

慰霊祭にのぞみて

先輩の護り伝へこしこの国に生かさるるを知るけふのみまつり

いろいろな言葉が心に残った

(中央大学 法 三年 青木英樹)

私は二度目の参加であるが、前回全く気付かなかったものを腹の底からしみじみと感じたような気がする。それは具体的には、歴史を学ぶとは歴史の中に生きた人を学ぶこと、人を学ぶとは人の言葉を学ぶこと等や、自分で歴史を直視して自分の史観を持つこと、国防について自分の考えを言えるような勉強をすること等であった。しかし自分にとって何よりも心に残ったのは、大学三年となった私が将来の生き方、生き甲斐を考えていた折に「天が与えた役割を生涯にわたって見出すことが生きることである」という言葉、「人生を豊かにするのは良き師、良き言葉、生涯の友」という言葉であった。今後これら言葉をあたためながら自らに問うてゆきたい。

合宿最終日に臨みて

苦しくも楽しくもありし合宿の終るを思へばなどか寂しき

合宿に参加して良かった

(西南学院大学 法 四年 國崎真一)

私は八月中は所用があり、始め合宿に参加しないつもりでした。また大学一年の時に参加した合宿で何か心にわだかまりが生じて、ふっきれないものもありました。

ところで先月、教育実習を体験し、自分の勉強不足と生徒の心を大切にするのを知りました。人の心をおもひ、共に感じるこそがこの合宿の目標だと思えます。だから、学生として参加できる最後の合宿にはどうしても参加したくやってきました。先生方の講義を拝聴し、ひどく心をつき動かせられるようでした。また友人たちと話しをする中で自分の心にあったわだかまりもふっきれたようです。これからはゆっくりと足を踏みしめるようにして考え学び、心を磨いてゆきたいです。本当に学生最後の合宿は参加してよかったです。

全体感想発表にて

友どちの胸にこみあぐものあらむすすみてゆくは我もうれしく
おもふこと口に出づともその顔の泪が友のころを伝へぬ

日本人である事にうれしさを感じた

(亜細亜大学 経 三年 飯島順一)

今年の合宿は特に感慨深いものがあった。日本人に生まれ日本人として育ち、日本人として生きている、その事にうれ

しさを感した。私は一般参加者より早くこの合宿地に着き、準備を手伝った。合宿中は朝の集いの時国旗掲揚を行った。

これは表立った存在ではないが、重要な役目と思い、一所懸命つとめたつもりである。その国旗掲揚を準備している私達を長内俊平先生は歌に詠まれていた。「若きらは明日にそなへていくたびも国旗掲揚をくりかへすかな」歌稿を何げなく眺めていると目に入ったのであるが、私達が歌に詠まれているのを非常にありがたく、うれしく思うと同時に、もったいなく思われた。こうした思いを大切にしたい。又そう気付かせて下さった長内先生に感謝したい。

感想文を書きしおり

早や五日合宿の終りが近づきて班友との別れをさびしく思ふ

合宿を終りて帰る班友がらに事なきことを切にねがひぬ

長内先生へ

師の君の歌ひ給へる我等の姿有難き思ひに涙あふるる

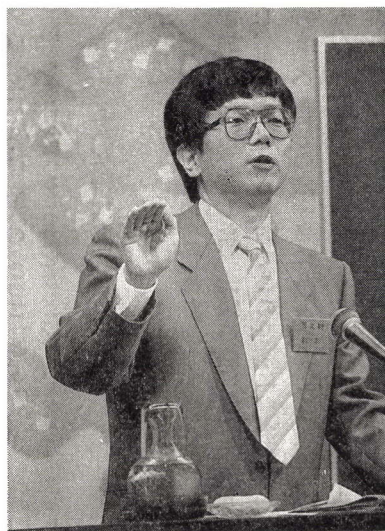
第十三班—男子学生—

魂と魂のぶつかり合ひを体験した

(摂南大学 国際言語文化 一年 尾田 真)

今回この合宿に参加させていただき、自分の学内では、なかなかさせられない真剣な魂と魂のぶつかり合ひを体験させてい

カメラ・レポート 21



「体験を語る」。右から日商岩井勤務・澤部寿孫氏、拓殖大学教授・松本幹男氏。澤部氏は、学生時代に合宿に参加し大変広やかな心を体験したこと、社会生活の中で自分を励ます為に歌を作っていること等を語られた。松本氏は、「日本人は言葉を観客的に観察することはせず、言葉を通じて心を鍛へて来た」と述べられた。

ただいたやうに思ふ。その中で、真実なるもの、本当に価値あるものを常に求め合ふ仲間が得られたのではないかと、非常にうれしく思ふ。

それから、この合宿で気付けられたことは、小田村先生の御言葉にもあったが、今の時代状況を生み出す我々一人一人の心のあり方を見つめ直し、正してゆくことが大事だといふことだ。自分は、国についての勉強を数年続けてゐるが、合宿に参加するにあたって本当に純粹な気持ちであったのかなと思ふ。ひたむきな姿勢がなかったやうに思ふ。感想発表の時、泣きながら心情を吐露された方の姿を見て、自らの姿勢が正されるやうに思った。

泣きながら思ひをのべる友どちの姿に接し心正さる

よき師、よき友をもつよろこび

(西南学院大学 法 一年 田鍋彰可)

私が高校生のときにこの合宿のアルバイトをする話がありました。私が、所用のため遠慮させてもらったことを、今ごろになつて後悔しています。

私がこの合宿に参加し、また信和会で勉強しているのは、全て恩師が通つてこられた道なので間違ひはないと信じているからです。恩師がこの合宿に参加され、また講義される理由がはつきりと理解でき、心から共鳴できます。

私には、長内先生のおっしゃった、よき師、よき友、よき言葉に触れられる環境があります。その幸福をもう一度見つ

め直せたことは最大のよろこびです。

師の君の信じ給へるこの道を吾もたどりつゝ生きてゆきたし

よき友を得た

(千葉大学 園芸 三年 小林靖則)

一年生の時にこの合宿に参加して以来、二年ぶりに合宿に参加させて頂きました。先輩の強い推めもあり、自分を更生し、自分を省みる目的でこの合宿にのぞきました。

まず、自分の無学さに憤りを感じずには居られませんでした。自分を顧みながら思うことは、とにかく心を空にして、事に当たらなければ自分の感情、考えが起り得ず自分をみつめることができないうことです。

また、班別輪読・討論・短歌相互批評を通じて、よき友を得ることができました。たった四日生活を共にしたただけなのに、心の通じ合いを感じました。

これを機会に、この会に限らず常にここで学んだことを生活に生かしていきたいと思ひます。ありがとうございます。

震たるわが胸中に一筋の光を与へし友らありがたし

大御心のもとに喜びをもつて生きてゆける

(中央大学 文 三年 土井郁磨)

班員の皆さんのお蔭で楽しく五日間を過ごせたことを感謝します。これから又、通常の学園生活にもどる訳ですが、今

上天皇の「七十歳になりて」の御製は忘れられないと思ひます。加納先生は「国民の生活を、国民みんなの気持ちをも全部おさめられてゐるやうな御歌」と、この御製について語られました。国民を思はれる大御心のもとに、我々は生活してをることを思はずにはをれません。このやうな広き御心を憶念すると、喜びを持って生きてをれると思ひます。

「七十歳になりて」の御製を詠みて

国民を思ひます広き御心を憶へば生きゆく力のわき出づ

加納先生の御言葉を信じてゆきたい

(早稲田大学 法 三年 新屋信隆)

今回の合宿では、先生方の講義・講話を本当に耳を傾けて聞きました。一度たりとも眠くなつたことはなかつたし、それほど真剣に聞けたことに驚いています。合宿では本当に心動かされ、内面から湧きあがる力と講義を聞くことのできたうれしさを、身にしみて感じました。どの先生の講義も素晴らしいものでしたが、特に加納先生の御講話は忘れることができませぬ。「信ずることが出来るものを持つということ。それは人間が生きていく上で最も大切なことであるし、なんとうれしいことか。そのことの真疑はたとえどうであろうとも自分が、信ずることを持てたということが大切ではないか」。加納先生の御声を聞いて本当に私はうれしくなりました。

私はこれからもずっと、この加納先生の御言葉を信じてゆ

カメラ・レポート 22



食事の時間も各班ごとに食卓を囲み、班友と様々な話をしながら心づくしの料理を頂く。

きたいと思います。合宿の間の四泊五日は本当に充実して
ました。そして、この合宿に参加できたことに對し、本当に
感謝しています。

加納先生の御講話を拜聴して

親鸞は御言葉信じ入りしか源空いまず一信海に

ひたすらに心通わせ聞きし師の御言葉信じ我も生きたし

参加してよかった

(拓殖大学 外国語 四年 本田雅夫)

合宿の初めの頃は、講義の内容がつかめずただ耳の中を素
通りする感じで、班別討論にしても私一人、話についてゆけ
なくて恥かしい思い、くやしい思いをした。しかし合宿四日
目になり、聖徳太子の講義・班別討論から、一人の参加者と
して意見を出せるようになり、ようやく合宿がおもしろく感
じられた。

私自身今まで偏見的な物の見方・考え方で、又世間に流さ
れて物事を考えていたように思う。それがこの合宿で、自分
のもつ世界とは全く違う友人に出会え、彼らの考えを聞く中
で自分自身が本当に勉強させられた。

この合宿に参加して、とてもよかった。これから先、よき
師・よき友をもてるよう素直な心をもてるよう努力したい。

長かりし合宿はけふでとじれども友との別れはなごりをしけり

第二十一班—女子学生—

心を磨くことを教えられた

(仏教大学 文 三年 竹野佳代子)

本当にこの合宿に来て良かったと思います。毎日毎日感動
していました。小中高時代に日本に対して否定的教育を受け
「本当に日本は悪い事ばかりして来た国なんだろうか、戦前
の日本は帝国主義によって国民がずっとだまされた時代なん
だろうか」等と現代の教育や社会の風潮に疑問を抱いていま
した。その後「どこかに素晴らしい日本があるのではない
か」と考え、私は他の文化サークル合宿に参加しました。そ
こでは知的理解が多いのですが、この合宿では本当に心を磨
くこと、真の日本人の心の美しさ、素晴らしさ、尊さを身も
もって教えて頂けた様に思います。最終日の全体感想発表は
特に感動して最後まで涙がとまりませんでした。本当にあり
がとうございました。

全体感想自由発表のをりに

壇上で感想述ぶる友達の深き憶ひに涙とどまらず

とつとつと語る友等の言の葉の深き憶ひに胸打たれけり

国のため人のためにとつとめある君に冷たき世情うらめし

国防の重きつとめに励む君の瞳の輝き我忘れめや

本気で話し合える友を得た

(北里大学 薬 三年 藤川尚子)

いまだに感動の嵐からぬけだせません。合宿で人生に関していろんな事を学んだと思います。人の哀しみにぶつかった時、涙ながらに哀しみを知った時に、自分の本当の人生が始まること。何事にも真心を込めて、自分に与えられた役割を果たすこと。「心を働かせる」ことの大切さ等を知りました。この合宿で得た大切な大切なものは友情です。本気で話し合える友達を得たことです。そしてもう一人、私たちに一人一人直接御指導して下さいました徳永先生。そして初めての短歌。簡単そうに見えて、いざ自分が作って見ると大変難しく驚きました。合宿に来て本当によかったと思います。そして、日本の国の事をもっと学びたい勉強意欲をかきたてられました。来年も必ず来たいと思います。

刻々と別れの時はせまれどもつきせぬ名残り惜しまるるかな

ハッとさせられた言葉

(鹿児島大学 教 二年 江口芳子)

合宿の前からとても不安でたまらなかつたんですけど、今四泊五日の合宿を終えて、本当に合宿に参加してよかったという気持ち一杯です。第一に私をすぐにとけこませてくれた21班の新しい六人の友達と徳永先生に出会えたことです。新しい友達は個性豊かで素敵な人達、先生は難しい講義内容を

カメラ・レポート 23



「慰霊祭」。古式ののっとり戦時、平時を問はず、祖国日本に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊祭りがしめやかにとり行はれた。

かみくだいて教えて下さいました。心を働かせて語りあったこの証を大切にしていこうと思ひます。第二にハッとさせられた多くの言葉です。「親に不安を与えないことが親孝行なんだ。美しいものは美しい精神から生まれる。天が自分にどういう役割を与えているか」等々すばらしい多くの言葉を得ました。これから国防の事など色々勉強して、真の日本人になりたいです。もっともっと日本の国を知り、日本を愛したいです。

友達と夜どほし語り今日の朝の日課を忘れ寝過しにけり

忘れていた大切なものに気付かされた

(中村学園大学 家政 二年 山田和子)

初めてこの合宿に参加し、沢山のことを学ばせていただきました。小柳さんの講義で「本当に知る」とは涙を流すくらい体験をした時の事なんだと思われ、自分もそのような体験をしていきたいと思ひました。又一般では戦前は悪で戦後は善だと言われますが、私は戦前は善、戦後は悪と考えていました。しかし「戦前にも戦後にも日本の為に頑張ってきた人がいたから日本はこゝまで発展して来た。かけがえない生命の積み重ねがある。」と言われハッとさせられ、自分は今歴史を生きているんだと強く感じました。普段忘れていた何か大切なものを気付かせてもらい本当に参加して良かったと思ひます。その大切なもの一心を大切に日本の歴史や、日本のことを学びつつ考えていきたいと思ひます。

師の君の念ひあふるる講義聴き誠の心の大切さを知りぬ
一人一人の友等の感想聴き居れば思はず涙の込みあぐるなり

素直になることの大切さを知った

(長崎大学 教 一年 早田保美)

私がこの合宿で学んだことは「素直になること」の大切さでした。心のうちをありのまま伝えたいあらわしたい願いを抱きつつも、どうしても虚勢をはってしまう自分が嫌でした。皆さんの意見を聞いてみると、本当に素直に正直に話しておられる。飾り気のない言葉であるけれど、真心をこめた重い言葉となって私の心にしみわたっていくようでした。自分の心に素直で正直であることが真実の生き方であり、本当の日本人になれる道だと思ひました。もう一つは人を思いやる心、信じる心。私がこれほど心を開いて素直な自分になれたのは、班が一つの信頼で結ばれていたからだと思ひます。人を信じて思いをあらわし、人を思いやって人の言葉に耳を傾けていくうちに、心がのびやかになっていくような気がしました。

友どちと心合はせて励みにし集ひの日々を吾忘れぬや

真心をもつて事にあたりたい

(熊本大学 大学院 二年 山方富美子)

合宿を終えて、私が学ばされた事、それは、人間生きていく上で、確かな信念をもち、真心をもつて物事を行っていく

なければならぬということでした。何を行うにしても、心の伴わない、真心のないものであるなら、人の心にも通じず、自分自身空虚な気持ちに陥ってしまう。普段の生活において、これらのことはわかっているように見て見過してしまっていました。改めてふり返ってみると、御講義において、先生方の心のこもった御言葉を拝聴し、それを討論という形で、より一層理解を深めていく。ここに大きな意義があると感じました。寢食を共にした友人達と真剣に語り合う事で、自分の心というものはっきり自覚できるようになるのではないかと思いました。

班員と語らひはずみ夜は更けて明日の別れを共に惜しみき

ありのままの心を語りあう

(日本青年協議会 田中和子)

自分を気どらずに、ありのままの心の動きを語りあいたいと思つて合宿に参加しました。班長の山方さんが、自分のあたりまえの生活をふり返りながら発言する言葉や、班員の言葉に驚きをもって接している姿には、教えられるところが多かったように思います。小柳陽太郎先生、山田輝彦先生の御講義中の御姿も忘れることができせん。なんと明るい、澆刺とした御姿であらうかと。人生を生きるとは、学問をするとは、国を愛するとは、こんなにも豊かなことであるのだということをまざまざと見せて頂いたような気持が致しまし

カメラ・レポート 24



三日目の夜更け迄、助言者の先生方によって「選歌作業」が行はれた。全参加者から提出された和歌が、一首一首慎重に検討され、各自一首以上の歌が選ばれていく。

た。人生の真実にふれること、本当に経験するということ、それを求めに求めていきたいという気持ちで一杯です。しまの道も更に努めて励んでいきたいと思えます。

全体意見発表を聞き

涙して「来てよかった」と壇上で述べる友らに胸あつくなる

第二十二班—女子学生—

本気で語り語ってきた

(杉野女子短期大学 被服 一年 木村明子)

この合宿に参加させて頂いて本当によかったなあと思えました。班で本当に自分がどのように思っているのか、本気で語り合ってきたように思います。そして皆さんの真心がよくつたわってもぎました。私は今まで人に真心をつくそうとか、人を愛せる人になろうとか思っていたけれども、ここにきて今までの自分はそういう事を忘れていたんだ、と思いました。

先生方のお話をお聞きして、時々わからない所や、話がわかるまで時間がかかってしまう時があったけれども、こんなにも日本のことを思っている先生方にお会いできて嬉しかったです。先生の話がわからなくても先生がどんな方なのかなあと感じだけでもわかってよかったと思えます。

君が代を歌ふ心は一つなり美しきかな日の本のうた
天皇と太子のみ心知りゆけば我れ嬉しくて学ばんと思ふ
プリントを各部屋ごとにくばらるるアルバイト生のありがたきかな

友を宝と思ふ

(中村学園大学 家政 三年 南 里枝)

班員の方との出会いほど、この合宿で感動したものはありません。先生方の御講話は素晴らしいことはわかりますが、気持ちに入ってこなかったんです。それは私は本当に常識がなくて世間知らずで、先生方は私達が社会情勢を認識していることを大前提として話していらっしやったようですが、私はその大前提をまず理解することで精一杯だったのです。

でも班別討論で皆さんと色々議論しているうちに、その先生が何を言わんとされていたのかというのが、おぼろげながらわかってきて、私にとってこの班別討論という時間は本当に貴重な時間でした。そして皆さんの学ぼうとしている態度をみて、ああ自分ももっとももっと勉強しなければというか勉強したいと思うようになり、そう思えるようになった自分がすごく嬉しく思いました。本当に班員の方には感謝の気持ちで一杯です。

御友らと真心語りし合宿の喜びを我は宝と思ふ

集ひきて友らと共に学びゆけば我のつたなきをしみじみ知るなり
別れゆけどこの合宿で得し友を宝と思ひて大切にせむ

合宿で感じ得た二つのこと

(西南学院大学 文 三年 戸田淑子)

この合宿に参加して感じ得た二つの点を述べたいと思います。一つは最終日の全体感想自由発表の際、皆が発表する言葉の中に何かを求めたいという真摯な姿勢を感じました。やはりこのように真実を求めることが人の生きる道だと思えました。諸先生方、皆さんの真剣な御様子を伺って自分の常日頃のいい加減さを恥じる思いがしました。

もう一つ得たことは、「心を働かせる」ことの大切さです。しかし残念ながら私は十分に心を働かせていません。自分にとられすぎたり頭で考えたりして、心の働きがすぐく怠慢となっているということを和歌を読む時に感じました。「心を働かせる」ことの最も重要な時は、人を思う時です。心から人を思うことのできる人になりたいと思います。

全体感想自由発表を聞きて

島原に集へる友の言の葉に求むる心のおふれたるかな

すがすがしい気持ちになれた

(朝日本電気 総合経営研修所 藤城朋子)

合宿も終わりにさしかかってようやく私は、何故私の友人がこの合宿に参加することを勧めたのかわかったような気がします。普段の生活の中では、たとえ自分の意見が異ついても、それを主張することが許されず、理不尽に思う感情を

カメラ・レポート25



四日目の午前、福岡県立福岡中央高校教諭・占部賢志氏により『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読導入講義が行はれた。御自身の体験を述べられ乍ら輪読の意義を語られ、太子の御本より数ヶ所を提示され、その表現の微妙さや文章の勢ひなどを指摘し輪読のための手引とされた。

抑えることが美德であるとされることが多いのです。それを仕方のないことだとあきらめて受け入れている自分にいつしか息のつまる思いをしていたのだと思います。

この五日間、私は思ったことを言いたいだけ言わせていただきました。実に気持ちよかったです。そして今とてもすがすがしい気持ちでここを去ろうとしています。先生方、班の皆さん本当にありがとうございます。

美しき大和の国に生まれしをいまあらためてうれしと思ふ

女性として国を守るとは

(尚綱短期大学附属幼稚園 益田 文)

小田村寅二郎先生をはじめ諸先生方も赤ん坊の時は母親に抱かれ、母の言葉を聞いておられたのです。先代の偉人もある時は母に諭され、ある時は女性に励まされ悩まされてきたのであろう。世の中には男女があり当然性差が生まれる。もしも性差により男の方が戦い国を守るのならば、私達女性はりっぱに戦いますからお育てはぐくまなければならぬのであろう。それが女性としての国を守ることであると信じる。しかし男性以上に広い視野で物を見つめ、小さい事に動じない良妻賢母になれるであらうか。短歌を通しての繊細な日本人の心、美をいつくしむ姿、私もそのような日本人女性として成長していきたい。

友どちの思ひを語る口元の震へる様にまことみえけり

わが胸は雑木林に咲き匂ふ白百合のごと清らかなりけり

第二十三班—女子学生—

真剣な友の姿に心打たれた

(尚綱大学事務局 坂井澄子)

初めてこの合宿に参加させて戴いたのは、四年前の大学一年生の時でありました。聞くもの全てが異様に思え、苦痛に満ちた五日間を過ごした事が思い出されます。そして今回四年ぶりに参加させて戴き、物の捉え方、感じ方が随分と変わっている自分を発見致しました。御講話全てが納得のいくものではありませんでした。異和感を抱くものや、反発したくなるものもありましたが、それなりに割り切って考えるようになってきました。

班別討論の時、皆が各々自分の考えを懸命に話している姿には心打つものがあり、日常では思いもよらぬ経験をさせて戴き感謝しています。次に来る機会があるかわかりませんが、この体験は忘れることはないと思います。私の拙い話を耳を傾けていただいた班員の皆様、有難うございました。

全体感想自由発表を聞きて

壇上にてあふるる思ひを言の葉に託する班友に涙させはる

班員の気持が一体となり感動した

(広島文教女子大学 文 四年 谷川博子)

二回目の参加ということで、今回はとても楽しみにしていました。しかし御講義をお聞きしても、理解はできるのですが、感動できないさめている私があり、とても苦しみましました。

そういう中で四日目に、長内先生の「親を不安にさせるのが一番親不孝である」というお話を聞いて、初めて涙が出るほど感動をうけました。これまで随分と親を不安がらせたことがあり、とてもすまないと思いました。その時は班員も同じように感動し、涙を流していました。班員が皆一体になった気持ちが出て感動しました。

さらに大きな感動は班別短歌相互批評の時にやってきました。今までの私はとても相互批評が苦手で、なかなか友の短歌に心をはせることが出来ませんでした。しかし今回は初めて出来たのです。我を忘れ時間を忘れて友の短歌に心が集中していたのです。御講義だけでは得られない、とても大切なものを得ることができ、とても嬉しく思いました。

長内先生の御講義を聞きて

父母を不安にせしことあまたあり心の底ゆすまぬと託ひたり

カメラ・レポート 26



国民文化研究会監事・加納祐五先生は、「Belief that と Belief in」と題する御講義に於て、「人が生きるには、信じ従ふといふ Belief in が必要です。昔から人が伝へてきたものを信じるところに伝統がある」と述べられた。

この合宿で得た信に生きたい

(岐阜大学 教 二年 古市桂子)

心をよせ合せて話せたのではないかと思えます。今まで自分がとかく唯物的に生きてしまうことで悩んでいましたが、こういう場にいるとき心が清らかになり、とても嬉しくなりました。

親鸞上人が法然上人に対してそうであったように、私もこの合宿で話されたことを信じきろうと思えます。なぜなら、日本はこういう想いを継承した方々によって続いているわけですし、これを信じきった時、私が好きで好きでたまらなくて実に美しいと思っているこの日本で、生きていく日本人となれると思うからです。ただ、想いと行動は一つであるべきものだということ——とつても胸が痛くなりました。今後、気をひきしめてまいりたいと思えます。

真なるやまとをみなならむとて先達の御言葉心に刻ま

友のまごころに感動した

(鹿児島大学 農 二年 山内聰子)

初めて参加させて頂きまして、戸惑うことばかりでした。初日の講義の後の班別討論で、班友の皆さんが、自分とは異なる深い部分で感じとったことを素直に述べられているのに対し、私はとても自分の意見など言える状態でなく、「自分

は一体何を聞いていたのか」という思いが先走り、その思いもうまく言葉に出せずに涙があふれました。しかし班友の皆さんは、私の気持をすぐに理解してくれました。数時間前に初めて出会った方々とこんなにも心が通じ合えることが本当に嬉しく思いました。自分を深く見つめることができ、思いやりの心ははぐくまれたと思います。難しい御講義に考え込む事が多く、勉強不足が反省されますが、合宿に参加されたたくさんの方のまごころに触れることができたことは、何よりも尊い体験でした。参加できる限り、参加したいと思えます。

全体感想自由発表にて

壇上に立ち胸にあふるる思ひをはおさへきれずに涙流るる

国や人を思う気持を大事にしたい

(島根大学 理 二年 笠原美智恵)

この合宿には初めて参加させて頂きました。大学ではサークルで学んでいます、国家とか政治関係に本気で関わらねばならないと思ったのは最近です。

児島先生の御講義の中で「歴史を直視し、自分の歴史観を持つ」とか「現今と違う昔を理解するには、昔の人の立場に立って理解する」とか言われたのをよく覚えています。戦争を知らない私達が、大東亜戦争を頭でなく身をもって理解し、東京裁判史観を果して克服できるだろうかと考えまし

た。

小柳陽太郎先生の御講義で、終戦前夜の御前会議の様子と、先生の御姿に深く感銘を受け涙が出てきました。この感銘は御前会議に実際に参加していた方々に比べれば、微々たるものかもしれない。でも、この国を思う感情を今の日本人が持つことさえできれば、日本は本当に立ち直れるのではなからうか。又全体感想自由発表で、色々聞いているうちに、本当に人の心を動かすのは知識や理屈を超えたところの国や人を思う気持ち、思いやりではないかと思いました。ここで得た日本を尊く思う気持ちを人々に話そうと思っています。

全体感想自由発表の折に

ひとまはり大きくなりし後輩の言の葉聞きて我も励まん

心を開く友の姿に心打たれた

(尚綱短期大学 家政 二年 村上祐子)

私は事情があって合宿には二日目から参加させて頂いた。班員の人たちは、とても暖かく迎えて下さった。御講義や班別討論などに参加している内に、自分の中にあつたわだかまりが少しずつとれていくように思えた。ふだんの私では、めったに話さないこと、考えもしないことを、本当に真剣に考えておられる姿を見て、全く考えていない自分がすごく恥ずかしくなった。私はこの合宿に来て、講義はもろろんのこと、友達とは本当にすばらしいものだと思つた。四日

カメラ・レポート 27



「若き友らへ語りかける言葉——二者択一から二者融合の道へ——」と題された国民文化研究会事務局長・長内俊平先生の御講義。「人生の大事や人情の機微は昨今流行の〇×方式(二者択一)の思考では割切れない」と述べられ、「二者融合の道とはしきしまの道である。互ひに歌を添へた手紙を出し合ひませう」と語られた。先生の暖かな御心のこめられたお話に一同は心が洗はれる様な清々しい感動を覚えた。

間の間に、心を開きはじめて涙して話してくれる友、一所懸命に思いを述べようとして、言葉が見つからずそれでも話している友、このような友の姿に心打たれた。それぞれの生活に戻っても、この合宿で学んだことを忘れないようにしたい。

全体感想自由発表の折に

涙して言葉にならぬ友を見て我も思はず涙流せり

真心は必ず通じる事を実感した

(北九州大学 文 四年 倉光朋子)

一年間待ちわびてゐた合宿を、今、このやうな感動の思ひで終へることのできる喜びを有難く思つてゐます。班長として皆の心情をぶつけ合ふ場にする為、懸命に言葉を捜し語りましたが、何とも、のれんに腕押しといった空しさを初めは感ぜずにはゐられません。けれども今は、真心はきつと通ずるものだといふ事を改めて実感してゐます。自分が求めたものを十分に受けとめきれない焦燥を一人の班友が語つた時、まはりの班友が同じ思ひで友の心の苦しみを分けあひ、助けあつた真剣な姿に私の心は救はれました。本当の心をやうやく語り始めた班友の声に私は泣きました。その声が班友の心を揺さぶり、互ひにお互ひの気持ちにまで心を配ることになつたと思ひます。

最後に班友の一人が全体感想自由発表の時、壇上に立つて

自分自身の心を聞き、心の内に沸きあがる合宿の感動を訴へた時深く感動しました。班の方々のま心のこもつた真剣な協力の姿に私は頭が下がりました。ありがたうございました。

まごころを語れるやうになりたしと我をつかみて後輩は語れり
ああ後輩は我的手とりて離さざりきその面輪には喜びのあふれ

第二十四班—女子学生—

自分の心を素直に言葉にすること

(尚綱学園事務局 坂本順子)

初めての合宿参加で戸惑うことばかりでした。高原に着くまで随分悩みました。現地では見知らぬ人ばかりの中の一員となつて過す訳で、班のメンバーとの交流が大切です。合宿での行動は全て班員と一緒に一人だけ孤立する訳にはいきません。講義の後の班別討論にしても、きのう今日知り合つた友に自分の心を素直に言葉にすることは難しくもあり、又楽しくもありました。

講義内容は私の勉強不足のため、理解に苦しむ事が少なくなかつたのですが、心に残る言葉ばかりでした。特に人は「心」を働かせねばならぬという事を改めて感じました。これから自分の気持ちを素直に人にうちあけられる様、又それを歌にするなどつとめたいと思います。

けんめいに語りかけくる班友の心はひとつであらむと思ふ

一つのことを深めていく楽しさ

(尚絅短期大学 家政 二年 平井知美)

講義内容は難しいことばかりで、正直いってついでいけなかったように感じます。しかし、先生方の講義を聞いて、自分の中にねむっていたものに気づき、新たに入ってきたものに心を動かされ、少しばかり満足している面もあります。

班別討論では、人前で話したりすることを苦手としている私は、まとまりのない、本当に未熟な意見でしたが、班員のみなさんに熱心に聞いていただき、一緒に考えられてうれしく思いました。他の人の意見を聞くなかで、自分自身が言いたかった事をその人が述べてくれると、心の中でつかえていたものがなくなるような気持ちになりました。

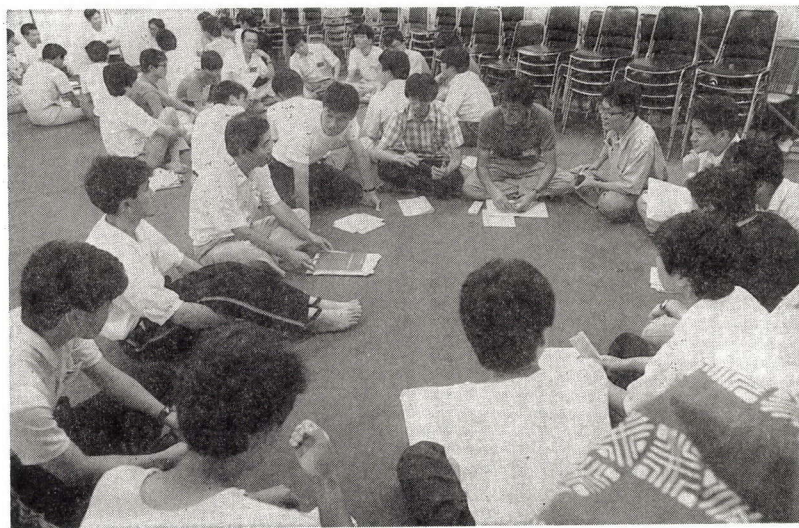
人の意見を聞き、又、自分の素直な考えを述べながら、一つの事柄を深めていく事の楽しさを学びました。

壇上の師の御言葉に気づかずには過せしことのよみがへるなり

天皇陛下の御製を学びたい

(長崎商科短期大学 一年 大福谷明子)

長内先生が、よき友を持った人生の豊かさについて話された時に、先生の「友を思ってお気持」「友情のあつさ」にとて



カメラ・レポート 28

四日目夕方、地区別・大学別懇談会がもたれた。合宿教室での体験を単に思ひ出とするだけでなく、これからも交流し、研鑽を積んで行こうと話し合ふ。

も感動しました。「心から信頼し合える友を持つ」ということについては、ほとんどあきらめている自分にとって、そういう世界が今の自分には無いにしても存在し得るのだ、ということが判りました。

今後は、天皇陛下の御製を学びたいと思います。小柳陽太郎先生が、「陛下の御製の中には、この疑わしい世の中にある『真実』を、自分自身の『真実』を見出すことができる」と言われましたが、陛下の御製には何か本当に「真実」があるということ、信じていることができる様に思います。私は、これから、陛下の御製を学んでいきたいと思っています。

合宿の終りて帰る時となれど心まだ晴れず苦しかりけり

自分の知らずにいた真実を知った

(島根大学 法文 二年 堤 智美)

この合宿に来て私が感じた事は、あるまとまった流れというものでした。一方向に向う流れ、その中でずっと異和感を抱き続けました。今まで、私なりに考え続けてきた事が、先生の講義によって揺らぎ、随分悩みました。心の中の矛盾が爆発せんばかりでした。

まだ、解決はできないけど、一步一步自分を確立させたいです。これまで自分なりに正しいと思ってきた事を捨てる気は全くありません。ただ、この合宿で得た事は、違う形の真実、自分の知らずにいた真実があるという事でした。それ

は、大変なショックでありましたが、ある意味で喜びでもありました。何が正しいかは簡単に答えを出せるものではありません。しかし自分にとっての真実を考え続けたいと思います。

班友の明日をめざして進まんと語る言葉に心うたたる

心と心の響きあう世界がある

(広島大学 法 三年 井上明子)

今回の合宿では小鳥が自由に大空を飛びまわるように心が自由に飛びまわっていました。なんの構えることもなく伸びのびと、ひたすらに先生方の御講義に、班員の方々の発表に心をよせていった時、和歌相互批評で友の歌わんとする光景がありありと目の前に浮んできた時、どんなに離れたようにみえる人の心もつながっていきけるのだ、一信海の世界に入るのだと実感しました。そしてうれしくてうれしくてしかたありませんでした。確かに心と心の響きあう世界はあるのだと思います。全てここからの出発であると思います。天皇様、尊い日本の歴史が歪められている現状の中で心が揺れ動くことはあります。しかし私は自己の内なる真実をなんとしても守って、しきしまの道を歩んでいきたいと思っています。

感想自由発表の壇上に立ちし友を

父母を思ふ心にめざめたる友のことばに涙あふれぬ

今回の経験を身につけていきたい

(東京都中野区立鷺宮小学校 教諭 島村善子)

このような大規模な合宿を運営・実行し続けて来て下さっておられます、国文研関係の方々のご努力に深く厚く御礼申し上げます。

私は、締切日が過ぎておりましたにも拘りませず、突然のしかも、どなたのご紹介もなのままの参加申込みに對しましてご許可下さいましたばかりか、特段のご配慮まで賜りまして、何とも御礼の申しあげようもございませんのが、実情です。有難う存じました。

今回の経験を、如何に自分にしっかりと体得していくか、楽しみにしながら、くじけがちなながらも努めていきたいと念じております。

全体感想自由発表を聞きて

とつとつと言葉を選び語る人のまごころにうたれ涙さそはる

カメラ・レポート 29



四日目の夜。山口県立高森高校教諭、宝辺矢太郎氏によって「短歌全体批評」が行はれた。各班一人ずつの短歌が採り上げられ、言葉遣ひ等、作者の気持ちにそって丁寧な指摘がなされた。

第二十五班—女子学生—

有意義な数日間

(尚綱大学附属図書館 北澤秀子)

今回社会人として学習する機会を得ました。働き始めて四ヶ月余りではありますが、同僚や上司を始め、周りの方々との接触の中で育みつつある私なりの信念や価値感、そして学生時代に培って来た様々な体験がこの四泊五日の合宿生活で一つのものになって行く感じでした。班長の清家さんを始め六人の素晴らしい班員に出会えたことはかけがえない財産となりました。いまはただ名残り惜しく、皆さんへの感謝の気持ちでいっぱいです。私がこの合宿で受けた、やさしさ、思い遣り、暖かい心を今度は私から他の人達につなげていきたいと思えます。本当に楽しく有意義な数日間でした。ありがとうございました。

迷ひ来し合宿なれども今はしも別れを惜しむ友と呼びつゝ

無私の心とは

(西南学院大学 文 四年 清家久美)

今回初めて班長をさせていただいたが、班員達に恵まれ大

変良い雰囲気だった。班長をする中で人の心をわからうとする時、無私の心にならねばならぬということを痛感させられた。御講義で感銘を受けたのは、小堀先生、山田先生、長内先生であった。特に長内先生の御講義で「物を大事にしない人は人も大事にしない。心は使い分けが出来ない、まごころは一つだけなのだから」と仰言った言葉は私の今後の人生に於て大きなものになるだろう。一つの事を思う気持、人を思う気持、国を思う気持はまごころでつながるのだ。この心をまごころにするための修業をすることが、しきしまのみちにつらなる事なのだ実感した。

久々にこの地にまみえしとまどちの笑みて迎へる心うれしき

得たものは多かった

(尚綱短期大学 家政 一年 通山貴子)

来るまではあまり行きたくない思いました。理由は色々ありました。講義の内容が難しそうだった。でも合宿を終えようとした今、来て本当によかった！と心から思いました。

講義内容は難しく、良く理解出来ないが、得たものは多かったです。班の皆さん良い人ばかりで夜遅くまでいろいろ話したりして「あっ」と言う間の五日間でした。

これから末長くおつき合いたいと思えます。合宿のスケジュールはきつい面も沢山ありましたが、最後までこれたことを感謝しています。皆さん自分の考えをしっかりと持っ

ているのを見て、自分の勉強不足が身にしみました。もっともっと勉強してまた参加させていたいただきたいと思いません。

島原のこの学び舎を共にせし友らよ貴重な時をありがたう
いつまでも共にと思ふみ友らと別るるは惜し時間よとまれ

歴史に学ぶ

(九州女子大学 文 二年 仙波三恵子)

五日間の合宿で一番心に残ったことは、山田先生の御講義の最後に「歴史に学ぶということ、昔の人が残してくれた言葉を学ぶことだ」と言われたことがすごく心に残っています。何故かと言うと最初の班別討論の時、国文研の先生が「人は空気と一緒に、言葉という空気を吸って生きています」と言われた言葉が私をはっとさせたからだと思います。合宿に参加して素晴らしい五日間を持ったことを感謝したい気分一杯です。合宿中和歌との出会いの中で、私の友が紹介し、私が一番心のひかれた歌を記しておきます。

夏の野の茂みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ
他にも涙のあふれる思いのした和歌は沢山ありました。

せまり来る時を気づかひあせれども言葉出で来ぬ一時くるし

私の念願

(島根大学 法文 一年 多田詞子)

心が清くなるのは私の念願です。けれどもそれは一人では

カメラ・レポート 30



自分の短歌が採り上げられるのではとひやひやする。歌稿を見ながら、宝辺氏のユーモアを交へた的確な批評を熱心に聞く学生達。

決して出来ないことを知りました。一人では本当に何も出来ないのです。そして今のところ和歌がその架け橋になるのではないかと思いました。和歌を作ったり、相互批評するのは初めてではありませんが、大変つらかったです。なぜなら初めて自分の心を友に知ってもらいたいと本気でお願い、友達の心に来る限りの力でよりそってあげたいと思ったからです。

それは私の真剣勝負ともいえました。そしてそれはつらいことだったので。私は初めてこの合宿で和歌をつくる事の本当の意味を知りました。それは自己陶醉の場ではなかったのです。私は今までその意味が分からなかったのです。大変大きいことを得たと思えました。又読みたい本が増えました。

サローヤンの本なども読みたくなりました。今私は有名な人物になりたいとは思いません。心のきれいな立派な日本人になりたいです。

おこたりに勝れる罪はなしといふ陛下のみ言葉にひきまわるおもひす
友達を目を正面より見つめつゝ語れる我れに早くなりたし

与えられた役割

(京都橘女子大学 文 三年 松岡智子)

合宿の最初は何か違うな一と思つたが、先生方の講義や班別討論をしていく中に改めて発見した事がいくつもあつた。

特に長内先生の御講義の時感動で泣けて仕方ありませんでした。今までの自分、陛下の御製、防人の歌などに心の底から感じていたのではなかった。班別討論では自分の気持がうまく伝えられなくて妥協していた事、本当に真心を持つとは謙虚な心になることだと反省ばかりでした。国を愛したり、守ったりする気持は、父母、家族、友人周りの人々を思いやる気持と同じなのだという事を深く感じた。是松先生の御講義で小学生の短歌を聞いた時、この純粹な心が和歌なのだと思つた。これからは、天から与えられた役割りを生涯をかけて見つけたいと思えました。ありがとうございました。

小学生の和歌をよみて

素直なる言葉つらねし子らの歌よめば心のあたたまるなり

慰霊祭にて

ひたすらに祈りて夜空見上ぐればまたまのうつにぬますがごとし

人の価値とは

(甲南女子大学 文 二年 久保恭子)

「人の価値はその人の真心である」この言葉が、合宿の中で一番心にとまりました。そして班別討論の時、この「真心は信じなければ見つけることができない」というお話は、私の心のわだかまりを少しずつ溶かしてくれました。班の皆と本音をぶつけて話ができ、本当にうれしかったです。この合宿中、いろいろこだわつたこともありましたが、それはそれとして正直に受けとめたいと思います。どうもありがとうございました。

ございました。

窓辺より海を見つとも思ひ出づる共に学びしことのかずかず

第二十六班—女子学生—

天皇陛下下の真心が実感できた

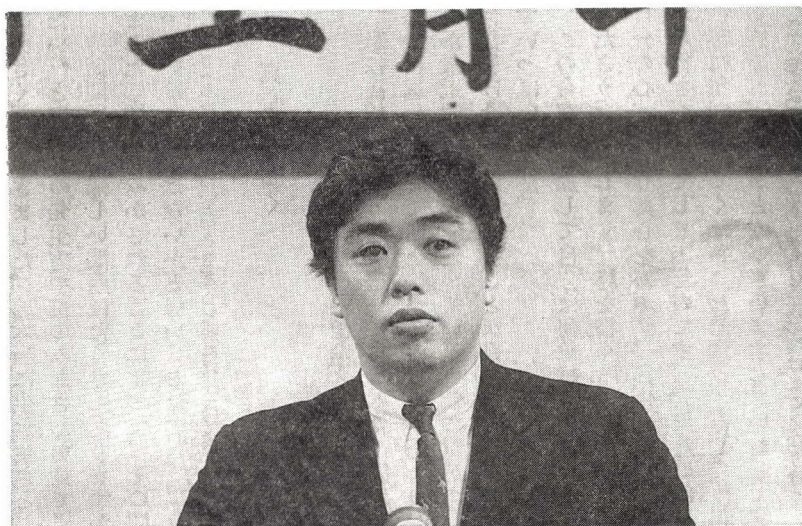
(九州女子大学 文 三年 上川順子)

私がこの合宿で体験できた最も大きな意義は、天皇陛下について理解できたということです。今上陛下の御心が短歌を読むことによっておのずと伝わってきました。特に太平洋戦争の激戦時（昭和16～19年）の御歌を読んだ時は体全身に戦慄を覚え、目に涙があふれてきました。今上陛下の真心を実感できました。

合宿の途中、自分の意見が相手に通じなくてそれが苦しくて荷をまとめて帰ろうかとも思いました。しかしとどまっただけで本当によかったと心から思っています。学ぶ喜びを学ぶ心を働かせて感動することを知り、自分の頭でよく考えることの大切さを知ることができました。この合宿に参加された全ての方々に感謝しています。これからも多くの書物を読み他の人の話に耳を傾けながら生涯勉強するつもりでいます。

夜もすがら友と語りふ喜びに別れの日には涙こぼるる

カメラ・レポート 31



「運営委員長所感発表」。長澤氏は班別和歌相互批評の場を見ての思ひを「歌は心と心に架せられる橋である。言葉を通じて人と人の心が繋がり合ふといふ事を実感した。合宿教室の基本はここにある」と述べられた。

心の鍛え方がわかった

(九州リハビリテーション大学校作業療法 一年 中村知鶴)

自分の考えていることを言葉にできずくやしくてくやしくてたまらなかつた。今までそれを、ただ自分に知識がないから何もわからず、何も言えないんだと思っていた。それもあつた。それよりも「自分の心を鍛える」ということができているからだと気付いた。

自分の心が鍛えられていない、ということはずごく感じていたが、どうすれば鍛えられるのかわからなかつた。しかし和歌を詠もうと思つたとき、自分が必死に心の言葉自分の氣持にあつた言葉をさがしていることに気付き、これが心を鍛えることになつてゐるんだとわかつた。

知りあひてそれほど時は立たねどもまことの友に心開かる

本当に生き生きした学問をしたい

(中村学園大学 家政 三年 下田和子)

今回、はじめて参加させて頂きましたが、とても考えさせられることの多い合宿でした。特に班別討論の時間が長くつてあるということもあり、班のみなさんとじっくり話し合えたことが、この上ないよろこびでした。この様な心の交流を感じた時、合宿導入講義の中で言われた「まごころの力を鍛えることが学問をするということである」という言葉が胸

に大きく響いてきました。「本当に生き生きとした学問がしたい」と国文研の先生方や班のみなさんを見て思います。

防衛問題など難しい問題はたくさんありますが、生き生きとした学問をつみかさねることによって、その問題にぶつかつていけるのではないかと思います。

まごころをもちつつ学びともどちと共にはげみて歩みつづけむ

真心に気づく

(尚綱短期大学 家政 二年 平尾真由美)

私は高校の頃より詩を書いていました。詩といつても自分で勝手に書いたもので詩と呼べるかどうかわかりません。ところが最近詩が書けなくなつてゐる自分に気がついたので。何故書けないのかということが自分でもわからず悔しい思いでいっぱいでした。

この合宿に参加して自分は何故詩が書けなかつたのか分かつたような気がします。詩を書く時、頭だけで考えて本当の自分の心、つまり真心を書かず、自分の心に嘘をついていたから行きづまつてしまつたのです。大切なのは真心です。この事に気づかせてくださった先生方、そして仲間には心から感謝し、ありがとうございますと言いたいです。

言の葉をつまらせながら話しける友の姿はまことなりけり

心を使うことの大切さを知る

(京都橋女子大学 文 三年 橋本加枝)

今、本当に思うことは、国に接する時、歴史に接する時、人に接する時、学問に接する時、一番おこたってはいけないこと、一番大切なものは「心を使うこと」「信ずる心」なんだと痛感しました。常に自分を反省し、自分の中の本当の自分とは何かを問いつづけ、和歌を詠むことで、心をとぎすましていく生活をしていこうと思います。

外国の人から日本はどういう国ですかと聞かれたら戸惑う事なく、堂々と自分を指させる日本人でありたいと思います。

信じ合ふ心^{まじ}を学び我もまた真にこたふる人となりたし

第三十一班—社会人—

感動を得る場があった

(朝比奈コイ 近藤 建 45歳)

合宿の案内を見た瞬間、これは素晴らしいと感じ、勇んで参加させて頂いた。二十代の青年がリードし、行動するという四泊五日の中で「満更日本も捨てたものでもない」という感

カメラ・レポート 32



「夜のつどひ」では、各有志班、大学別、地区別に思ひ思ひの出し物が登場する。合宿教室最後の一夜、心の通ひ始めた友等と楽しむつろぎのひとときである。

想を抱いた。

自分さえよければ、という人が増えて来たのは、青少年をリード（教育）する大人に一人（左翼ジャーナリスト教師連中の目的あるミスリードが残りの五〇%の原因だと思う）。そんな時代に、人の感動を素直に自分のものとして知る場が残っていたという事を感謝致します。

解散を前に同班の皆様

忘れ得ぬ良き友とよ勇ましく明日の日本の為に努めむ

根底を流れる共有の意識

（鎮西大社諏訪神社 下條一仁 23歳）

全体感想自由発表が私をさらに感動させた。

それは、私達がそれぞれに有している素地があるからであらう。日本人という単一民族に流れる意識である。

日本全体から見ればわずかの若者が、真剣に話をし、お互いの気持をぶつけ合い、意見の合わぬ事があっても、秘める気持ちは一貫したものと確信した。

素晴らしき友に

合宿をおはりて友は去りぬれど熱き思ひは決して忘れじ

口を開きたく無い感動

（亜細亜学園 八田浩康 26歳）

長内先生の御講義後、口を開きたく無い感じにとらわれま

した。何かしゃべってしまうと感動がこぼれてしまうような気です。ふるさと、両親、兄弟の尊さなど、思わず涙がこみ上げてまいりました。

仕方がないので参加しよう、といった程度で臨んだ私に、これ程の御講義。感謝せずにはおられません。

班の皆さん、ありがとうございます。話す、聞く事の重要さをつくづく考えさせられた五日間でした。

ひとり来てこの合宿はつらからう否この地にて友と結びぬ師と語り友と語りて思ひけり我が身のせまき情の尊さ

また機会があれば

（鹿児島興業信用組合 末吉一馬 23歳）

班員のみなさんは私より年輩の方々で、不安もあったが、たいへん勉強になった。

私は、会社の方針で参加した。三日間の夏休みと、土日を利用しての参加で、他の女性職員は夏休みがとれていいなあと思ったりしたが、五日間の合宿で、短歌の創作相互批評、講義など、来て非常によかったと思っている。

また機会があれば、今度は女性職員もいっしょに参加したいと思う。

祖父を偲びて

学校の家訪問始まれば浮びくるかもありし日の祖父

どうもありがとう

(九州日植働 武本良輔 31歳)

どんなに、帰ろうかと考えた事かわかりません。しかし良人達ばかりでした。

一日々々が過ぎていき、講義の中で頭に残っているのは、自分の役割というもので、天皇陛下を思い、両親、妻、子供をだいに守っていくのが、自分の役割ではないのだろうかと考えたしだいであります。

班の人達、講師の皆様方、どうもありがとうございます。

砂浜にて

砂浜の白き貝殻まぶしくて幼き頃を思ひだすなり

遠い祖先を偲ぶ

(厚木市教育委員会 吉田文雄 45歳)

事前にテキストが配布され感謝しています。

講義の中で驚きやとまどいを感じましたが、日本の歴史を知る機会となりました。

自分の立場、意見に責任をとる人間になることの大切さを今になって痛切に感じました。

また万葉のすばらしさとその作者の心がしのばれて来ます。その短歌を創作し批評していただき自分でもびっくりす

カメラ・レポート 33



女子参加者一同により明治天皇御製が二首合唱された。女性の美しい声に、会場は華やいた空気に包まれた。

るほど素直な短歌が出来上りました。

期間があつという間にすぎた気がしますのも本音を出し合える雰囲気だったからでしょう。遠い祖先たちもこのように信じあい助けあつて来たのではなからうかとしのばれます。

小柳陽太郎先生の御講義にて

涙して歌教へ給ふ先生の尊き姿沁み入りにけり

第三十二班—社会人—

奮い立たされ感謝の毎日であつた

(鹿児島県立野田女子高等学校 教諭 宮下春幸 36歳)

今回は四回目の参加だったが、ここ二、三年真に心の充実感を得る機会が少なく、まさに渴望の思いであつた。合宿生活の一コマ一コマの体験は、慈雨を得た植物の如く、喜び、精神は高揚し、明日への展望に胸うちふるえ、夜もなかなか寝つかれないほどであつた。社会人になって三回の参加が共に、松吉先生の班に入れていただけるという奇しきご縁も有難く、先生の変らぬ熱情と、私たちへの思いやりに奮い立たされ、感謝するという毎日であつた。

鹿児島へ帰つて是非ともやりたいことは、昨秋まで五回も続けながら事情で頓挫している「鹿児島教育懇話会」を今一度盛り上げること、もう一つは鹿児島在住の合宿参加経験者

に呼びかけ、輪読会をスタートさせたいこと、である。

それにしても普段お互いが胸襟を開いて本音で語り合う場の何と少ないことか。それを思えば本当に仕合せな日々でありました。有難うございました。

己が身をひたに正せる言の葉のあまた有るをば知るはうれしき

国家、国防という意識を

(出光興産 松岡玉樹 33歳)

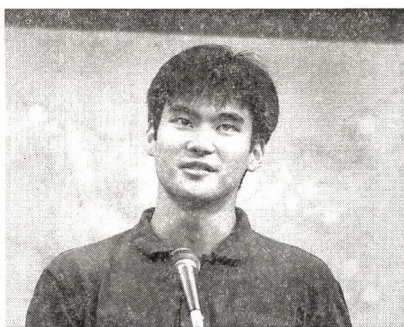
昨年に続きこの合宿に参加させて戴き、大変ありがとうございます。参加する度に、小田村先生はじめ諸先生方、関係者の皆様のご苦勞、ご熱意に、教育にたずさわる者(小生は社員教育)として改めて頭の下がる思いがいたします。

特に今回、児島、小堀両先生の貴重なお話の中に、有史以来、我々の祖先が築き上げて来た日本の伝統が、わずか七年間の占領下に根本からくずされ、その影響を現在までひきずっているという事実に、改めて怒りの念を覚えます。

戦後、これ程までの経済復興を我々の先輩が成し遂げられたおかげで、豊かな生活を享受している我々の心の中に、ともすれば国家、国防という意識が薄く、その問題から眼をそむけるという風潮はゆゆしき事態だと思ひます。

今後「知らされていない歴史」を自分なりに研究、体得し自分なりの価値感、使命感を養っていきたくと考へます。

島原に友と語りひしまごころとすがすがしき思ひ永遠にもちつづけむ



「全体感想自由発表」。次々と挙手をして登壇した友等は、合宿で得た体験を生き生きと率直に語ってゆく。

真摯なご講義に共感した

(宮崎神宮 須田明典 30歳)

この合宿教室への参加は、私にとり初めての経験であった。同僚から聞いていたので、自分なりのイメージを持って参加したのであるが、実際には随分と異なっていた。それは、私は今まで、このように真摯な態度でご講義に臨まれた先生方や、受講する学生達がいるとは思ってもしなかった、ということである。講義室に集った二百名を超える若人が、(私も含めて)先生方の語られる心からなる言葉の一つ一つに、純真に共感し、共鳴した。素直にその気持を吐露できる。

社会人になり、人として生活して行く上には、どうしても自分の意志を曲げ、心をいつわるような場合も少なくないと思ふ。しかし、御国の弥栄を願ひ、国民の一人として正しく生きて行かねばならぬと心を新たにした。

御祖らが誠の道を踏み伝へ我が日の本は保たれにけり

陛下のお気持を知ることができた

(厚木市教育委員会 重田良允 28歳)

職員研修として初めて参加させて頂き、感じたことの第一は「自分は何も知らなかった」ということでした。短歌、皇室、防衛等々の問題に触れさせて頂き、改めて歴史を学ぶこ

とや、国家を思うことの大切さを知りました。

特に印象に残ったご講義は、山田輝彦先生の「役割」についてでした。天が与えて下さった人生の役割を自分で考え、実践して行かねばなりません。もう一つ忘れられない事は、数多くの御製に触れたことでした。今上天皇の御製を拝聴し、お心の優しさと、国民を思われるお気持を知った時、本当に陛下を理解することができたように思えました。

小田村先生を初め、班の松吉先生、国文研の先生方、班員の方々、参加者の全員にお礼を申し上げたいと思います。生まるるを待ちに待ちを我が子にも伝へゆきたし日の本の心

真剣な姿勢に圧倒された

(鹿児島県信用組合 今田俊和 25歳)

気楽な気持ちで合宿教室に参加した私にとって、先生方、また全国より集って来られた方々の、その真剣な姿勢にはただ驚くばかり、圧倒されるばかりであった。自分の今日までの生き方がいかに頼りないものであったかを知り、恥ずかしい事しきりである。今回ここで学び得た事は自分自身が生きていく上に於て、大いに役立つものと確信している。また役立てるべく努力しようとお切実に考えている。この合宿に於て先生方のすばらしいご講義を拝聴でき、すばらしい先生方、友人に巡り逢えた事に感謝している。

本当の自分の生き方を今一度真剣に考えてみる必要がある

と思う。そう思う事が出来るようになった自分を嬉しく思いこの合宿教室に参加できた事を有り難く思っている。

声高くおのれの心をひらけよとのたまひし師の瞳輝く

真実を知ることの喜び

(日本植生働 牧本浩昭 25歳)

会社からの研修という形で参加させて頂きました。私の勤務しております日本植生働では、合宿教室の講義内容に近いものを人財育成の一環として組み入れており、私自身、よく理解しているつもりでした。ところが、その理解も単に、「頭で理解している」だけであつたということを、今回の合宿教室で痛切に思い知らされました。また同時に、真実を知ることの喜びを初めて知つたように思います。

自己満足に陥ってしまいがちな自分を、反省を込めて見つめ直す良い機会をいただいたと感謝しております。

合宿全体についてひと言だけ申しますと、朝のつどいで国旗掲揚があるので、夕方には国旗降納を、また講義室の壇上背後にも国旗があつてしかるべきだと思ひました。

まがごとくに耐へたる心山のごとく動かざるをば我も学ばむ

カメラ・レポート 35



閉会式で学生を代表して、西南学院大学経済学部三年、西山博章君が「この合宿で得た良き師、良き友、良き師の言葉を大事にして下さい。来年もまた会いませう」と述べて挨拶とした。

第三十三班—社会人—

人の心を見つめ直したい

(九州日植輪 坂元三男 21歳)

御講義を聞いて「心」を働かせることの大切さと、それを表現することの難しさを痛感しました。短歌創作では自分の気持が、どの様な言葉を使えば一番よく相手に伝えられるのか、大変苦しかったです。私の歌を真剣に批評して下さいました。職員の方々に感謝しています。

感銘させられる御講義が多く、自分の知識の無さ、勉強不足に恥ずかしくなる事ばかりでした。自分は何でも客観的にしか見ていないのではないか、時代を生きた人物の気持を理解していないのではないかと思われ、大切な「人の心」を忘れて自分の主体性のなさに恥ずかしさを覚えました。

この合宿を機に、「人の心」について、もう一度、真剣に見つめ直して見ようと思います。

有明の海の彼方を眺めつつも想ひ出づるは両親の笑顔かほ

心を高めていきたい

(徳山大学学生主事室 古川幸隆 23歳)

私はこの合宿に参加して書物を読むことの大切さと必要性を痛感しました。高校・大学とラグビーに明暮れていた私にとって、天皇とは、短歌とは、そして心とは、といったことは考えてみたこともありませんでした。心はスポーツや先輩後輩との生活などを通して鍛え磨かれていくものだという信念だけでした。しかしこの合宿で私を感じたことは「心は物(心以外のすべて)に触れてその姿、形を表す」という言葉の意味の深さです。ラグビーを通してしか自分自身(心)を表わせない自分がとても恥ずかしく思えて仕方ありません。これからは書物を通して心を高め、人間を高めていきたいと思えます。そしてその中から確固たる自分を見つけ出すことが天が私に与えた役割ではないかという気がします。

飛びおり自殺した少年の顔を見て
死にいそぐ君の心の苦しみを我少しでも聞いてやるれば

心を見つめながら行動したい

(出光興産輪 津田忠雄 28歳)

今回の合宿には「天皇」「日本人」に就いて、又「明治、大正、昭和史」に就いて理解を深める為に参加させて頂きました。これらの目的は今後、更に勉強を必要としますが、道が開けた状態まで達成出来て満足しております。今後は出来るだけ多く本を読み、教えて頂いた和歌を通して理解を深めたいと思えます。

しかし、目的の達成以上に、今回の合宿では、私の心（魂
自分の意見）に関する事に対し、色々のご教示を頂き、良か
ったと思っています。合宿後の生活においては、常に心を見
つめながら行動してゆきたいと思います。

感想発表会にて

学生がたどたくも思ひのべし素直なよろこび我をもつつみぬ

日本に生かされてゐる喜びを感じず

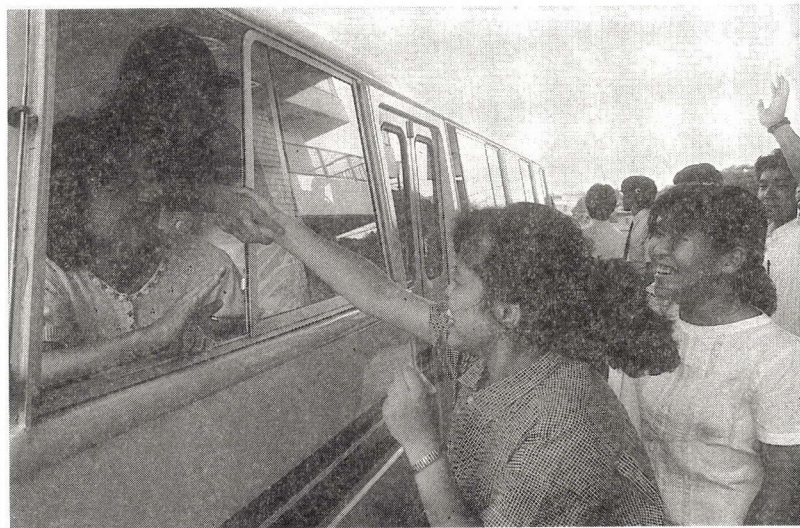
（日本青年協議会 藤井 勝 30歳）

全体感想自由発表にて勇気をもつて壇上に立たれた学生さ
んの姿に心打たれました。自らの思ひを真心込めて聞いてく
れたであらう班友の言の葉に心動かし、涙して思ひを語る姿
に尊さを感じました。人は人の真心に触れることを渴望して
やまないんだといふことを改めて感じました。まことの言葉
に触れて心動かし、おもはず発した言の葉は正にまことの言
葉であり、その言の葉はまた人の心を動かす。かうして真の
友情は生まれてくるものだと思います。自らの思ひを正しく
表現する修練を、しきしまの道を通して勉強していきたいと
思ひます。古来からの、この日本文化・国柄を真に体现して
をられる天皇陛下を、中心としていただいてゐる日本に、生
かされてゐる事の喜びを思はずにはをられません。

全体感想自由発表にて涙して語る友を思ひて

勇気もて壇の上には立ちたれど思ひあふれて言の葉のなし
しかれども心とこのへとつとつと友は語りぬ声ふるはして

カメラ・レポート 36



別れの時は来た。「これからも便りを交はして共に学んで行かう」と、四泊五
日苦楽を共にし、寝食を共にした友と握手する手にも力がこもる。

班友の吾をきづかふ真心に心打たれしと友は語りぬ
最後まで吾が胸内をば語りゆく友の姿のたふとかりける

人生の眞実なるものを追求したい

(福岡県立水産高等学校 藤川正司 39歳)

開会式において小田村寅二郎先生の言われた「心をはたらかせ心を鍛える」というお言葉の意味が多くの先生の御講義を受講するなかで次第にわかってきました。また先生方の熱き想いは理解できるけれども、自分の心が未だそれまでに至らぬを恥じる想いもしました。

合宿生活では、それぞれに職業の違う方と共に学び、語り合い、緊張の中にも楽しく過ごさせていただきました。

考えがまとまらず想うところを書き尽せませんが、学んだことを基に、自分自身を見つめることによって「人生の眞実」なるものを追求し、これからの人生及び生徒の育成に取組みたく思っています。

美しき日の本つくるいしずゑはいにしへよりのまごころならむ

大きな収獲があった

(榎きしや 川嶋勝春 42歳)

初めて参加致しまして、大きな収獲がありました。

先生のご講義で勉強、厳肅な慰霊祭、短歌創作、班別輪読
全体感想自由発表等。

33班の仲間の皆様ありがとうございます。御座居ました。

私の目標に向って更に大きく前進したいと思えます。

一生忘れられない

明治天皇の御製

言の葉にあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

心して学びし集ひいつまでも我のあしたに光り輝く

合宿中に創作された「和歌詠草」

——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今年もまた、千数百首に上る短歌が創作されてをります。

短歌は、古来、私達の祖先が「しきしまの道」と呼び、言葉の修煉、延ては心の練磨の道として、永く守り伝へて来た伝統ある詩歌ですが、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、殊に若い世代には、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつて了つてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌の創作は全くの疑問であり、一種の負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿の日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されてくる様に思はれます。それに至る参加者の合宿課題の数々に取組む努力は並々ならぬものがあるのですが、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題を等閑に付してきた現代教育の束縛を自ら感じし、そこから一歩でも二歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作、そして、その後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる様な人間性を取り戻さうとする試みが細やかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとつて、まさしく忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿三日目の午後、是松秀文氏により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導され、その後の散策を経て夕刻までには提出するという慌しい日程の中で生み出された短歌です。しかし作者の集中された内心の働きが端々に表現されてをり、作歌上の巧拙を超へて、強く惹かれるものが籠つております。提出された短歌は、その日のうちに国民文化研究会会員によつて選歌が行なはれ翌日、謄写板刷りの数百首の歌集となつて配布されました。そして、その歌稿をもとに山口県立高森高校教諭・宝辺矢太郎氏によつて、和歌全体批評がなされ一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ば

れ、直されてゆく姿には相互批評のあり方を教へいただきました。その後の班別短歌相互批評では、班員の心を偲び、言葉を正しく客観してゆく作業が行はれました。そして、互ひに友達の心に触れ合ふことによって、合宿生活において寢食を共にし、胸中を披歴し合つて来た友情の結び付きが、ここにおいて一段と深まって行くことが確認されました。かうした短歌創作を通して展開された、日常生活にはまことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬほのぼのとした喜びをもたらすのみか、学問と友情との分かちがたいつながりをも想起せしめるに至りました。

ここに載せた短歌はかうした営みの中で作られたものであり、合宿教室での生々とした肉声が聞こへてをります。また心と心との架け橋としての歌がまさしく参加者を実現されてゐることを御一読下されば自ずと心に残るかと思ひます。

(付記) ここに収録するにあたっては、文法上の誤りなどについて添作を加へ、仮名遣ひを正しました。

和歌詠草(しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品(参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録)

第一班

中央大文四 久保田 真
去年の班員と再会して

思ふこと言葉に出来ず苦しし君の来たるは
ひたにうれしも

拓殖大外四 布施 康明

山の果て海ひろがりて島も見ゆ雄大なりしも
この雲仙は

雲仙仁田峠登山にて

先輩の大きな声にはげまされ登りぬく元氣の
わきてくるかも

早稲田大教一 山下 拓男

班別討論にて

我が言葉拙くありて思ふこと伝へ得ざるはは
がゆかりけり

亜細亜大法三 真田 博之

班別輪読中にて

とつとつと思ひを語る班友の面輪見ゆれば胸
高鳴りぬ

有明の海白銀に輝きて美しながめに言葉失ふ

国士館大文二 青木 繁和

第二班

先生の心解らず問ひたくてはづかしかれど我
は手を挙ぐ
九州大法一 大瀬 博幸

妙見岳の鳥居くぐりて参道を登らむとせば空
の迫り来
妙見岳神社参拜

参道の繁み内より美しき蝶の舞ひ来て導びく
が如

鹿児島大医三 仲田 公彦

有明のうみ見はるかす雲仙を君とともにぞ訪
はましものを

拓殖大外一 森本 昌利

島原で共に学びし新たな友と語らふなんと
楽しき

熊本大教三 寺岡 伸純

汗だくで展望台にたどりつき涼しき風の気持
ちよきかな

中央大経二 福田 剣充

妙見の岳から見ゆる湖は鏡のごとく美しきか
な

第三班

北国の郷里離れし我は今南国の山雲仙に立つ
ファインダーをのぞきて撮りし友どちのその
面輪のさはやかなりけり
早稲田大文一 山本 俊之
亜細亜大法四 中澤 栄二

北海道工大工四 佐瀬 竜哉

妙見岳展望台に登りし折に

たたずみて有明の海をながめをる吾らにふき
くるすず風よろしも

福岡大工三 清家 和弥

はじめでのロープウェイに友皆と乗り込みし
時は心はずみぬ

中央大法二 長谷川 浩延

妙見岳の展望台にて

頂ゆひろごるけしきをながむればくぐもる思
ひの小さきを知りぬ

早稲田大政経三 鵜野 光博

妙見岳に登りて

疲れ深き顔にてあるも吾に向ひ笑ひかけくる
友の嬉しも

熊本大教一 北島 直浩

いただきゆ見さくるながめを思ひつつ道のほりゆく苦しかれども

東京大文一 前田 幸男
師のこばを胸にとどめて今一度ひろき心に学びゆかなむ

拓殖大政経二 角田 学
登りゆき振りさけ見れば有明の海青くして心打たるる

第四班

福岡大経三 吉村 恭二
革靴で山を降りると足もとのズルズル滑りて心焦りぬ

中央大文三 佐藤 学
妙見岳の頂に登りし折に
海原にあまたつらなる島々を眺めてをれば心なごみぬ

早稲田大理工四 安藤 慶太
一番の飛行機に乗らむと夜をあかし思ひ勇みて寮を後にす

熊本大教三 坂本 太郎
妙見岳に登りて天草の島々を眺む
見渡せば有明海にかびたるあまた島々連なり並ぶも

幾度も訪れたりし島なれど新たに見ゆればえ

も言へぬかな

城西大経一 千葉 文明
かねてより思ひをはせし九州に我は来にけり心をどるも

防衛大文一 和田 直人
七曲がるけはしき山路次々とけしき移りておもしろきかな

第五班

中央大経三 渡部 豊人
是松さんの講義を聴きて
清らなるまことのこころもちたれば歌もなりぬと師ののたまひき

鹿児島大教四 松谷 浩陽
吉村君に再会して
親はしく微笑みかける汝が顔に懐しき思ひのしみじみ湧きくる

早稲田大政経三 向田 智明
観光用の馬に乗る親子を見て
大きな馬に揺られて喜びし小さき子らの姿可愛き

亜細亜大経一 吉田 英嗣
学び合ふ友を求めてはるばると島原の地に来しかいありき

日本大文理一 本石 敏明

人知れずくさむらのかげにひそと咲くむらさきの花に歩みとどめぬ

徳山大経二 松井 豊
有明の海のごとくにわが心広く静かにあらまほしけれ

熊本大法二 平田 裕英
子供らと馬にのりける父親の子らを見つむるまなざしやさしき

第六班

関西大工二 逢坂 良平
すべるなとふ声かけあひて下りゆく坂道けはししばしたたずむ

熊本大法三 山下 哲也
雲仙の頂に登りて見おるせばバスの小さきに目のくらむ思ひす

亜細亜大経営一 佐藤 順一郎
よい歌を作りたいとは思へども未熟な心それを許さず

山口大経一 越野 満至
山頂にて
遠つおやのねむりますといふ平戸の方をわれはながむる

ながむれど平戸の景色見えすして山を下りぬ心残して

中央大文三 三 林 浩行

我大兄の涙流され語らんとされる御姿心に残り

拓殖大外四 永井 弘

つづら折りの道登り行けば木々の間に有明の海見え隠れせり

第七班

千葉大工三 石川 名津朗

見下ろせば島々あまた浮かぶ見ゆ青くひろがる有明の海は

雲仙の空を見て

見上ぐれば光をあびてかがやける真白き雲をあかずながむる

いきいきと語りて眼かがやかせ真剣な思ひ伝はりてくる

長崎大教一 北島 和明
広々と広がる海を眺むれば足の痛さも忘るる思ひす

妙見岳の頂上にて

九州大法一 江藤 禎
ふるさとの方を眺めば思はゆる家人いかにお

はしますかと

東北学院大文三 玉川 幸毅

石多き山道友らと息きらし足ふみしめて登りゆくなり

登山行

成蹊大法三 澁谷 宏海

頂にしぼし休めば爽やかに鳥や蟬の音聞え来るなり

第八班

九州大法一 花田 芳夫

真剣に思ひを語る班友は部屋に入りたる虫にも気づかず

班友の真摯な問ひに我もまた己が思ひを語りゆきけり

班別討論にて
小柳先輩の導入講義をお聞きして
乙細亜大経営三 木村 謙二

人の価値は外見によりてはからずまごころをもてはかるべしと言ふ

思ふこと思ふがままに友とちにぶつけてまごころ鍛へゆきたし

早稲田大教二 小出 和夫

思ふこと飾ることなく言へし時心の壁の破るる思ひす

東京大文工二 松岡 恒男

妙見岳に登りて

涯ふちに重き足止め見下ろせば吸ひこまれたき緑の山裾

長崎原爆慰霊碑前にて

千葉大工一 中富 仁

人もなき碑のめぐりに鳴きしきるせみはあの日も鳴きてをりしか

惨劇も夢の如くに思はるる今の平和のありがたきかな

九州産業大芸術三 三宅 心樹

登りつつふと振り向けば遠き海と山の緑に心うばはる

花火の音に笹の女を慕ふ

徳山大経四 清水 克敏

きこえくる花火の音にふと思ふ残せし君のさびしき笑顔

第九班

西南学院大経三 西山 博章

バス酔ひで気分が悪くなりてベンチにし
ばし横になりたる折

バス酔ひの悪しき気分のをさまらず山登れぬは口をしきかな

目を閉ちて横たはりをればゆつたりとひづめ

の音のしだいに近づく

馬の背に乗りたる子らの歓声の聞えて来たり
いとたのしげに

仁田峠にて

防衛大理工三 佐藤 信 知

眼下には有明の海も鳥々の火の国さへも広が
りて見ゆ

講義を聞きて

民思ふ陛下のまごころお聞きして心の腫開か
る心地す

中央大法一 笹沼 毅 彦

雄大なる景色を見れどもわが心青空見えずあ
つき雲あり

鹿児島大農二 原 一文

登山に向ふ我々に御手を振られる先生方
を見て

ふと見ればホテルの前にて手を振らるその御
姿の心に残る

拓殖大外四 村 上 純 一

雲仙仁田峠にて

小道よりとほくに見ゆる海山はうすもやの中
に広がりをり

日本大文理三 井 水 武

夜教室にて

思ふこと伝へんとして夜更けまで時を忘れて
語るは楽し

胸内のあつき思ひを伝へんと皆に向ひて語る
友かな

小柳陽太郎先生の御講義を聞きて

なみだぐみ陛下のことを語らるる師の御姿に
心打たれる

九州共立大経一 吉村 匡史

合宿で初めてまみえし友どちと語りひゆく程
きつな深まる

第十班

拓殖大政経三 竹田 員 啓

たそがれの有明海をながむれば我がをさなき
日思ひ出さるる

岐阜大教二 渡 邊 光

山登りにて

友どちと競ひて登る山道は息きらしつとも楽
しかりけり

九州大工三 黒木 雅 裕

湯あがり宿のペランダにたたずみて外眺め
つつしばし憩ひぬ

東洋大社会四 吉川 敦 夫

友どちと声かけあひて山頂をめぐりて登る時
ぞ楽しき

国学院大文三 亀井 正 弘

山道を登りきりたる友達のこぼれる笑顔はさ

はやかに見ゆ

慶応大文三 垣 迫 太 市

絶唱を静かに感じたと云ふ師の御言葉の胸
に残れり

第十一班

第十一班

拓殖大外三 前 田 修

仁田峠から妙見岳へ

とほき海足をとどめて眺むればちひさき島々
連なりて見ゆ

頂に近付き行けば行くほどに雲たち込めゆき
陽を隠したる

九州大法二 三 沢 茂 美

バスにのりて山に登る途中にて

窓の戸の杉の木の間ゆしづかなる島原の海あ
らはれにけり

防衛大国際三 松坂 普 一

長内先生の御講義の後班室内で

父母のことを思ひてむせびなく友の姿に心う
たれる

亜細亜大経営二 岡 山 英 一

講義中もよほす眠気をはらはむと己が腿へべ
ン突き当てる

佐賀大経四 重久 俊 則

喜びを友に分つを樂とする鷗外のごと我も生き
きたし

同志社大工一 村 木 隆 広
仁田峠にて

青空に水平線がとけこみて海と空とがまじる
ごと見ゆ

中央大経一 長 山 晃
島原の夏盛りにてしきり鳴くセミの声聞こゆ
講義の部屋に

第十二班

頂上にて
西南学院大法四 國 崎 真 一

苦勞して登りてきたりし頂上に吹きくる風は
涼しかりけり

亜細亜大経三 飯 島 順 一
小柳先生の御講義を拜聴して

師の君の力こもれる言の葉に己が心も高まり
てゆく

中央大法三 青 木 英 樹
汗かきて険しき道を登り来れば頂の風涼し
かりけり

早稲田大社三 村 主 真 人
妙見岳登山の折に

名も知らぬ友にはあれど頑張れと声掛けくる

るはありがたきかな

徳山大経二 山 本 啓 介
足元に広がる景色のなつかしもしばし離れし
故郷にて

北海道工業大工一 橋 本 和 幸
重き足をひきずりつつも眺望を早くみたと
登りゆきけり

合宿前 長崎原爆資料館を見し後に
防衛大人文一 石 卷 義 康

心ふたがれ小道をゆけば突然にせみの声聞こ
ゆ哭くが如くに

なきしきるせみの音聞けば資料館の写真の様
の思ひ出さるる

おとしげく鳴くせみの音を聞きゆけば失せに
し人の声聞く思ひす

第十三班

中央大法三 土 井 郁 磨
小柳陽太郎先生の御講義を聴きて

言の葉をつまらせ語るお姿を見つつ目頭熱く
なりぬる

西南学院大法一 田 鍋 彰 司
ありあけの四方の山河の美しき我が疲れ身も
安らぐ涼風

千葉大園芸三 小 林 靖 則

いにしへゆ島原の民を守ると雲仙の峰はそ
びえてありしか

撰南大国際一 尾 田 眞
旅にして遠き電話に母君の御声やさしく心に
しみぬ

拓殖大外四 本 田 雅 夫
朝に不採用の通知を受けし後
登りきて有明海をながむればくやしと思ふ心
のはるる

早稲田大法三 新 屋 信 隆
講義を聞きし折に
ひたすらに心傾け聞きし師の御言葉つよく胸
にひびけり

第二十一班

長崎大教一 早 田 保 美
ゆれ動く心そのままの葉にあらはすことの
むづかしかりけり

日本青年協議会 田 中 和 子
小柳先生の御講義を聴きて
おほみうた声高らかに師の君は誦み上げ給ふ
しらべゆたかに

おほどかなしらべなりとて笑みたたへ語らる
る師を見つうれしき

北里大薬学三 藤 川 尚 子

山路ゆきふと見上ぐれば草むらにひそかに立ちて御製碑ありき

鹿兒島大教二 江口 芳子
みやまきりしまおい茂る中にひっそりと御製碑は立てり夏の野岳に

中村学園大家政二 山田 和子
大君の一首一首に込められし御心偲べば胸せまりくる

仏教大文三 竹野 佳代子
先生の講義を聴きて吾もまた真の日本人になりたしと思ふ

熊本大大学院二 山方 富美子
友達と声はずませて語りつつ野岳に登る足どりかろし

第二十二班

杉野女子大短期一 木村 明子
雲仙に登りて海を見おろせば陽をあびて輝きにけり

神日本電気 藤城 朋子
妙見の山に登りてながめたる有明の海を忘れじと思ふ

尚綱短期大学附属幼稚園 益田 文
頂で景色をながむる母親の傍らで幼き子らはしやげり

頂で親子の姿をながめつつふるさとの母の思ひ出さるも

中村学園大家政三 南里 枝
真心を打ちあけ語る合宿の友との出会ひの素晴らしきかな

西南学院大文三 戸田 淑子
国生みの神代のみ代ゆ変らざるこのながめか島々の緑

第二十三班

岐阜大教二 古市 桂子
にこりたる心のさまに悩みたる昔を今に思ひ浮かべり

尚綱短期大家政二 村上 祐子
すぎさりし己が姿をかえりみて御言葉を胸に生きんと思ふ

島根大理二 笠原 美智恵
小柳陽太郎先生の御講義を拝聴して涙して終戦の様語り給ふ師の御姿に心打たれり

鹿兒島大農二 山内 聡子
ホームまで見送り来むと言ひ張りし母の心の身にしみわたる

北九州大文四 倉光 朋子
仁田峠にて後輩らと野鳥の声を聞く

かなたより聞こえし野鳥のさへずりに声をひそめて耳傾けぬ

仁田峠より天草をのぞむ
波立たず雲も流れぬ天草に時の止まれる心地するなり

尚綱大学事務職員 坂井 澄子
わからぬと涙ぐむ友に過ぎ去りしかの日のわれの蘇りくる

第二十四班

広島大法三 井上 明子
三年前異なる道をゆきし友と共に学ぶはなんとうれしき

長崎商科短期大一 大福谷 明子
異なる道を歩めど心と心つながりてありしありがたきかな

島根大法文二 堤 智美
和歌をよむことのなければ合宿はかくまで若しくあるあるまじきものを

尚綱短期大家政二 平井 知美
朝夕に眺めし山に登りきて四方を望めば心開くる

天草の島を望めば過ぎし日にともに遊びし友らなつかし

尚綱学園事務局 坂本 順子
目下にひろがる海を眺めつつ父母おやいます故郷を思ふ

東京都中野区立鷺宮小学校 島村 善子
次々に汗を流しつ登りくる若人の顔は喜びに満つ

第二十五班

尚綱大学附属図書館 北澤 秀子
母思ふ少女の歌に過ぎし日の我が身の思はれ涙こみ上ぐ

甲南女子大文二 久保 恭子
友達と語りゆきつつ古の人の心のまことを思ふ

西南学院大文四 清水 久美
をちこちにこしをおろしてみ友らは仁田の山にてうたを詠むなり

九州女子大国文二 仙波 三恵子
胃のいたみに友のひざかりいこひつつ空仰ぎをればややをさまりぬ

京都橘女子大文三 松岡 智子
病床の祖父を思ひて
有明の広くやさしき海みれば祖父を愛ふる心なごみぬ

尚綱短期大家政一 通山 貴子

仁田峠うぐひすの声聞きながら海山見ればすがすがしきかな

島根大法文一 多田 詞子
美しき緑の中にたたまてうたよむ人の静かに見えり

第二十六班

中村学園大家政三 下田 和子

下山の時に詠みし歌
晴れわたるあをぞらのもとみなともに笑ひあひつつ下りゆくかな

九州女子大文三 川上 順子
見渡せば青き山々連なりて父のごとくに雄々しく見ゆる

尚綱短期大家政二 平尾 真由美
たうぎびの真つすぐに立つ姿みて我の心もかくあれと思ふ

京都橘女子大文三 橋本 加枝
班別討論にて
そのままの心を語る友どちの笑顔を見れば心あらはる

九州リハビリ大作業療法一 中村 智鶴
山道で景色を見むと思へどもあしもと危ふく石ばかり見る

第三十一班

厚木市教育委員会 吉田 文雄
谷風に吹かれて飛びゆくアサギマダラ見つぞ祈るその幸ひを

鹿児島興業信用組合 末吉 一馬
亡き祖父の形見の時計手にすればありし日の姿浮びくるかも

鎮西大社諏訪神社 下條 一仁
夏さかり水の都に集ひきて時を忘れて友と語らふ

九州日植 榑 武本 良輔
妙見の岳やまより望む島々のすばらしきかな有明の海

学校法人亜細亜学園 八田 浩康
ホテルの窓から外を見て
せみしぐれにさはれ外をながむれば影もしるけき島の数々

榑ピコイ 近藤 建
もののふと呼びたき人の集ふとき我が胸燃えぬ負けてならじと

第三十二班

厚木市教育委員会 重田 良 尤
久々に山の息吹を味はひて心の底ゆゑ氣力湧き
くる

宮崎神宮 須田 明 典
妙見に登りてみればみやしるに英語のみくじ
ありて驚く

みくじには吉とありしがその裏にグッドラッ
クと記されてあり

出光興産饅店主室 松岡 玉 樹
妙見岳樹々の緑は深くして故郷の山を想ひ出
せり

鹿児島興業信用組合 今田 俊 和
亡き友よ黄泉の国より帰りこよ今ひとたびの
語らひせんに

日本植生饅 牧本 浩 昭
妙見に登ればまず風はほよぎりしばし忘るる
日々のなりはひ

鹿児島県立野田女子高等学校 宮下 春 幸
学び子は短歌作りのその中で己を見つめる機
会を得るとふ

第三十三班

九州日植饅 坂元 三 男
雲仙の山に登りてなつかしく思ひ出さるる故
郷の町

徳山大学生主事室 古川 幸 隆
有明の夕日に輝く島々に永遠の平和を我願ふ
なり

特きしや 川嶋 勝 春
夜明前空に輝く三日月に寄り添ふ星の美しき
かな

一望に見渡す島をおだやかに巡る潮見て心や
すまる

福岡県立水産高等学校 藤川 正 司
父母とともに登りし子らを見てわれ帰りまづ
いとし子想ふ

日本青年協議会 藤井 勝
終戦前夜の御誕を祝みゆかれる小柳先生
をお偲びして

天皇の大御心を偲ばれつ涙流さる思ひあふれ
て

湧きいづる涙とどめてよまれつも涙あふれて
声のふるはる
師の君は御声ふるはせ語らるる御心思へば涙
ながるる

出光興産饅店主室 津田 忠 雄
五年ぶり訪ねてみれば仁田峠昔と変はらぬ緑
がうれし

事務局

福岡県立筑紫丘高校二 永島 建
目を閉じてせみの音聞けば思はるる昔取りた
る幼なき日々を

福岡県立筑紫丘高校二 野口 耕 司
走り出すその一瞬に風となり一氣にぬけよ光
めざして

福岡県立筑紫丘高校二 石井 賢 太郎
妙見の上にて眺め染しみてしばしの間時を忘
れる

福岡県立筑紫丘高校二 水内 健 太郎
草にはふ緑の風によみがへる幼き頃の昆虫採
集

神奈川県鶴見女子高校二 佐久間 有 紀
身にしみる我の心の未熟さに心入れかへ雲仙
に立つ

福岡県立城南高校二 古川 文 子
君が代を大きな声で合唱し初めて感じる不思
議な気持ち

澄みきつた有明の海を見わたして我の心もか
くありたしと思ふ

福岡県立筑紫丘高校一 瀬戸 学
島原にすつしりかまへる大き山島原市民今日
も見上げる

福岡県立筑紫丘高校一 音 川 祐 一
ああきつい手伝ひ仕事ああきつい早く帰つて
すぐ寝たいなあ

国文研職員 田 籠 栄 一

有明の海をへだてていまはなきふるさととおも
ひ悲しかりけり

見学参加者

第一経済大助教授 小 野 繁

質問に立つ防大生のうしろ姿を見て

凜と立ち教へを受くるつはものよ君が握りし
こぶしかたかり

国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村寅二郎

是松秀文君の「短歌創作導入講義」を拜聴して

子供らにうた詠む道を教へけるそのあととど
り語る君はも

語りゆく君がまなこは澄み透りかがやくが如
わが眼に映れり

子供らは君を慕ひつ敬ひつかつはよろこびか
つはつとめき

子供らは「うそ」と「まこと」を言の葉の上
に見分くる力つけたり

うたを詠むその喜びを書きしるし師に寄せに
ける文すばらしき

慰霊祭

榎宝辺商店代表取締役 宝 辺 正 久

み祭りの篝火もえていならべる若き友らとか
うべ垂れつつ

み心をいたつかせまず大御歌をろがみきぎて
みたま思ふも

国のためうせにし人をいたみては詠ましし大
御歌ききまつるかな

星くづのあまたきらめく夜の空を仰げばかな
し亡友しのばれて

(二回目の作品)

最終日の朝

高空にうす雲かかり見なれたる眉山さやかに
わが前に立つ

朝の道ゆけば木むらにしきり鳴く蟬の声さへ
したしかりけり

わが前をあゆむ友らのあとを歩きものはいは
ねど心みつるも

肥後天草ことごとかすみ広らなる海にかがや
く日の光かも

ここに集ひあひかたりたる若きらと別るるけ
ふの海しづかなり

九州造形短期大学教授 小 柳 陽太郎

北島照明君の御令息重治君にあふ

若き日の父君さながらしのばせてさもたくま
しき君がおもわは

病ありて父は来まさねど思はぬにかくもよき
み子に会ふがうれしき

父君に会ひし遠き日ゆ^{ひと}一世代めぐりて若き君
といま会ふ

かしのみの一つごころに父君のみ心つぎて学
びませ君

(二回目の作品)

「全体感想発表」の折に

合宿を終へてしみじみ父母のなつかしくなり
しと語るをとめご

こみあぐるおもひにたへて語りゆくすがたを
見れば涙ぐましも

今年またかくもうましき若きらととも^ひに学び
し幸を思ふも

国民文化研究会事務局長 長 内 俊 平

事前合宿の様を妻へ知らせんとて

朝焼けの雲美しく海上になびくをみつつも床
はなれかねつ

よく晴れし朝なるかな海こえて肥後の山々ま
近くもみゆ

いづくゆく船にしあらむ風ぎわたる有明海に
出でゆく船あり

日のみ旗すみたる空にのぼりゆく仰ぎつつ歌
へり君が代の曲

高空をゆく風強き空に残るすぢ雲切れつつ
空にみだるる

ラジオ体操に背をしそらせば高空にはつかに
残る月かげのみゆ

若きは明日にそなへていくたびも国旗掲揚
をくりかへすかな

(二回目の作品)

わが力つきたる如く講義終へ部屋に帰ればへ
たへたとなる

み友らと力つくせしこの夏の集ひもつひに終
りたりけり

みたまのふゆをみたまなごめの夜の星の輝き
に見つとふ友のことばよ

この集ひ今し終ると君が代を共に歌へば胸こ
みあぐる

この集ひたやしてならじ一人一人心つくして
友を誘はむ

集ひのうちたもちし空も雲たれてしづかに雨
の降り出さむとす

九州女子大学教授 山田輝彦

是松君の短歌導入講義を聴きて

ストロブに燈油つぎつつ更くるまで一首のう
たを直ししはいつ

過ぎし日は夢にかも似るキャンパスに短歌会
せし遠き思ひ出

はや十とせ過ぎにけるかや壇上に短歌入門説
きます君は

みちのくの林檎手にする子らたちの小さき写
真よわれを泣かしむ

ひたぶるに君が教へしまな子らの胸に生くべ
しうたのいのちは

(二回目の作品)

長内俊平さんの発表を聞きて

不可思議の人なり君が人生を語れば涙流れて
やまず

亡き友と並びてゆばりせしことを語ればをか
しくやがて悲しき

孫と共なる舍宿

熱き夜をひとり目ざめて班室に眠れる孫を思
ひつつをり

三十年祖父が続けしいとなみに大学生となり
て参加す

尚綱学園常務理事・事務局長・尚綱大講師

徳 永 正 巳

空晴れて金峯の彼方大阿蘇の山脈はるか雲に
かすめり

四方の岬緑に映えて有明の海静かなり夏空の
下

丘の上の御製碑たづねて乙女等と語らひゆけ
ば心楽しも

(二回目の作品)

心知る友等集ひて語らひし時も過ぎ行き今別
れ行く

国憂ふ友等共々力あはせ世の有様を正し行き
なむ

目ざめたる若き友等と携へて国守らなむいの
ち重ねて

神千代田コンサルタント常務取締役営業本部長

上村 和 男

仁田時へ向ふバス中で

鳥原の子守の歌をバスガイドに習ひつ歌へど
しらべ合はずも

なかなか調べ合はねど友どちはおのがまま
にて楽しく歌ひぬ

若きらのにぎにぎしかる言の葉にわらひとま
らぬバスガイド楽し

(二回目の作品)

田村潔君と会ひて

いくとせも会ひ見ざる君なれどいつにかはら
ぬ笑顔のうれし

会ひ見ても君との語らひ少なけど心のきづな
いつにかはらず

今日よりはみ国の姿正さむと手をたづさへて
進まむもろともに

元日特金属工業株式会社取締役 加納 祐 五

今朝(八月八日)

目覚むればけふは晴れたりたひらぎの海のか

なたに日はいまのぼる

有明の海しづかにて鳥々はかたみに言葉かはすかにみゆ

よき友と今日も語らばあたらしきおもひひらけむわが胸うちに

今宵はもころひとつに靈よばふきよき齋庭に星は降るべし

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」をききて

あふるるおもひただに告げむとつきつきに壇上にのぼる若き友らは

語らむと手をあぐる友らさにはあれど時間となりし口惜しきかな

史的伝統威力をしのばしむ若き友かく思ひかく語るをきけば

日本銀行監事 小田村 四郎

妙見岳展望台

真夏日の空晴れわたり見はるかす四方の景色のあざやかに見ゆ

海の面は波間も見えず日に映えて光れるさまは鏡の如し

天草の島々青く連なりて不知火の海に長く伸びゆく

東のかなたはるかに大阿蘇の山なみかすかに望むを得たり

(二回目の作品)

合宿終了す

快晴の続きし空も薄曇り樹々揺がして秋風の吹く

さまざまの思ひのたけを語り合ひし集ひもけふで終らむとする

親のこと友のこと思ふ心根を養ひ得たりと語る乙女は

その心なければ国思ふ心もなしと語る乙女の言葉すがしも

感動する講師の姿に感動せりと一人の若き友は語りぬ

通ひあふ心のまこと知りたるが嬉しかりきとあるは語りぬ

世の人の悲しみに涙する心こそ真実なりとふ結語たふとし

舞岡八幡宮司 関

正臣

班長として

年齢の差をも忘れて語り合ふ厳しき亦和む我が班

よはひはも孫に類ふ若者よ我が祈りをば受け給ひてよ

(二回目の作品)

長内俊平兄の風呂敷

「我が母の在りましし頃手づからに使ひ給ひし此の風呂敷は」

「亡き母と共に加はるしるしです」と聞きて

驚き見つむる風呂敷

福岡私立東福岡高校講師 小林 國男

小柳志乃夫君の導入講義を聴きて

青年の講師に始まる合宿の導入講義のたのもしきかな

サローヤンの小説を引用し人生の悲しみの意味説き明かすかも

ゲティスバーグの演説のべてリンカーンの真意にせまる君はするどし

憶念の情深き君かなつきつきと述ぶる言葉の身にしみゆくも

(二回目の作品)

お別れの「班別懇談」の折に

とつとつとおのが思ひを語りゆく別れの言葉の心にしみきぬ

こだはりの心いつしか解けゆきてひとつ心になりて別るる

偽らぬ己が思ひをのべゆくは友を信じる姿なりけり

きびしかる合宿行事に乙女らも心かたむけつとめ来にけり

佐賀商業高校非常勤講師 末次 祐司

手をふりて見送る我に合図する班員の顔喜びに満つ

雲仙に登りし班員偲びつつみたままつりの齋

庭つくりぬ

眞夏日に玉なす汗をぬぐひつつ若き友らは齋庭つくりぬ

今宵またこの齋庭に靈よばひ友とまつらむかしこきみ魂を

新しき友も集ひてもるともにみ国を護るみたままつらむ

(二回目の作品)

「班別輪読」にて

おのが胸さく思ひして内にこむ苦しき思ひ班員は語れり

あふれくる苦しき思ひを涙して語ることばに我も涙す

共に聞く班員らの目にも涙あり同じ思ひに苦をば分ちて

班員を思ひ心をこめて交々になぐさむ言葉ただ有難き

亜細亜大学教養部講師 笹部 益弘

集ひきて国の行末語りあふ島原の野は夏盛りなり

かがり火の森の梢にあはく映えまつりの庭に虫の音しげし

(二回目の作品)

合宿最終日の「朝の集ひ」にて

合宿も終りとなりてさはやかに風吹きわたる朝の広場に

ひるがへる日の丸仰ぎ君が代を歌ふひとときに心洗はる

元熊本県砥用東中学校長 北島 道治

緑なす山の問より眺めたる海は真青に雲は明るし

妙見の峰を離れて下りくる友等の姿はるかに見ゆる

今上の御歌説きます師の君の声朗々と澄み響かふ

雨降りに似し音聞きて暁の空をのぞけば星は光れり

(二回目の作品)

孫連れて合宿に行かむと出立てば空も晴れれてうれしかりけり

靄おほふ島原の海に島々の静かに浮び日は明けてゆく

「慰養寮」にて

かがり火は煙をあげて燃えさかり人ら声なく立ちて静まる

おごそかに二拝し終り理事長に合せ打つ手の音の高鳴り

千喜利青少年会館 岡村 義一

心知る友に会はむと島原なる合宿の地にわれ着きにけり

杉檜手入れとどきて林ぬけバスは走りぬ仁田

峠めざし

こぞの年案内たばりし九十九島はるかに見ゆる雲仙の山

(二回目の作品)

友の待つ島原めざしひた進む高速船もおそくおもはゆ

五十年ぶり会ひし友は笑みまして元気ですかと声かけくれぬ

こぞの夏雲仙の地にて会ひましし友はいまさず心淋しも

その友と心通はせ四十年あまりすぐせる日々は夢見る如し

㈱中央塩と製作所代表取締役 星野 貢

大君の歌碑拝さんと三人して心うれしく山路登りぬ

茂り合ふ草木のしげみのそが上に歌碑を押しぬほり深き字の

みやまきりしまの歌碑拝さんとの思ひいま果してわれただにうれしき

(二回目の作品)

相共に語り学べる若きらはほゝをぬらしつ別れを惜しみぬ

寄り会ひて又別れゆく乙女らの明るき姿見ればたのしも

来年は友をさそひつ又会はんと語らふ娘らの

ことばうれしき

元法政大学人事部長 香川 亮二

たゝなはる遠山並はうちけぶりかすみて見え
ず梅雨明けぬれど

窓の外にひろがる稲田夏の日をうけて美し筑
紫国原

亡き友をとぶらはむとて訪ねしは夏の日なり
し思ひつゝゆく

玉の緒の息絶ゆるまで御国思ひたゝかひゆき
けりますらを君は

大み軍の真先に立ちて南溟に散りにし友のふ
る里も近く

先ゆきし友偲びつゝ年ごとの集ひに今年も参
ぜむとして

(二回目的作品)

全体感想自由発表を聞きて

一時も早く父母にあひたしと声つもらせて語
りし乙女よ

一度でも「おやこうこう」をやりたしと歌ひ
し少女のことも語りき

かくまでも母を愛せしことありや思へばはづ
かしと君は語りぬ

父母を思ふ心もなきまゝに学ぶといふは空し
からずやと

はらからをまた友どちを思ひつゝこれよりゆ

かむと君は語りたり

ひたすらに思ふ心よ人の世の生くる力とは
に生くべし

松吉基順
不動産コンサルタント代表取締役

島原の港の沖なる小島はや濃き影おとせり有
明の海に

なぎわたる有明の海に白き船航跡しるく走り
ゆくなり

有明の海のかなたに阿蘇に似たる金峰山は青
くうるはし

有明ひとむらの雲低くたれ夕陽をあびて動く
ともなし

みんなみのかなたに浮ぶは天草の島山なるか
夕陽に映ゆる

(二回目的作品)

島原に共に学びし若きらと思ひのたけを語ら
ひあひぬ

いたらざる我にてあれば若きらは学び得しに
や直き心を

共に学び語りあひたる若きらは今島原を去り
ゆかんとす

航空自衛隊第四術科学校教諭 村山 寿彦

杉木立の細き山路を登山バスは右に左にゆれ
つつ登りぬ

登りゆくバスの車窓の山ぎはの杉の木の間に

白百合の咲く
登りつめ車窓のま下に有明の海は静かに輝き
て見ゆ

天草の島々浮かぶ有明の海はしづまり絵を見
る如くに

(二回目的作品)

学生の「全体感想自由発表」を聞きて

とぎれつつ語る言葉は少なけれど熱き思ひは
伝はりてくる

言葉かず少なけれども真心のこもりし言葉に
胸をうたれぬ

皆の前であつき胸内かたらんと壇上に立てる
姿たのもし

日商岩井㈱大阪エネルギー第一部長

澤部 寿 孫

みちかくも今日の生命を鳴きしきるセミの声
聞く齋庭ゆはにわつくれば

亡き大人の声聞く心地すみおやらのみたまま
つりの齋庭に立てば

友達とかはるがはるにつるはしをふるひて齋
庭のかたちととのふ

(二回目的作品)

合宿最終日の「朝の集ひ」にて

合宿も終りとなりてさはやかに風吹きわたる

朝の広場に

ひるがへる日の丸仰ぎ君が代を歌ふひととき
に心洗はる

九州労災病院神経内科部長 田 村 潔

仁田峠にて

有明の海のおもわに陽の照りて船すべりゆく
跡見ゆるなり

美しく伸びたる木々の並び生ふ林の方より虫
の声聞こゆ

小柳陽太郎先生のご講義をきよて

朗々と御歌よみ給ふ師のみ声のうつくしき調
べ胸にしみ入る

日産自動車働保課長 古 川 修

映画「天皇陛下」を見て

戦ひの災ひうけし国民をはげまし給ふ御姿尊
し

万歳の声おのづからわき立ちて陛下を迎へし
よるこび湧き出づ

雄々しくも立ち上がらんとする人々のよろこ
び我に迫りくるなり

美しき陛下と民の御姿にこころうたれて涙あ
ふるる

(二回目の作品)

合宿に娘と共に参加でき娘の歌をよむはうれ
しき

常日頃学校のこと批判せし娘の笑顔清々しき

かな

君が代を大きな声で歌ふてふ機縁にふれしこ
との尊し

(编者註・お嬢さんがアルバイト高校生の
一人として参加)

拓殖大学教授 松 本 幹 男
こそぞの夏友と遊びし天草の海を偲びてただに
なつかし

眉山の緑仰ぎて二年の過ぎし月日のしみじみ
おもほゆ

(二回目の作品)

ひさびさに友と語りひいつしかに夜も更けゆ
きぬたのしかりけり

新日本製鉄機械プラント事業部長代理

登山

今 林 賢 郁

うすぐもるみ空のかなた連なりて浮かぶ島々
美しと見ゆ

有明の海おだやかにひろがりて天草群島まな
かひに見ゆ

(二回目の作品)

ひたすらに聴きては語りまた聴きて心きたへ
ぬ友らと共に

はりつめてすこせし日々もやうやうに合宿最
後の朝とはなりぬ

ふつつつと湧きくる思ひそのままに緑眺める

る今朝のひとつとき

講談社働告第二部長 磯 貝 保 博

慰霊祭にて

消えなむと見ゆるがうちにたちまちにほのほ
はたくもえさかり立つ

満天に星降る夜のさにはべに静かにひびきぬ
歌のしらべは

(二回目の作品)

長内俊平先生のご講義をお聞きして

なつかしきものいとほしく思ひつつ歌ふ唱歌
のみ声さやけし

防人のおもひ一つに朗々とよまるる調べは胸
にせまりく

神奈川県小田原市立富水小学校教諭

岩 越 豊 雄

妙見岳の急な山道友と二人励ましあひて息せ
き登る

頂きはまだはるかなり苦しくも己れ励まし山
道登る

ゆるやかな山路に出づれば眼下には西海の海
広ごれる見ゆ

頂きに息せきながらも友と二人登り上がれば
心すがしも

山頂に出づれば吹き来る山風の汗ふく顔に心
地よきかな

(二回目の作品)

在日韓国人といふ橋本加枝さん(橋女子大、三年)へ

日本の本がすぎだといふ君に幸多かれとた
だいのるなり

別れ際の握手の折の君が手はぬくもりてをり
あたたかくして

神奈川県立湘南高校教諭 山内 健 生
語らひて歩みてあればホホケキョといづこと
もなく聞えくるなり

ここかしこまたカナカナと聞えくる鳴く蟬の
音に友とたたずむ

(二回目の作品)

澤部壽孫兄が「インドネシア出張とこの合宿の
日程重れども上司に告げて合宿参加の了承を得
られし」と聞きて

出張は余人でかなへど合宿は自分でなくては
無意味と説くとふ

会社での責めを果たすは合宿で学びしゆゑと
上司説くとふ

さぞやさぞ日々つとめの旺んなるいさをの
ありしぞかくのたまふは

にちにちのつとめはたさるみ姿の雄々しきさ
まの思はるるかな

福岡県立新宮高校教諭 小野 吉 宣
屋上ゆ有明湾を眺むれば海面静かにつり船浮

ぶ

島原の港近くの小島には松おひしげり緑色こ
し

波たたぬ海の向ふにはるかなる筑紫の山々雄
々しくつづく

おだやかに静まる海を眺めつつ誦しまつりぬ
大君の歌

(二回目の作品)

来年は大ぜいをさそひ来たらむと一人の鹿大
生言ひしがうれしき

師の君も新たな力得られしときけば嬉しも我
もさうなり

中島法律事務所弁護士 中島 繁 樹

映画「天皇陛下」

四たび観し映画はすでに憶えしも見入れれば今
日も涙出で来る

班友が涙の出づるここちすとこもごも語るを
聞くはうれしも

(二回目の作品)

日の丸の御旗は風にはためきて青空のもとひ
るがへる見ゆ

九大循環器内科講師 小柳 左 門
澄みとほる朝の気清しくそびえ立つ眉山の木
々の緑しるけし

おのづから心も清し青あをと澄みわたりたる
空を仰げば

友みなの声にあはせて朝空にのぼりゆくなり

国のみ旗は

外務省大臣官房機能強化対策室首席事務官

加来 至 誠

班別討論にて

去らむとふ友に向かひて君ここにいますかう
れしと語りし友よ

君ここにいますすがうれしとのたまへる友のこ
とばの尊かりけり

妙見岳にて

平らぎし鎮西の海西をさし海原越えし人のし
のぼゆ

この海をわたらむとしてその願ひむなしく果
てにし人らしのぼゆ

(二回目の作品)

窓ガラスあくれば吹き入る朝風の何と清しき
文書きをれば

慰霊祭準備

熊本市役所 折田 豊 生

慣れぬ手につるはし持ちてかはるがはるいみ
竹立てむと穴を掘るなり

このにはに亡き師亡き友迎へむと思ひつつ見
る夏空の雲

(二回目の作品)

潮引きて島々の磯あらはなり真夏日照らす有
明の海

八人の友らとともに過ごしけり学びのつどひ

に胸満たしつ

このにはかはししなさをりをりに想ひ出
でつつとめゆきなむ

講談社校閲第三部副部長 藤井 貢

諫早駅にて

はからずも先輩のみ姿認むれば合宿に向ふ喜
びましぬ

あいさつを交してをれば学生を連れ来りたる
後輩もをり

島原外港棧橋前にて

炎天下バスターミナルに友どちは我ら迎へん
とバス辺に待ちをり

ハンドマイク片手に呼びかくる友どちの姿し
見ればただありがたし

山田先生の御講義を聴きて

友皆に別れの漢詩遺したる若き鷗外の心意気
はも

欧州に留学に向ふ鷗外の心高ぶり伝り来るも
(二回目の作品)

山田輝彦先生の講義を拜聴して

鷗外の文を我らに説きたまふ師のみ言葉はは
ずむがごとし

挫折せし鷗外の心に迫りたる師のあたかき
目差し感ずも

師の君のみ言葉たどりて我もまた明治の人の
文を読みなむ

「こえたね」と我によびかくる声聞きて振り

返り見れば山田先生

師の君の「海のご多」てふ御歌集をいただき
しこと思ひ出せり

あまりにも重きみ歌のかずかずに答へんすべ
なしたなき我は

「いいのだよ」と慰さめ下さる師の君に返す
言葉のしばし出でこず

師の君のご講義聴きえしよろこびは私の心に
沁み入りにけり

福岡中央高校教諭 占部 賢 志

合宿に遅参し、小柳志乃夫君の講義途中に
入室して

演題に生者と死者の絆とふ言葉しるくも掲げ
てありき

壇上に君立ちまましてサローヤンの書とり上げ
て語らむとせし

戦死の報配達しゆく少年の心のゆらぎ君しの
びゆく

ひとときのまどの楽しむ家族のもと報せ告げ
ゆくかなしきつとめ

戦死の電報よみつつをらむ家族しのび自転車
駆くる少年ホーム

かなしみを抑ふるすべなく駆けめぐりイサカ
の町並眼にをさめしといふ

この町も住む人々も今にして本当に知りし心
地せしとふ

かくの如涙ながらに知るといふことはあるな
りと君訴ふる

(二回目の作品)

普ての教へ子・田鍋彰司君(西南学院大二年)に

わが部屋に君たづね来て友を得しよろこび語
る顔かがやけり

門司高校教諭 坂 口 秀 俊

是松君の講義をききて

毎日の和歌創作で児童らをいとしみはげまし
導きたまふか

うれしげに教へ子の作りし連作の短歌よみゆ
く御声すがしも

短歌にて心と心は通ひあふと声高らかにいひ
たまふなり

(二回目の作品)

長内俊平先生の御講義での「友」といふことは

に占部賢志君を思ふ

ひとたびは不参加のむねしらせしに友は電話
で参加うながしぬ

くぐもれる心もはれて今はただ友のなさを
ありがたく思ふ

熊本県立第一高校教諭 白 浜 裕

事務局にて小堀先生の御講義を拜聴す

スピーカーを通して聞ゆる師の君のみ声に思

はずペンをとどむる
いざといふときに備へてまごころをきたへお
くべしと師はたまふか

(二回目の作品)

この次は学生として参加せんともごも生徒
等のいふはうれしき

熊本県立球磨農業高校教諭 田之上 正明

仁田峠登山に行く班友へ

晴れ上がり見はらしよからむ妙見ゆ見おろす
ふもとや青海原は
よき景色染しみて来よ雲仙にはじめて登る班
の友らよ

(二回目の作品)

是松秀文君の「短歌創作導入講義」を聞きて

日頃より君の教へし子供らの言葉を聞きて心
うたれぬ
子供らは二歳つづけし歌よみのあとふりかへ
りてすなほに記せり
子供らの事話しゆく君の声聞けば心もすがし
くなりぬ
子供らの日々の体験残せしはすばらしきこと
と思はるるか

山口県立高森高校教諭 宝 辺 矢太郎

児島先生の御講義で「In prison for life」

「Death by hanging」といふ言葉をおぼ

きし映画「東京裁判」を思ひ出す

戦犯とふ呼び名いまはしも次々と呼ばれしま
まに前にすすみぬ

かはるがはる告げられしフレーズ冷たくもひ
びきわたれり裁きの庭に

判決をうけし人らみな一礼しもだして消えぬ
通路の奥へ

たんたんとせしそのふるまひまことしもます
らをぶりとよぶべかりける

傍聴席の家族に別れのまなざしを送りて消ゆ
る人のありけり

まなざしを見つむる家族のころはもいかば
かりかと涙ぐまるる

(二回目の作品)

折田豊生先輩とともに「短歌全体批評」の

準備をせし折

しんしんとふけゆく夜半を二人して歌稿よみ
ゆくは楽しくありき
つたなかる吾をはげまし次々とうたただしゆ
く先輩ありがたし
ときをりにうたのをかしきに笑ひ合ふなごめ
るとき何とたのしき
しらじらと夜の明けゆくも寝たまはずつたな
き吾を助けたまひぬ

佐賀県立神埼農業高校 名 和 長 泰

朝に

金色に輝く海に天草の島かげ淡くかすみ浮か

べり

(二回目の作品)

児島裏先生、小堀桂一郎先生のお迎へにゆきて

「友よ」とふ水茎しるけき垂幕のかかれる宿
に案内し終りぬ

日本青年協議会 多久 善 郎

屋上より西の方を眺めて

故郷にむかふ海原なぎわたたりなつかしき山ま

むかひに見ゆ

幼きゆゆぎ親しみ登りこし思ひ出の山金峰山
よ

かの山の頂きに立ち雲仙に沈む太陽友らとな
がめし

沈みゆく美し太陽惜しみつつ友らと黙しながら
めをりにき

美しきものひとすぢに求めにし少年の時忘る
事なし

若きらの胸に宿りしひたぶるの思ひ信じつこ
の地に今あり

(二回目の作品)

来るたびに己が心のいたらなさを気づかせく
ださるこの大き合宿は

金文図書出版販売 廣 木 寧

ときをりに君語りしもサローヤンはかくもか
なしき物語書く

サローヤンはかく歴史もつ民族の生れなりし

かかなしき文書く

(二回目の作品)

歌稿に吉村浩之君の和歌を見出して

歌稿のページをくりつ君の名と歌をさがしぬ
心せくさま

二首の歌見出しうれし合宿に寄せる思ひのあ
つきをしのびつ

くれなむ西に向ひて君が眼ははるか島原を
ながめやるとふ

福岡県立香住ヶ丘高校教諭 藤 寛 明

合宿を中途で帰る我に

ひとりゐるわが妻に渡せよと導入講義のテー
プ託さるる

妻思ふ心や深しさりげなき先輩の言葉に心う
たるる

大分県立大分豊府高校教諭 石 井 雅 晴

小柳先生の御講義を拜聴して

御説をば声高らかに読み上ぐる師の声いつし
か震へて聞えり

感窮まり声を詰らせ堪へ立つ師の御姿をえ見
ず俯く

涙啜る音をちこちに聞きながら涙堪へて御説
を読みます

(二回目の作品)

長内俊平先生の御講義で、故青砥宏一先生との

御友情のお話を聴きて

良き友のありて初めて人生は豊かにならむと
師はのたまひぬ

五十八にして竝びてゆばりはなつとふ師の交
りのうらやましく思ふ

長崎中央郵便局 橋 本 公 明

事務局を担当して

初めての任務をうけてとまどふも皆の助けの
有難きかな

防衛施設庁 山 根 清

二日目夜、松坂普一君合宿に参加してくれて

やうやくに待ちにし友は夜遅く合宿地にぞ集
ひ来ませり

ひさびさに会ひ得し友は陽に焼けてたくまし
げにも思ほゆるかも

しきしまのやまとことのは共々に集ひて学ぶ
ことぞうれしき

(二回目の作品)

「班別短歌相互批評」の折に

歌に見る友の思ひを偲びゆくは難き作業と切
に思ひぬ

夜も更けてもよほす睡気をはらひつつ友よみ
し歌の添削つづける

白々と夜はあけそめてやうやくに友らのみ歌
直し終りぬ

(特)日本興業銀行国際業務部副調査役

小 柳 志乃夫

宿の灯に誘はれたるや明けし窓ゆ蟬飛び入り
て声高に鳴く

飛び入りて羽音激しく鳴く蟬を先輩放ちます
再び三度

閉させし窓にぶつかる蟬の鳴き声を聞けば幼
き吾子思ひ出づ

閉ざしたる戸をば開けよとひた泣きし吾子い
とほしく思ひやるかも

(二回目の作品)

長内俊平先生のご講義中、故青砥宏一先生の歌
を誦まるるを聞きて

亡き友の遺せし歌を師の君は誦み上げたまふ
声震るはせて

亡き友のみうたよみます師の君のみ声とぎれ
ぬあふるる涙に

亡き友をひたに慕はるる師の君の御心かなし
く偲びまづるも

北九州市立八幡病院 森 田 仁 士

蟬しぐれしげき広場に友どちと斎庭つくり
汗を流しぬ

照りつくる陽射しをうけつつつるはしを振は
るる先輩の姿たふとし

(二回目の作品)

「慰霊祭準備」に協力して下されしホテルの広
瀬主任へ

発電機のエンジンの音大きくていかにせむか
としばし惑ひぬ

穴ほりてその中に入れて音消さむと君はすば
やくつるはし持てり

汗かきて作業しうれしも音いまだ大きからむ
かと案じくれたり

君はまたあまたのコードを探し来て広場のき
はまで延ばしくれたり

虫の音のすだく庭辺の霊たままつりいとなみ得し
は君のおかげぞ

（俳） 俳鉄川工務店主任 池 松 伸 典
合宿教室事務局にて

事務局は初めてなれば思はざる仕事も舞ひ込
み気持せかさる

ときをりに筆を休めてスピーカーに耳かたむ
けて講義聞くなり

大兄の講義の声を聴くほどに胸にひびき来君
が思ひの

（二回目の作品）

今ごろはみ友らあまた集ふらむ仁田の峠に思
ひはせつつ

大阪府立東寝屋川高校教諭 絹 田 洋 一
口数の少なき友はとつとつと語り出だしぬ思
ひつつまず

（二回目の作品）

長内俊平先生の御講義をお聞きして

釜の底に残りしおこげをむすびにして幼き大
人に与へませしか

「ごめんね」とふことばにこもりし母上の心
思へば涙流るる

うまきものを子に食べさせてやりたしとふ親
の心のありがたきかな

「これほどに尊きものありたりや」とふ御
声高しも叫ばれるごと

（俳） 浜の町病院内科医師 長 澤 一 成
小柳志乃夫先輩の発表を聞きて

いやしげきつとめのなかを発表にそなへつづ
けし先輩壇上になつ

しづかなるひびきの中にひとのよのかなしみ
語る先輩の御声よ

流れ落つ涙拭はずひたはしる少年の姿眼に浮
ぶがに

（二回目の作品）

君が代の響たかしも友みなの集ひて歌ふ声重
なりて

福岡県立筑紫丘高校教諭 酒 村 聰 一 郎
かがり火のあかあか燃えてみ祖らのみ魂祭りの
今はじまりぬ

北斗七星の光さやかにみ祖らの祭りの庭の上
に輝く

先人の遺しゝみうたたたかからかに祭りの庭にひ

びき渡れり

（二回目の作品）

長内俊平先生の御講義を聞きて
子を思ふ親の心を若きらに教へ悟さるるみ言
葉尊し

並び立ちゆばり放ちしそのさまを語り給へり
童のごとく

若きらを友と呼ぶるゝ師の君のみ言葉聞けば
心なごみぬ

（俳） 日本青年協議会 前之園登美子
小堀先生へお礼のことばを述べられる山田先生
のことを

師の君の使はれし書を言ひ添へてあやまり給
ひし言葉すがしも

国守るを説かれし師のみ体を気づかふみ声し
み入るごとく

（二回目の作品）
胸内の思ひを言葉になし得ずてか黙しをる後
輩は何悩むらむ

合宿にくる前ひとり小さき胸を痛めて後輩は
日々過ごせしか

二浪して夜間で学ぶ後輩に苦しきこともあま
たありけむ
率直に涙ごぼして語りたるのちの笑顔にすく
はるる思ひす

福岡県立玄洋高校教諭 矢 永 誠 二

映画「天皇陛下」をみて

自らも坑内にはひりて坑夫らに励ましの言葉
かけられ給ひぬ

おもはずもわき上がりたる万歳に手をあげら
れてこたへ給へり

手を振りて迎ふる人にこたへらるる御姿仰ぎ
涙のこみあぐ

(二回目の作品)

「班別短歌相互批評」の折に

まごころをかたむけ歌をなほさむとつとむる
友らのいとほしきかな

口々に歌詠むことのよろこびを語る友らのお
もかがやけり

つたなかるわれの歌をもなほさむとつとめて
くれたることありがたし

日本油脂 上村 栄章
遠く見ゆる故郷の山ながめつつ父母いかにと
偲ばるるかな

(二回目の作品)

去りゆかむ我を見送り玄関に手を振る友のあ
りがたきかな

指揮班の仕事の合間に語り得し友の言葉は忘
れかねつる

那覇防衛施設局 神谷 正一

映画「天皇陛下」の御巡幸の場面を見て

しつかりねと民見舞ひ給ふ大君の御姿のただ

ありがたきかな

力強き御歩みもてみ民らのなりはひの場を訪
ね給へり

大君のゆき進まるるその道にわれもわれもと
民のあふるる

(二回目の作品)

長澤一成運営委員長「所感発表」を拜聴して

人生の依りどころたる真実を持ち帰れとぞ先
輩の云ふ

松陰の言葉用ひ先輩は努力すべしと促したま
ひぬ

雄々しくもかく語りたる先輩の言の葉胸に学
ばんとぞ思ふ

朝日章工業専務取締役 藤新成 信

「朝の集ひ」の折に
すみわたる青空の下合宿の朝の集ひは行はれ
たり

島原の山に真向ひ並び立つこの朝の間の何と
すがしき

(二回目の作品)

「朝の集ひ」の折に

すみわたる青空の下「おはやう」の声のとび
かふ朝の集ひは

島原の山に真向ひ並び立つ友らの顔の何とす
がしき

福岡市立弥永小学校教諭 是松 秀文

短歌導入講義を終へて

リハーサルで原稿読みつつ話せども心こもら
ぬ言葉となりぬ

目の前の友にとどげと思ひつつ心尽して語り
ゆくかな

深く思ひ語りゆくことの難かしさ講義終はり
て感じゆきたり

佐賀市立金立小学校教諭 前田 かおる
はれやらぬ心のままに一日を終りし友は苦し
かるらむ

(二回目の作品)

もどかしく言葉にならぬ胸の内を涙浮べて友
は語りき

輪になりて友どちの歌一首づつみなでなほせ
ば心かよひぬ

朝扶桑社 取知 浩一
小柳志乃夫先輩の御講義を聞きて

いとし子も夫も戦で失ひし母の気持ちのいか
ばかりかも

幼な子をかかへながらも一人で内職されし
かなりはひのため

悲しみの中にありても遺族らの事のみ思ひて
生きてたまひしか

海原に向ひてみ霊に叫ばるるみ姿思へば悲し
かりけり

(二回目の作品)

長内俊平先生の御講義の折に

み友らに語りかけたる師の君の言の葉ただに
ありがたく聴く

友を持ってこころ交はず友持てと師はのたまひ
ぬ力強くも

ありし日に友とのつき合ひたまひにしそのさ
まこまかく語り給ひぬ

今は亡き青砥先生のみ歌読むみ声のつまれば
涙わきくる

門司北高校教諭 演 田 清 人

仁田峠より西の方、橘湾（千々石湾）を望む

むら雲を透かす陽射しの帯のごと千々石の海
に降りそそぐなり

（二回目の作品）

映画「天皇陛下」を鑑賞して

遠くより若き国民集ひ来て宮居の内を清めし
といふ

天皇は親しく庭に立ちまして集へる若きらを
ねぎらひたまひぬ

天皇を見送るなべに歌ひてし君が代に大御耳
をかたむけましぬと

国敗れ異国の気風浸み来れど君と民との絆は
途絶えず

フリーランスコピーライター 布 瀬 千代子

松本幹男先生の御講義を拜聴して

師の君の壇上に立ちし御姿をあふげば心高ま

るを覚ゆ

天皇を慕ひて生くる師の君の深きみ心胸にし
み來ぬ

（二回目の作品）

加納祐五先生の御講話をお聞きして

師の君のみあと慕ひて一信海に入りて生きた
しつたなかれども

島原の海を望みつ

遠かすむ海原のおく白き船過ぎゆくが見ゆ夏
の夕べに

日本真空技術術 北 濱 道

是松兄の短歌創作導入講義を聞きて

お話しを聞きゆくうちにおのづから心洗はる
思ひするかも

（二回目の作品）

「全体感想自由発表」の折、登壇せる友を見て

登壇後心見つめるかうつむきてしばし黙しぬ
声をつまらせ

声をつまらせ言葉を選びつ「本当は合宿来た
くなかつた」と語り出しぬ

しかあれど相互批評のやりとりは深く心に残
りぬといふ

拙なかる自分の歌を班員皆が心を寄せ合ひ直
し行くとふ

涙流し言葉少なに語りゆく友の姿に胸熱くな
る

陸上自衛隊第八師団第八通信大隊

吉 村 浩 之

大矢野演習場にて

夕暮の歩哨に立ちて西方を見れば遙かに有明
の海

夕闇かすみはじめし海原に島原の火は光りは
じむる

（二回目の作品）

「朝の集ひ」の折

雲仙の山は朝日に照り映えて木々の青葉のあ
ざやかに見ゆ

あざやかに映ゆる青葉を背景に風にたなびく
日本の旗

早稲田大学博一 八 木 秀 次

慰霊祭

師の君の読みあげらるる大御歌聞き入り思は
ず目を閉ぢにけり

（二回目の作品）

「全体感想自由発表」にて

迷ひつつ参加をせしも「良かつた」と語る言
葉をうれしく思ふ

もろともに校歌うたひておのづからつながり
覚ゆとふ夜の集ひに

壇上でたのもしく語る後輩の姿に胸の熱くな
りゆく

学校法人徳山教育財団 中 村 道 陽

長松先輩の短歌創作導入講義を拜聴して

和歌詠みて心と心が通ひ合ふ体験せりと兄はのたまふ

のたまひし兄の言の葉聞きをれば和歌詠む喜び胸にこみあぐ

(二回目の作品)

和歌を詠み和歌を学びて豊かなる心育てむ励までやむべき

福岡県立山田高校教諭 與 島 誠 央

二日目の夜

班長の会議のありて夜遅く部屋に帰れば皆安寝せり

安らかに眠れる部屋に電灯を点け得ずそつと床を捜しぬ

むつくりと床より起きてあそこですと吾の床示す班員ありき

数時間帰らぬ吾を横になり起きて待ちしか君はいままで

(二回目の作品)

長内俊平先生の御講義の折

たまきはる命のきはに友を呼ぶうたつくります青砥先生かなし

にしじり字をあはれみたまへと詠みたまふ青砥先生のみ歌かなしも

西南学院大学聴講生 日比生 哲 也

島原の海を臨む

夕なぎのほのかにかがやく海原に浮かぶ小島を飽かず眺むる

(二回目の作品)

「短歌相互批評」の折に

友どちの創りし歌に思ひ寄せ言葉交はずはたのしかりけり

船窓の間近に飛び来るものありて幼き子ども驚き声挙ぐ

(二回目の作品)

事務局にてスピーカー越しに「全体感想自由発

表」を聞く

本当に来てよかつたと涙ぐむ乙女の声の流れくるなり

率直に心の内を語らんとすれども言葉のなかなか出でこず

来年もやつてきますと張りのある男子の声を頼もしく聴く

日本青年協議会 田 中 和 子

小柳陽太郎先生の御講義を聞きて

おほみうた声高らかに師の君は誦み上げ給ふしらべゆたかに

おほどかなしらべなりとて笑みたたへ語るる師を見つづうれしき

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」を聞きて

涙して「来てよかつた」と壇上で述ぶる言葉に胸あつくなる

早稲田大学教育四 大日方 学

妙見岳登山

登りゆく友等に声をかけられて我も行かむと足を踏み出す

頂きに登りつめれば心地よき風の吹ききてすがすがしきかな

静まれる有明の海に日は照りて鏡のごとくかがやきてをり

(二回目の作品)

長内俊平先生の御講義をお聞きして

『青砥通信鈔』の最後のページを開かれてしはしは静かに見つめられけり

ご逝去の前々日に詠まれしとくり返しのため遺されし御歌のいくつか読まれゆく御声は涙に震へたまへり

いまは亡き青砥先生の御顔のなつかしく思ひ出されぬ御講義を聞きつつ

中央大法四 秋 山 信 之

輸入されし過去否定はただやり切れぬ自己嫌悪のみを生みだせりとふ

(二回目の作品)

「最後の夜の集ひ」の出しものを討議中、時間的制約等について話をした折に

班長には立場もあるからそのことを考へてやらうとある友のいふ

心こもる一言聞きて我が心に暖かきものしみじみと湧く

我もまた君の如くに人の身になれる心を鍛へ持ちたし

蜂屋 榊 松 吉 基 光

重き荷を背負ひて向ふ島原への足取り重く長き道のり

私の顔見つけ来られし先生方の笑顔と言の葉ありがたしと思ふ

期待をばしてゐるよとの声かけられ大丈夫ですと胸をはりたる

(二回目の作品)

「慰霊祭」にて

曇りたる空は次第に晴れゆきて星くづあまた輝きわたる

亡き伯父のみ心しのび我が父と共に列しぬこの慰霊祭に

(編集者注・「伯父」は国文研の道統の母体となつた戦前の日本学生協会員で学徒出陣され戦死された松吉正資氏)

あとがき

秋も日毎に深まってまゐりました。皆さんその後いかがお過ごしでしょうか。広やかな有明海を見おろす島原で共に学び合った「合宿教室」から早や三カ月が過ぎやうとしてをりますが、やうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来ることになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に「走り書き」して戴いた感想文と和歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班付（社会人班の場合は班長）の方々（国民文化研究会会員の助言者）に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のもった文章・和歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使い、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々とした言葉に心を打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ページの数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二) 「和歌」について

合宿では二回にわたって和歌をつくりましたが、第一回目ものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊子の巻末の「和歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につけていただいた第二回目の和歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班付および社会人班の班長の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中心で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力

をいただきました加来至誠、磯貝保博、藤井貢、畷知浩一、布瀬千代子、佐川友一の諸氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成に御協力いただいた国民文化研究会会員の諸氏、および第一回目の和歌の編集にご尽力いただいた福岡の酒村聰一郎、矢永誠二、是松秀文、與島誠央さんに厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は福岡の土谷忠臣さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がったこの感想文集を、ご精読下さるやう切願ひしてやみません。

「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦って来る事と思ひます。三カ月前に島原で得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、合宿教室で得た真に語る友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班付（又は班長）の方々に一筆御礼状を差し上げていただきたくお願ひ致します。

（上村栄章記）

〔資料〕

第三十三回 “合宿教室（島原）” 感想文集

非売品

昭和六十三年十月三十一日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七一〇一八 柳瀬ビル

電話 〇三五七二一五二六〇七

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 上村 栄章・福島 徹男

北浜 道・八木 秀次

吉川 理夫・國分 俊喜

秋山 信之・大日方 学

